

人生・生き方 2020～2022年

生き方が変わる

私のブログ記事には、「人生・生き方」にかかわるものが多く、この冊子のようなものも10冊を超えそうだ。2020～2022年も多くの記事を掲載した。その中で、最も多いのは「老」に関わるもので、別の冊子にするつもりである。今回は「老」関連を除いたもので編集した。

項目を並べると、「べきだ・あれもこれも・しなやかに」「嫉妬」「愛」「難題に直面する時」「シングルの方」「沖縄若者と職業選択」「住a家を買う・建てる」「住b私たちの住宅」「住c生活の工夫」「生き方が変わるa～e」となるが、最後の「生き方が変わる」が最大なので、タイトルもそうした。

私としては、かなり思い切った提案を含んだものがあると思っている。少しでも、参考になればと願っている。

2022年11月

目次

「べきだ」・「あれもこれも」・「しなやかに」	2021年03月13日～4月19日	6
1. 三つのタイプの考え方・議論		
2. 「べきだ」を促進するもの		
3. 「べきだ」と権威主義		
4. 「べきだ」のなかで、自分の考えを作らない、持たない		
5. 「べきだ」からの卒業 見知らぬ世界との出会いで「あれもこれも」の登場		
6. 出会いと発見 「あれもこれも」から「しなやかに」へ		
7. 自己を持ち主張する		
8. 「あれもこれも」から「しなやかに」への移行をもたらすワークショップ		
付1 私の冗談のコツ・作法	2020年7月21日	
嫉妬	2021年04月24日～5月10日	13
1. 「嫉妬」という言葉になじみがなかった私		
2. 競争・序列のなかで「嫉妬」が広く生まれている現代		
3. 子どものころにもちやすい競争・勝負・序列へのこだわり		
4. 成人期まで持ち込まれる競争と嫉妬		
愛	2021年05月21日～2021年06月16日	16
1. 愛は学ぶもの育むもの		
2. 愛と友情 愛と憎 動物・物事と愛		
3. 感性レベル、知性レベル		
4. 信条・規範・原理としての愛		
5. 身体・行動レベル 性的関係レベル		
6. 愛情を学び育むきっかけとしての出会い、恋、共同作業		
難題に直面する時	2021年06月30日～07月21日	23
1. 「真正面から」「保留する」などいろいろあるが		
2. 正面突破を選びがちな若い人		
3. チャレンジ体験が少ないまま、大人になっていく		
4. 試行錯誤を大量にする体験が不可欠		
5. 可愛い子には旅をさせよ		
シングルの生き方	2021年02月03日～02月23日	27

1. 多様なシングル生活をしている人が多い
2. シングルの人達が営む生活共同体・生活単位
3. 家制度からの卒業がなかなかすまない
4. シングルにしてもカップルにしても多様な形の創造へ
5. シングルの生き方の模索創造 つながりの創造と結び合う
6. シングルの生き方で考えたい多様な面

沖縄若者と職業選択 2020年11月19日～12月22日

32

1. 農業などの自営と「勤め人」
2. 本人の希望の形成と保護者の言葉
3. 友人知人先輩、学校
4. 実業系学校
5. 産業動向（求人動向） 業種特性
6. 歴史的変化1
7. 歴史的変化2

付2 HPに「人生・生き方2016～2019」の掲載 2020年04月12日

住a 家を買う・建てる 2021年07月27日～2021年08月17日

39

1. 20世紀後半の大量生産大量消費型商品としての住宅
2. 大量生産大量消費感覚の住宅から脱皮
3. 土地造成
4. 「狭いながらもマイホーム」≡「ウサギ小屋」から脱け出ようとするが
5. 建築士に依頼する建築

付3. 家・家族の継承ができない例が増えてきている 2020年11月11日

住b 私たちの住宅 2021年08月24日～2021年09月23日

44

1. 試行錯誤のなかで、私たち流が生まれる
2. 住宅との私たちの付き合い方
3. 自然と結び合う住宅 動植物 風 光
4. 空気 景観 水・雨
5. 森との境界 土質 基礎工事
6. インフラ 近隣との付き合いスタート

住c 生活の工夫 2021年09月29日～11月16日

50

1. 「台風」対処

2. 風・雨
3. 暑さ対策
4. 日差し対策
5. 玄関まわりの設定
6. 建物周りの埋め戻し沈下の苦難
7. インターネット環境
8. 装飾品配置

生き方が変わる A 2022年2月23日～4月15日

56

1. 身近な変化 ケアの仕事 スローライフ（ロハス）
2. 「成長」と「定常化」 社会の変化
3. 量と便利さ 道と人間関係
4. 住宅 高等教育費
5. ハードからソフトへ
6. 人口増減と人間関係
7. 移動と人間関係
8. 人々の移動と生き方の転換
9. 長寿化傾向
10. 「成長」、「弱まる」「老いる」とは異なる見方の登場

生き方が変わる B 2022年4月21日～6月8日

64

1. 人間関係の拡大複雑化
2. 多様な場・組織が生まれてくる
3. 場と組織
4. 組織と個人の関係
5. 組織・場の違いがつくる人間関係の変化
6. 人間関係のつくりかた
7. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方1
8. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方2
9. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方3

生き方が変わる C 2022年6月14日～8月1日

71

1. アラシックスとアラサーの新しい生き方への挑戦
2. スローライフへ
3. 「成長」に囚われる
4. マニュアルに沿った行動 「べきだ」「しなければならない」

5. ガンバリズムへの様々な対応
6. ガンバリズムを促す関係 権威主義
7. 生き方を変える過渡期
8. 生き方を変える年齢時期 アラサー
9. 生き方を変える年齢時期 アラシックス

生き方が変わる D 2022年8月7日～9月30日

78

1. 経済成長期時代の「標準」人生構図
2. 経済成長終了後の多様な人生展開
3. 職業・仕事をめぐるかつての「標準」が変わる
4. 職業・仕事にかかわる新しい生き方の模索が続く
5. 家族をめぐる人間関係について考える
6. 合意にもとづく対等協同の人間関係の家族における展開
7. 家族メンバー間の関係の更新・再契約 長幼秩序
8. 長幼秩序 タテ型とヨコ型関係
9. 自己の身体を自分でケア・管理調整していく
10. 標準と自分なりの創造とのからみ

生き方が変わる E 2022年10月6日～30日

87

1. モデルを目標にする生き方
2. 「一番になりたい」 競争・序列のなかに目標を見いだす人
3. 子どもの生き方と親子関係
4. 時代変化と生き方変化
5. 少子高齢化のなかでの生き方の変化

「べきだ」・「あれもこれも」・「しなやかに」

2021年03月13日～4月19日

1. 三つのタイプの考え方・議論

「年寄りには、自分の考えに固執して、～すべきだ、～であるべきだ、を乱発する」という見方（Aと呼ぼう）に出会うことがある。でも年寄りに限らない。若い人にも多い。「まじめ」タイプに多そうだ。

対照的に、いろいろな考えに接するなかで、自分の考えをどんどん変える人は、「節操がない」「自分がない」などと非難を浴びそう。いろいろな考えを聞くと、「これもいい。あれもいい」と迷って、「皆いい考えだから、全部取り入れたい」などと思う事さえある。（Bと呼ぼう）

この二つの双方の「良さ」を取り入れて、柔軟にいろいろな考えをとりいれつつ、なお自分流の考えを貫くという「しなやかに」「したたかに」対応する人もいる。（Cと呼ぼう）

教訓話、道徳話などには、Aが多い。特に近代以前から現在に伝えられているものには多い。宗教にも宗派の違いがあってBCもあるが、Aが多いだろう。法律にも、Aの表現をよく見かける。政治でもAでの議論によく出会う。

時には正反対の主張だが、互いがAのやり方の議論を展開することも多い。「～すべきだ」「～すべきではない」といった形の議論や、複数の考えが出て、どちらが正しいのか正しくないのかという議論だ。◆は他の考えより「有益だから」「正義だから」「真理だから」◆にすべきだ、という議論もある。そんな場で、Bの形で発言したら、どこかにぶつとばされそうな雰囲気さえ感じさせる。「八方美人」的だ、「日和見」だとかいわれ、自分の考えを「もたない」「すぐに変える」ということで評判を落としそう。

宗教、法律、政治に限らない。普通の議論でも、Bでは自分の考えを通そうとしない「軟弱」な人といわれそう。私のワークショップでは、意見が変わることを認めるどころか推奨さえするが、Aの人には毛嫌いされそう。Aの人は、相手を「説き伏せよう」と戦闘的になりやすい。そのため、相手との戦闘をするために、自分の出番を多くしようとする。ときには、長時間にわたって場を独占する。「長話」の人には、そういう人が多い。

2. 「べきだ」を促進するもの

Aは、「～すべきだ」と主張する人がいるだけでなく、それを受け入れる人、聴くことを好む人がいるから、広がる。

現在の日本では、Aを大切だと思う人が多数を占めているように見える。そうなっている一つの理由は、これまでの学校教育によるものだろう。代表的なものには、戦前の「修身」があるが、戦後の道徳教育にも、それをひきずっているものを見かけることが多い。

創造を重視する学校、とくに共同創造を重視する学校では、Aでは上手くいかないが、そうした学校は日本ではまれな存在だ。創造を重視する大学、わけても大学院、またインターナショナルスクールやフリースクールなどは、そうした例だろう。しかし、小学校から大学までの大多数では、Aを基調として権威あるものに従い従わせる権威主義的な教育がはびこっている。

日本で行なわれている授業の大半は、教師が「正しい」ことを話し、生徒はそれを黙って聞き記憶するという形にとどまっている。「そうあるべきだ」という強固な秩序が前提となって展開されるからであろう。そうした古い体質が強い所ほど、権威主義になりやすいが、それを「当たり前」だと思い込んでいる教師も生徒も多い状況にある。

また、Aは大量生産大量消費のありようになじみやすい、ともいえよう。形・機能などが規格にそった同一物を、ベルトコンベア式に製造する大量生産である。消費者もまた大量宣伝情報によって、同一物を消費する。その結果、日常生活も規格に沿って大量消費するありようになっている。テレビや新聞などのマスメディアによる情報伝達も同じようなものだが、それらの支配力は強く、人々がその流れに逆らうのは難しい。

Aを強調する修身や道徳とは対照的だと見る人が多い「科学」や「学術」の世界にも、「事実」「真理」「正しさ」を主張する形で、Aが広く見られる。その結果、意外と権威主義が強くなり、学界の権威ある人に従う空気が蔓延しがちだ。ところで、近代に入るところ以降、科学と宗教との闘いが激しく展開され、科学勝利の色合いが徐々に強まっていく。その中で、宗教、さらには宗教的色彩の強い修身・道徳も、科学・学術の衣をまとって登場することが多くなる。

科学・学術における「～は事実だ」「～は正しい」という論法は、宗教などが多用する「～べきだ」とは対照的とみられやすい。しかし、双方とも、主張すること以外のものを排斥し、それと戦うという形では類似している。

3. 「べきだ」と権威主義

Aは、「～すべきだ」「～であるべきだ」という形をとったいくつもある主張のなかのどれかを模倣継承固持することを求めやすい。そのために既存の権威に従いやすいが、それは権威主義的な支配と結合しやすくなることでもある。

注目したいのは、連載1でも触れたが、ある一つの「～すべきだ」というAスタイルのものを批判する人も、その主張について「～するべきでない」とか、あるいはその主張とは別の対立する主張を「～すべきだ」とAスタイルで論を展開することが多いことである。正反対の主張をしているのだが、論じるスタイルは同じなのである。

また、二つの主張を並べて、どちらを選ぶのか、どちらを支持追求するのかという問いかけが行われることがある。また、一つの主張を支持するのか批判抵抗するのか、という問いかけも行われるが、いずれもAスタイルで主張されることが多い。

権威主義からの卒業は、いずれの主張を支持するにしても、Aスタイル自体からの卒業を含んで展開される必要がある。そうでないと、一つの権威から卒業しても別の権威にかかわるといって権威主義に陥り、思考・行動様式としては権威主義のままにすることになるからだ。常に何かの権威を求めてさまようことになってしまう。

学校の授業が教師から生徒への一方向型の流れで展開される場合、そうした権威主義的体質を促進する可能性が高い。そこには、「正解は一つだ」という唯一正解主義がぬぎがたく存在している。同様に、科学・学術の世界でいうと、「真理は一つ」という発想に囚われて、科学学術の展開のなかで、真理が変化発展深化していくということを受け入れがたくなる。

これらの体質が浸透している所では、これまで権威を持っていた人が批判にさらされ失脚すると、別の権威者が登場するという構図に陥りがちだ。

身近な例でいうと、親が権威主義的な子育てをした際、子どもはその体質を引き継ぎやすい。子どもが親の権威的支配から脱するとしても、その体質を自分の子どもに対して持ってしまうのである。つまり親が「～すべきだ」型の子

育てをすれば、子どもは孫に対しても、同じような子育てをしてしまう。虐待の連鎖といわれるが、そうした権威主義的な子育ては、虐待を生み出しやすい。親子関係だけでなく、パートナー関係で表す人もいる。

家父長制は、そうした親子関係・パートナー関係を制度として展開してきており、Aスタイルそのものなのである。

Aスタイルによる権威主義は、集団のなかでの序列秩序や競争秩序を育てやすい。競争のなかで生まれた序列にもとづいて、もっとも権威あるものから次の権威あるものへと序列に沿って、縦一列に並ぶのである。そして上にあるものには従い、下にあるものには従わせるという構図がつくられる。学校内で、あるいは学校間での点数差による序列秩序が強力である今日では、「〇〇大学出身」「期末テスト〇〇位」といったことで、他者評価自己評価をする傾向が高くなっているのは、その典型例である。

4. 「べきだ」のなかで、自分の考えを作らない、持たない

A「～べきだ」の問題性の一つは、権威に従う人が自らの考えを作らないどころか、持つことさえおしとどめやすい点にある。考えを作り持つのはもっぱら権威ある人であるという発想なのだ。他の人は、その考えに従い、その考えを記憶し広める役割だ、ということになる。学校でいうと、教師から生徒への伝達注入が中心となり、生徒自身が考えを作り持つことが押しとどめられてきたのである。学校の構造として創造が抑え込まれてきたのだ。それが日本の大半の学校の体質にさえなっている。

だから、権威主義がはびこり、自分の考えを作らないし持たないことになるのである。

Aの発想は、人間相互のつながりにも影響を与える。Aが生み出す序列競争型秩序のなかでは、タテ型のつながりが促進され、ヨコ型の共同の仲間・つながりを築くことが下手になる。つながりを作ると、その中での自分の序列位置に関心を寄せ、その位置が確定し安定すると「安心」できるということをよく見かける。

そうしたタテ型つながりは、権威主義色彩の濃厚な組織のなかに深く浸透しており、組織成員の考えや行動を規制していく。一人の教祖のもとに、強固なタテ型組織をつくる宗派だけにそうしたものが見られるわけではない。現代社会では、ほとんどの人がかかわりをもつ会社や学校がその典型的な存在になっている。家族のような小集団にあっても、上下秩序が色濃い例に溢れている。

政治でいうと、選出された議員が有権者の白紙委任を受けたかのように振る舞うのがその例である。同様に戦前から始まったことだが、高級官僚が「エリート」として政策決定の中心に坐るのもそうである。こうしたエリート支配を生み出すシステムは学校における序列競争秩序の延長線上にある。「学業成績優秀」で序列トップ群に入った彼等だけが、自分の考えを作り行動する資格があるかのように振る舞ってきた。他の人は序列の上の人に従えばよいとされてきたのである。

だが、そうしたエリートが自分で作った考えに基づいて振る舞ってきたことがいろいろな問題を生み出してきた。その問題に対する多くのエリートの責任の取り方は、人々に対してではなく、国という組織、特に自分の上司に対してであった。第二次世界大戦における戦争責任を問われたとき、「システムがそうさせた」「上司の命に従っただけだ」と責任をとらず、自分の考えではないとしたのが極め付きである。近年の政治家・官僚がからむ諸事件にも、そうした例を見ることが依然として多い。

戦後80年近く経った今日においても、序列競争型、A「～べきだ」という権威主義的構図が広くみられる。世界的に見ると、新たな世界への模索と創造がかなり進んでいるし、そうでないと、地球をめぐる多様な困難を打開できないという認識がかなり広がってきている。その困難の打開には創造的な対応が求められるが、A「～べきだ」では対応不能だ。そのなかにあって、日本ではどうであろうか。

5. 「べきだ」からの卒業 見知らぬ世界との出会いで「あれもこれも」の登場

前回書いたような事情のため、日本で生活する人のほとんどが、序列競争型の、A「～べきだ」という権威主義的構図の拘束から逃れることに困難を感じている。私もその一人だ。幼少期に、偉人伝を何冊も読み、祖父が話す太閤記（豊臣秀吉物語）を聞くという立身出世主義環境の中で育ち、空気のようにそうしたものを身に付けてきた。受験校で過ごした中学高校では、その極限状態を体験した。極め付きは、入学試験成績で座席順が決まることだった。同級生とのつながりも、テスト成績の席次と深く結びついた。

そうしたありように疑問を持ち、批判し克服しようとする様々の集団にかかわっても、そこにもタテ型秩序が染みついていて、今から思うと驚くべきことだが、当時は空気のように、その体質が存在していた。ということで、その頃から60年以上が経過する現在の私にとっても、A「～べきだ」、タテ型秩序、権威主義秩序からの卒業はいまだ「道半ば」と感じる。

そうしたAからの卒業は、別のAを持ち出すことでは不可能だ。別のAを持ち出すとすれば、たとえ一時的効果があったとしても、ことがらの問題性は変わらない。Aから別のAに移っただけであるからである。

ではAとは異なる思考・行動の世界へと移行するにはどうしたらよいのだろうか。移行の一つの可能性は、それまで出会ったことがない新しい世界との出会いから開ける。保育園や学校での新しい世界と人間との出会い、別の家族や友達との出会いもそうだ。さらに自分が生活する地域・国をこえての移動や交流が日常化している現代社会にあっては、異なる世界で生きる人、異なる空気を持つ人との出会いが、日常的に見られる。直接出会わなくても、マスメディアとおした出会い、インターネットとおした出会いが大量に存在している。

そうした出会いはB「あれもこれも」の登場を意味する。新しい出会いは一つだけではない。たとえば学校に入学すれば、それまで出会ったことのない初対面の人との出会いが溢れる。高校、専門学校、大学となると、いままでの知り合いの方が少なくなり、「人見知り」してしまいがちだ。会社で働き始めれば、今までとは、全く出会ったことのない異なる人々との出会いになることが普通だ。こうして広く新しい世界との大量の出会いは、B「あれもこれも」の世界に入り込むことを余儀なくさせる。

6. 出会いと発見 「あれもこれも」から「しなやかに」へ

新しい世界との出会いでは、新鮮な感動をもつことが多いが、驚きと緊張を伴うことも多い。にもかかわらず、出会いがもたらす発見を生かして、自分の世界を膨らませ、必要があれば自分の考えや行動を変容させ豊かにしていけば、

プラスになっていこう。

それらの出会いには、多様なものがあるのが普通だ。「食わず嫌い」にならずに、多様なものと出会ってそれらを受け止めたい。最初から、自分を閉ざして受け止め制限をしたくない。といっても、「食べ過ぎ」で「消化不良」になることもあろう。なかには、対立矛盾をはらむものが、一緒に入り込んでくることもある。

それでも入ってきてしまうものがあるから、受け入れるかどうかを保留にする対応が必要なこともあろう。だから、「あれもこれも」ということに、一応はしておいて、ゆっくりと時間をかけて対応をすすめていくしかない。そんな対応が、他者から見ると「八方美人」に見えることもあろう。

その際、すでに持っている自分の考えや行動様式を絶対化し、新たな出会いがもたらした発見を「切って捨てる」ようなことが多かったら、自分が豊かになる機会を減らしてしまう。

「あれもこれも」といろいろな知識・考え方を受け入れる中で、それらを自分なりに取捨選択しつつ、分類整理していく作業がすすむ。学校における授業では、その取捨選択を子ども自身とするのではなく教師がしてしまい、子どもはそれを鵜呑みにし、丸暗記することが多いのが現実だが、自分なりの考えを持つためには、その点を変える必要がある。取捨選択の過程で、不足なもの・疑問なもの・さらに深めたいものなどがはっきりしていき、新たな知識・考えかたを探究する活動が展開する。それは外からくるものに受身的に対応するだけでなく、能動的にかかわっていく活動となる。こうした過程全体を通して、自分なりの考えが形成され深化していく。と同時に、それらを自分の内部にとどめず、外へと発信する作業が生まれていく。なかには、受け止めたAないしBのなかの何かを批判克服する作業にもなる。

したがって、これらの過程は、Aを卒業しBを経てCの「したたかに」「しなやかに」への移行ともなる。

7. 自己を持ち主張する

前回述べたABからCへの移行の過程を別の角度から見ると、他者の存在を権威化するA、そして多様な他者を驚きつつ受け入れるBから、自己自身を育むCへの移行である。ABでは、自己自身を極力抑え込むことになりがちで、Cになって、自己の考えを持ち主張することが本格化する。

無論、自己を育むCにあっても、他者を抑え込むのではなく、他者も自己も育むのである。時に、他者を否定し自己を絶対化するDがあるかもしれないが、それはAの裏返しである。他者に権威主義的にしたがうAではなくて、Dは自己を権威主義の対象にさせて、他の人を従わせるのだ。ただし、Dの過程で、自己を権威主義的にとらえてつき合ってくれる他者は少ないから、孤立する危険がある。

もしつきあってくれるとすれば、自分が教祖様、ファシズムリーダーになっているということだ。子どもの世界でいうと、きかん坊、やんちゃの傾向を強めることだ。そんな可能性は少ないし、周りが離れていって当人が孤立することにつながる。そこで、制度に頼って、自分の立場を確保しようとする。家父長制度がそうだろうし、首相とか社長とかいった「リーダー」を設定する制度もその手掛かりになりやすい。学校教師の場合も、そういう可能性があるが、それに気づいている人は多くない。学校という制度に支えられてようやく権威が保てる教師が意外に多い。学校の制度を離れた場においては、従ってくれる相手がいなくなるためである。

いくら大会社の幹部だったとしても、退職すれば住民の一人であり、退職以前の会社での権威を保持できるわけではない。そこを勘違いして、近隣の人を困らせ、ひるがえって自分自身のもちように困惑する退職者もいる。

ABからCへと移行するということは、権威や制度に頼らないで、人間関係を円滑に、かつ豊かにする大切なコツで

もある。

8. 「あれもこれも」から「しなやかに」への移行をもたらすワークショップ

A「～べきだ」やB「あれもこれも」からC「しなやかに」への移行を促進する有効な活動として、ワークショップが存在する。多様な参加者が多様なものを持ち寄って進行するから、最初はB「あれもこれも」状態である。そこには、A「～べきだ」という権威主義はない。それを持ち込もうとする人がいるかもしれないが、それを避ける道具立てがワークショップにはいろいろと備わっている。

ワークショップの場では、多様なものと出会いながら、参加者のなかで驚きと発見が連続する。その過程で、参加者の共同作業が進むが、異質で多様なものをもつ参加者が自分なりのものを出すことで進行するから、違いが常に表面化する。そこで折り合いをつけるということにとどまらず、お互いにもっていないものを作りあうという関係が生まれてくる。意見の違いがあった際に、どちらを採用するかと決着をつけるのではなく、あるいは妥協するのではなく、まだ出ていない考えを共同で模索創造することを大切にする。その作業は、いやおうなしに、「したたかに」「しなやかに」展開していく。

進行役のファシリテーター（促進役）・コーディネイター（つなぎ役）は、Aの性格を持つ仕切り役ではない。参加者の積極的な意見表明を促進し、参加者間から出てきたものを、つなぎ合わせるように進行していく。Aタイプの意見表明をする人が出てきた際には、共同活動をすすめることで、その表明を相対化する作業をしていく。

こうして「あれもこれも」を満載しながら、それらが混合し濃縮しながら、それまでにない新たなものが誕生していく。それは特定個人の作業というよりも、共同作業の産物である。そこに「したたかに」「しなやかに」多様なものときあうことが生み出す良質の生産物が生まれてくる。そこでは、自己も他者も尊重し合う関係が生まれ体質化していく。そして、Aの世界に広がっていた序列競争関係は萎んでいき、相互尊重関係共同関係が育まれていく。

学校の授業においても、「ワークショップ型授業」として、ワークショップ型を進めることを20年以上前から私は主張してきたが、100年以上にわたって築かれてきたAを基本にする従来のスタイルを変えていくことは難題である。それでも少しずつではあるが、変化してきている。

なお、一時期双方向型授業が強調されたことがあるが、それはAを変える過程の入り口段階である。それを超えて多方向型であることが、BCへと移るためには求められる。

こうしたことは、ワークショップに限らず日常生活のなかでのおしゃべり（ユンタク）、会合、委員会、研究会など、人の集まりではどこでもみられることだろう。よくみかけるのは、Aタイプの主張をする人がいて、他の参加者がそれにあわせていくものだ。それでは、他の参加者は、権威ある人に任せきりになり、動員された伝達役となってしまう。

民主主義というと、権威ある複数の誰かの主張のどちらを取るかというイメージで理解する人が多そうだ。それはAB段階のありようだ。メンバーであるすべての人が、自分なりの考えを出し、相互に調整しつつ共同創造へと向かうことで、C段階のありようを追求するようにしていきたいものだ。

付1 私の冗談のコツ・作法

2020年7月21日

私は冗談をいうことが習慣化している。テニポンや卓球の練習中でもそうだ。授業の際もそうだ。正式の会議でもいうことがある。

目的はといわれれば、「場の雰囲気を楽しく明るくするため」というが、自然体なので、目的を意識してやっているわけではない。冗談は、練りに練って出てくるものではなく、とっさの「思い付き」で湧き出てくる。だから、たまには失敗することもあり、場を白けさせることもある。でも、「下手な鉄砲数打てば当たる」精神で、新たな冗談に挑戦する。

冗談を言葉遊び中心にする人もいるが、私は、言葉遊びは多くない。対人コミュニケーションとしての冗談が多い。冗談が多すぎるし、時には初対面の人もいるので、最初に「私は冗談が多く、半分以上冗談です」と話すこともある。でも、対人コミュニケーションとしての冗談なので、10%ぐらいの真実味を含ませることも多い。

だから、相手をほめて励ますための冗談も多い。冗談で、相手を乗らせて、やる気を高めるのだ。

しかし、「まじめ」な人で、冗談を冗談とはわからない人もいる。そんな人には、冗談とすぐにわかるように、とんでもなく大げさな表現を使って言う。まじめな顔をして、いうけれど。「そんなの、私の人生120年で、見たことがないほどすごいことだ」などと。

思わず、吹きだすくらいに、である。でも、「まじめ」な人でキョトンとすることもある。笑っている周りの反応で、そのうち気づき始める。

こういう冗談をもっとたくさんの方が言うようになれば、世の中もっと楽しくなると思うが。

ところで、私の冗談の先行例は、父親にあるようだ。父親は、婦人服仕立業を仕事にしていたが、洋服仕立ての注文に来る紡績女工さんたちのおしゃべりで、客を笑わせて評判をえて、客が増えていたようだ。戦後の繊維産業隆盛の時期に、全国各地から集まった女工さんたちが、盆正月に帰省する際に着る服を注文仕立てしていたのだ。繊維産業景気が終わってからも、楽しい会話で、人を引き付けて、商工会や老人会の世話役をよくやっていたようだ。私には「よく叩くこわい父親」だったが。

嫉妬

2021年04月24日～5月10日

1. 「嫉妬」という言葉になじみがなかった私

私はかなり以前の個人体験の話。

ある組織の発展を願って行っていた私の全く自発的な活動が、その組織を中心的に担う人によって差し止められ、その後行うことができなくなったことがある。理由は明示されなかった。私が、それに「抵抗」すると、「内部対立」とみなされ、組織の維持発展に役立たないだろうと思い、我慢をして身を引いた。

そのあたりの事情が分かりそうな人に話してみたら、私の活動への「嫉妬」だろうとのこと。全くの予想外だった。振り返ってみれば、私は「嫉妬」という言葉を使ったことがないし、「嫉妬」したりされたり、ということも記憶になかった。男女関係にかかわってしばしば使われる言葉だが、意識して記憶している体験はなかった。それだけに余計に理解しにくいことだった。

私の気持ちが収まるまで数年かかった。その数年間に、「嫉妬」の言葉に出会ったり、「嫉妬」に類することを見聞したりする際に、考えをめぐらした。

そのうちに気づいたことは、「嫉妬」という言葉は、男女関係に限定しないで色々な形で使用されていることだ。「嫉妬」という言葉の漢字を訓読みすると、「妬む(ねたむ)」「嫉む(ねたむ)」である。似た言葉に「羨む(うらやむ)」がある。こうした言葉の使用は、男女関係に限らず、日常生活のいろいろな場面に溢れている。「おにいちゃんのお菓子のほうが大きいと妬む」「あの人は勉強ができるので羨ましい」「〇〇さんが、くじ引きに当たったのに、私は外れだったと妬む」……

さらに多様なことが関連して表現されている。たとえば「優勝した〇〇さんを羨ましく思っていたが、〇〇さんが転ぶのを見て、内心“ざまあみろ”などと思った自分を振り返って恥ずかしい」「▽▽さんに追い抜かれたが、それを妬むのではなくて、彼女をライバルと考えて、精進しよう。」などというものもある。

辞書を見てみよう(『広辞苑』1991年岩波書店)。「嫉妬」には、次の二つの意味が記されている。

①自分よりすぐれた者をねたみそねむこと ②自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと

私は、このなかの②のイメージで「嫉妬」をとらえてきて、広く①のイメージをとらえてはこなかったのだ。

色々なところで、①のイメージでの嫉妬の思いが広く存在して、色々な言葉を使って表現されているのだ。それらについて、私が「嫉妬」という言葉に結び付けて考えてこなかっただけのことのようなのだ。そこで改めて「嫉妬」について、考えていきたい。

2. 競争・序列のなかで「嫉妬」が広く生まれている現代

私が注目するのは、今日における「嫉妬」の存在場所には、人間相互間で繰り広げられている勝負とか序列とかが色濃く見られ、それらをめぐっての競争があることだ。

しかも、力量が接近して、競争や勝負が「せりあい」になる事例に多い。プロ選手とアマ選手のように、力量差が大

大きく、勝敗や順位が関心の対象から外れると、「比べようがない」「雲の上の存在」ということになって、実力差が容認される。そして、実力のある相手に敬意を払ったり、成長途上にあるものへ助言したりすることで、相互関係は比較的安定してくる。

ところが、「競り合う」関係になると、客を奪い合う会社間競争、同等レベルの進学先をめぐる学業成績競争、代表選手選考での「せりあい」になるスポーツでの競争などと、激しさが見られる。果ては、領土問題をめぐる対立が高じて軍事紛争まで起きかねない国家間関係などもある。

それらがライバル関係にとどまっているうちはいいが、「打倒〇〇」ということになると、大変である。にもかかわらず、公然と「打倒〇〇」などという「危ない」言葉が、今日の社会や人間関係に溢れている。

人々のつくる関係のなかで、相互の違いは日常的に存在する。それが「嫉妬」につながる場合とそうでない場合がある。上で見てきたように、競争が成立促進されやすい場では、序列が作られやすい。序列のなかで移動できるものの場合、その上下をめぐる競争が成立し、その競争対象との間で「嫉妬」が生じる。

序列の上下移動ができない「違い」には、「嫉妬」が生じないことが普通である。もし「嫉妬」を持つ人があれば、例外的事例で、競争が成立しえないところに成立させているのである。王様の地位につく可能性が全くないのに、王様に「嫉妬」するようなものだろう。

といっても、言語・文化などの違いによって人間集団を序列化し差別することは広く見られる。身近でいうと、「田舎者」という差別があり、転校生いじめにも、そうした傾向をはらむものが多い。外国人差別にもそうした例は多い。

そうした例で「下」と見なされた人のなかに、より「上」と見なされる人々に「嫉妬」し、みずからの言語や文化を押し隠そうとすることが出てくる。沖縄語使用抑制の動きは典型例であって、日本共通語をうまく使える人への「嫉妬」が広くみられたのもその例だろう。

そうした序列に基づく差別と、それと並行して生まれる「嫉妬」が体質化しているなかでは、競争的風潮自体が序列差別化を促進しやすい。自由競争が強調される近年では、競争が社会風潮になり、競争・勝負・序列にやりがいを感じる人が肥大化している。他者をみるときも、競争・勝負・序列での実績で評価する癖をぬきたく持っている人が、結構いる。学歴社会は、そうした蓄積と結びつく。こうした所では、ますます嫉妬が広く作り出される。

嫉妬のようなものは、昔からあっただろうが、嫉妬に彩られた現代の眼で過去を見て、嫉妬の存在がぼやっとして見えにくい過去の場面にも、嫉妬の物語を描くことが結構あるのではないか。「はなさかじいさん」のような物語が典型だろう。戦国時代を下剋上の競争勝負の時代と描くのもそうだろう。テレビなどのドラマでも、過去の時代のことを現代人の関心と呼ぶように、対立・嫉妬にくるんで表現しているものが多いのではなからうか。

3. 子どものころにもちやすい競争・勝負・序列へのこだわり

ところで、8～10歳のころを中心とする子ども時代には、競争・勝負・序列に関心を持ち、こだわりが生まれ、そのなかで嫉妬心を持つことが多い時期だ。集団遊びでも、個人の対抗遊びでも、そうしたものに夢中になり、勝負のあるスポーツに強い関心をもつ。

小学校中学年ころに、偉人伝を読んで刺激を受けた人は多いだろう。私が在学したころの小学校の図書室にはそうした本は多かった。今ではどうだろうか。偉人伝の登場人物だけでなく、テレビなどに登場してくるプロスポーツ選手や

歌手・タレントなどのような人気者になりたい、という将来の夢をもった人は多いはずだ。

そうした成功に自分よりも一步でも近い同級生に、羨望だけでなく、嫉妬をもったこともあっただろう。スポーツでいうと、小学校高学年ともなると、レギュラーポジション争いの中で、ポジションを確保したものに嫉妬することもしばしば生まれる。「出る釘は打たれる」という言葉のように、「出過ぎた」子どもをいじめる事さえ見られる。

だが、たいていの子どもは、中学にあがるころになると、現実目覚めはじめ、プロ選手や職業的歌手・タレントになるなどは、「夢のまた夢」であることに気づき、現実的な目標に切り替えていく。

現実体験が弱くバーチャルな世界に浸かっている子どもは、中学卒業後の10代半ば以降までも、現実的な目標に切り替えていくことが遅れていく。

競争や序列は本人自身の問題だけでなく、周囲の環境が強く影響する。周りが競争をあおることで、予想以上の頑張りを生んだり、逆に挫折を生んだりする。無理が生まれ、事件事故を起こしやすくなる。部活をめぐる不祥事にはそうしたものがかわることが多い。そしてその折に、他者への嫉妬を生みやすい。

序列や競争を、過剰な無理のなかで展開しないために、あるいは序列や競争を、当人の力に合わせて、より合理で正当性の高いものにするために、競争のルールが生まれ洗練されていく。競争を対等にするために、ハンディキャップをつけるのもそうである。小学校1～2年生には、ピッチャーが上手ではなく下手で投げ、三振なしのルールを適用するなどがそうである。力の差が歴然としているのに、競争し勝負すれば、面白くないし、公平でないことに気づいていく。こうして、場面に合わせたルールの洗練化によって、スポーツおよび、社会ルールも、その生命力を伸ばしてきた。

子どもたちも、小学生時代にそうした体験を豊かにもつ。そのことが子どもの社会性の発達を促す。しかし、大人がとりしきって、遊んだりスポーツをしたりすると、子どもたち自身で、ルールを工夫して発展させる体験が乏しいままになる。

その結果、競争と上手に付き合うことができず、競争や嫉妬が集団と自分自身の成長にプラスにならず、弊害を生み出すことが多くなる。

4. 成人期まで持ち込まれる競争と嫉妬

共同協力の活動がふえていくと、競争をするとしても、競争する局面を限定していき、全人格にわたる競争をしなくなる。競争の場面が終われば、共同協力の普通の場面に戻る。

ライバル関係というものがある。それには、嫉妬が生まれるようなものもあれば、共同協力と結合するようなものがある。互いに成長し合うことを目指して協力するのだ。

そうした諸体験を経る中で、競争勝負を卒業していき、ごく限られた局面だけで競争が一時的に生まれる。だが、社会全体が競争色に濃く彩られているために、大人になっても勝負競争へのこだわりが強く、生活のかなりの場面が競争で彩られ、時には全人格的な競争さえ生まれる。職場間競争だけでなく職場内競争が激しいところでは、退職の時まで競争が続く。そうすると、競争が体質として深く浸み込んでいく。その競争が、職場外にまで持ち出され、家族さえそうした雰囲気にも包まれる例は多い。

嫉妬は人間関係の中で生じる。嫉妬が人間関係を豊かにし、社会資本を増加させるというプラスのことがあり得ない訳ではない。しかし、人間関係を縮小破壊するというマイナス面の方を多くもたらしやすい。

このように書いてきた私自身も、ライバルとか勝負競争に、かなり彩られた世界を歩んできた。とくに中学高校時代がそうである。成人期以降もかなりそれらのなかに浸かっていた。

それは私個人の特性というよりも、そうした雰囲気が濃い社会のなかに住み着いていたからであろう。とくに高度経済成長期に大都市で生活していたことが強い刻印を残した。

さらに中年期に至るまで、その世界のなかになんか深く住んでいた。大都市とは対照的な沖縄の田舎暮らしをするなかで、そして、加齢のなかで、そうした世界・社会に住み込んできた自分を発見し始めたといった方がよいだろう。そして、かなり意図的にそうした場面から身を引き、競争（ひいては嫉妬を持つような環境）から、意識的に身をひきはじめたのは、ここ20年のことである。

愛

2021年05月21日～2021年06月16日

1. 愛は学ぶもの育むもの

我が家の書庫にあって未読の本をここ何年かにわたって読んでいる。恵美子の購入本がそのうちのかなりを占める。そうした本の一つに、ヴィルフリート・ヴィーク「男という病」の治し方」三元社1993年がある。30年近く前の本だが、とても印象深いものだ。男性心理と行動についての分析と提起が鋭く興味深い。ドイツで書かれたもので、日本とは事情がかなり異なるとはいえ、日本の男性にも共通する問題を多く見いだせるものだ。

そのなかで、「愛」についての次の一節が印象深い。

「学びとるに値する、人と人をつなぐ力、そういうものだと考えている。つまり、愛は学びとることのできるものなのだ。」 p 25

この文に触れたことで、私の愛にかかわる想いがいろいろと巡り始めた。まず、私なりに思いついた「愛」をめぐる諸点を並べよう。

1) 愛は、関係を作る人々（二人または数人以上）の間の具体的なかかわりを前提にする。生活（場合によっては仕事）を共同するか、頻繁に出会うなどの交流関係の蓄積が前提となる。遠距離にあったり、デジタル機器を介したりでは難しい。無論、かなりの期間、密接な関係をつくったうえでなら、物理的に距離がある関係もありうるだろう。また、一度出会っただけで愛情が作られたというのも通常ではありえない。

2) 愛情関係をつくる人各々はいずれも自立独立しており、双方が対等平等である関係であり、かつ相手に対する尊敬尊重の気持がある。例えば、相手をプラスに評価し、褒め合える関係である。

一方が他方を支配するとか、一方向的な関係とかでは、愛は成り立ちにくい。そこにあるのは、愛情関係ではなく支配被支配関係の類である。一人だけが、一方的に他者に向けて「愛」で、他者の側からの当人への愛がない場合も、ここでは想定していない。愛は相互に向けあうものだ。

勝敗関係競争関係も縁がない、もしくは縁が薄い。競争勝敗関係がつくるタテ型関係や組織では、愛は成立しにくいものだ。といっても、競争勝敗が終わって、通常に対等の相互交流関係に戻るタイプのものなら、愛情関係は成立する。

3) 一定の時間をかけた持続的な関係の中で、学び合い育みあうことができる関係である。作りあう、築き合う関係といってもよいだろう。そうしたものの蓄積が、愛情という形に結実するとみたらよいだろう。

2. 愛と友情 愛と憎 動物・物事と愛

4) 愛情に近いものに友情という関係がある。前回述べた1) 2) 3) では、愛情と友情とを区別しないで書いた。だから、前回書いたことは友情関係でも成立しうる場合が多い。ただ愛情という言葉は、婚姻とか交際しているとかのカップル関係、そして家族間、とくに親子関係に使われることが多いという点で友情とは違いがある。

友情関係は、同性異性を問わず、二人の場合、さらに三人以上を含めて複数の人相互の間に築かれるものである。友情関係が深まっていけば、愛情関係と似た状態に至ることもある。当初は友情関係であったカップルが、愛情関係を築いていくことがある。なかには、愛情関係をもっていたカップルが、カップル解消とともに友情関係に切り替えるという話を聞くこともある。カップル関係における愛情と友情とを性的関係の有無によって区別する人もいる。

家族では血縁関係が一つの焦点になるかもしれないが、血縁関係がない家族間でも、愛情は存在する。逆に、血縁関係・カップル関係でも、愛が成立せず、憎さえ存在することはよくある。

5) 人間どうしの相互関係で語られるのが普通であるが、ペットなど動物と人間との関係でも、愛情は成立しうる。この際も、相互関係である。人間が特定のペットを愛するだけでなく、そのペットが人間を愛する関係が不可欠である。したがって、両者の間のコミュニケーションが成立することが前提になる。人間が声をかければ、ペットが身振り・音・身体接触などで反応し返す。逆にペットが何らかのメッセージを送れば、それをキャッチした人間が送り返すというものだ。

それは、人間の乳幼児と親などの大人との関係と同様だ。大人が無でる、くすぐる、タッチする、微笑むなどすると、乳幼児が同様の行動をするという相互関係が成立するなかで、愛が芽生え発展深化していく。

それらの相互行為には、相互が信頼し合うことが前提になる。また、やりとりのなかで、安全が保障され、心地よさを感じ合うことも前提となる。「愛のむち」と称して、大人が乳幼児を叩く場合には、心地よさ・信頼が欠け、逆に不安を生まれ、愛は深まっていけないどころか、憎しみ・警戒・拒否が生まれていく。

そうしたやりとりが下手な人は、虐待へとつながりやすい。2) で述べた支配被支配の関係であり、愛情の関係ではない。自己の不安を対象の子どもやペットに向けて発散して、虐待してしまうこともある。また、一方的に「溺愛」する関係もよく見かける。溺愛が、相手に通じない（受け入れられない）と、相手に対する虐待になりやすい。

郷土愛とか、「〇〇を愛好する」といったモノやコトを対象にして成立するといわれる愛もよくみられる。金銭愛に代表される物神崇拝は、あちこちで見かける。ワーカーホリックの人には、仕事への「愛」に病的にまで浸りこんでいる人が多い。その状況の異常ささえ見えなくなっている人も多い。そうした状況を生み出す社会のありようを問題にしないてはならないが、当事者レベルでも、そこからの打開を追求する必要がある。そうしたことに浸りこむタイプの人は、人間関係における愛を、モノやコトとの関係のように築こうとするに至り、失敗する人が多い。

3. 感性レベル、知性レベル

6) 愛情は感性レベルに焦点を当てて語られることが多いが、感性だけでなく、身体レベル行動レベルにおいても語りうるし、さらに、知性レベルにおいても語りうるだろう。リクツレベルで築き上げることは「一般人」には難しいとはいえ、そのレベルで考える人もいる。

1で紹介したヴィークのいう「愛は学びとり知ることのできるものなのだ。」は、知性レベルが主舞台になろう。体験・見聞したことを自分の頭で知的に整理し蓄積することで、愛を確かめ深化させる。

まず愛情対象の人物についての発見認識がある。たとえば「〇〇出身で、～～という趣味を持ち、□□を得意とし、▽▽が好物だし、～～という性格に見えるが、～～という時にはエネルギーを燃え立たせる人である」といった具合だ。そして自分自身についての発見認識である。たとえば「～～という性格だと思い込んできたが、～～に挑戦してかなり

のことができたので、自分も～～すれば、結構上手くやっていけることに気付き、自信をえることができた」といったものである。

周囲の多様な愛情にかかわる動き・体験についての情報も有益だろう。たとえば、「相手に◇◇をプレゼントするよりも、いっしょに～～に取り組んだほうが、相互理解が進むし、気持ちの通じ合いも生まれやすいから、ずっといいよ。」「〇〇さんは地味に見えるけど、～～の場で～～するほど注目される人だよ」といった情報だ。耳から聴いた情報だけでなく、小説など本からの情報が有効になることもあるだろう。

最初は嫌だと感じた人でも、こうした多様な情報を積み重ねることで、愛情を感じ始めることがある。100年ほど以前の移民のなかで、写真でしか見たことがない人と、海外で初めて出会ってそのまま結婚し、共同生活を始めた人が、苦楽をともにして数か月も立たないうちに愛を芽生え膨らませていき、何十年も連れ添い、大きな家族を築くまでに至ったという話も聞かれる。それとは異なって、結婚生活のなかでは愛がそれほど深まらなくても、子どもが生まれ、女性は親子関係のなかに愛情を深めていき、男性は仕事への愛を蓄積し、成功に至るといった話もある。現代ならば、離婚したかもしれないが、数十年前の当時は離婚という選択肢がイメージしにくかったために、愛情という面では「表面的」なままで経過したというカップルもいるだろう。

愛を学び育むうえで、知的レベルだけにとどめず、感性レベルと結び合うことが重要になる。知的レベルだけでは、「頭でっかち」になってしまう。思春期から青年期にかけての私は、こうした失敗の連続だった。知的レベルでの愛の追求が感性レベルと結び合わないのが、感性レベル・身体行動レベルでの愛がきわめて未熟なままでとどまり、破綻をくりかえしたのである。

感性レベルだけで愛を追求していると、物事や関係が「見えなくなる」状態に陥りやすい。また、「愛さえあれば、どんな困難も打開できる」という過剰な楽天性をもち、大失敗に陥る例もみかける。知的レベルでの冷静なとらえかえしを、感性レベルの追求の中に挟み込むことが大切だ。

4. 信条・規範・原理としての愛

7) 知性レベルの愛のなかには、理論として語られる愛がある。「愛は～～である」「愛を深めるためには～～すべきである」といった信条・規範としての愛もその一つであろう。宗教・哲学・教え（教訓）といったものには、愛にかかわるそうした類が多い。「神の愛」「仏の愛」「自然の愛」などといったものも、よく聞く言葉だ。それらはシンプルで原理的な表現に彩られている。現実の矛盾葛藤なども、原理にもとづいて是非を判断し、事の指針を得ようとする。

理論として語られるものの多くは、このように原理的なものであるために、修正変更不能なもので、それを批判否定することさえ許されず、信じ従うかどうか問われやすい。信じ従わなければ「去れ」ということになる。そうしたものは、知的レベルを装って、支配被支配の形での強制に至ることも多い。学校教育における戦前の「修身」や戦後の「道徳」などは、事実上、そうした形を取る人が多い。

儒学わけても朱子学などが、そうしたことに活用された歴史は長い。「孝」もその一つだ。何があっても「親孝行」は必須条件だというのだ。また、家長制度のなかで、女性は「親に従い尽くせ、結婚したら夫に従い尽くせ、子どもができれば、子ども（特に男子）に従い尽くせ」といわれたのもそうだ。

少し角度は異なるが、家族関係やカップル関係ならば、「愛情があるのは当然で、愛情を持たねばならない」というとらえ方も類似例である。そうした縛りや関係にありながら、「愛が持てない、憎しみが湧いてくる」と言って、悩む人もいる。親子だから、「愛情は湧いてくるものだ」といわれるなか、『湧いてこない愛』をめぐる、葛藤に陥る人も多い。

愛情は、実際には行動し生活するなかで築かれる過程であると考え、規範や原理としての愛情は、過程・現実把握が弱いものとなりがちだ。

以上のことに類したものとして、ことわざ・金言など多いが、それらには正反対の主張をするものが併存することがある。どちらを信じるか迷うことも多い。それは、「生活の知恵」の結晶ともいべきもので、どのような「生活」を基盤にして作られたか、受け手の「生活」と響き合うのか、すれちがうのかで、大きな違いが生まれる。

5. 身体・行動レベル 性的関係レベル

8) 身体レベル行動レベルにおいて、「学びとり知る」ことの大きいものとして、スキンシップがある。親をはじめとする大人が子どもをあやすのはその例だ。また、日本の慣習でいうと、愛情関係が成立している場合にしか成立しないと思われているハグやキスが、欧米だと愛情関係や友情関係が未成立であっても、存在している。愛情友情を育むための一歩だという「過程」ととらえれば理解しやすいだろう。

スキンシップを通して、相手を知り自己を知り両者の関係を知り、愛情関係を学び育んでいく。だが、身体行動レベルで難しい問題として、暴力的な身体接触がある。「愛のむち」という言葉さえ存在する。愛情があるから体罰をするというのである。それらには愛情の存在さえ疑われるが、もし存在するとしたら、暴力行使はサイテーといえるものであり、虐待である。もしそれしか愛情表現ができないとしたら、愛し方を学んでいない、ないしはきわめて低次元の学びの結果であろう。しかし、暴力が蔓延する家族で育ってきた子どもは、その次元の愛し方のままに、カップル関係、親子関係をもって、暴力・虐待を再生産することになりがちである。

ところで、身体レベルでのものを、知レベルのものより低次元であるとして軽視したり軽蔑したりする発想が広く見られる。愛にかかわることでも同じことが言える。それは、感情レベルを知レベルよりも劣るものと見る発想と似ている。それらでは、感情レベルや身体レベルのものを抑え込もうとする動き、隠そうとする動きとつながる。それだけに、怒りが爆発して暴力が出てきてしまいがちだ。そういう場合は、感情や身体レベルで、学び育むことが立ち遅れを見せている結果である。

9) 身体レベル、感情レベルの愛と結びついて、重要なものの一つとして、性的関係がある。だが、それは、身体レベル、感情レベルの中でも、より一層低次のものと見られてきた。時には、「不潔」なもの「不純」なものさえ見なされてきた。

だが、抑え込むことはできないので、「はけ口」として秘密裡に登場させることがしばしばであった。「金銭で買う」という形で登場させることは、長い歴史をもっている。そして、家父長制や男の力行使と結びついてきた。

さらに「聖なる」教育の世界に「不純な性的」なものを持ち込むことを抑える動きともなってきた。「純潔教育」などという言葉さえ作られ、学校における性教育は否定されてきた。そんななかで家父長ルールに基づくものしか承認されず、男女の対等とか合意とかは否定される歴史が長く続いてきた。

それらのため、愛情関係と性的関係とは切断されがちであった。そうしたなかで、愛情関係がない性的関係がいまだに広く存在している。

無論、愛情関係と性的関係とは、別である。だが、別であるだけに、いかに両者を結び付け深めていくかが、重要な課題となってくる。そして、愛情同様、性的関係も「学び育む」ものであることが見落とされてきた。性的関係の「学び育み」が不可欠である思春期青年期に、抑止された「学び育み」が個人での秘密裏の「学び」に押し込められてきた。それだけに、歪んだ性的情報の浸透が広がっているのである。

6. 愛情を学び育むきっかけとしての出会い、恋、共同作業

10) 愛情関係には当事者自身が相手を選択するものとしなないものがある。血縁で生じる親子などは後者の選択しないものだろう。カップル関係については、現代ではほとんどが前者の選択するものだろう。

前者の場合、選択を行い愛情関係を学び育てるための「きっかけ」がある。代表的なきっかけは、出会いと恋である。恋と愛とを分けなくて、混じり合っているとあることがあるが、恋の関係を愛の関係へと展開するというように、ここではとらえたい。だから、恋の関係は長くはないが、愛の関係は長短さまざまになり、長いものは数十年に及ぶ。

カップル関係には、恋以外の始まり方がある。見合い結婚などがその例である。数十年前までは、結婚前には数回の出会いがあるだけの例は多かった。結婚当日に初めて対面する例もあった。近年では、見合いは少なくなったが、見合い後、何度も会って話し合いや共同作業に準じたことを積み重ね、恋めいたものを芽生えさせ、結婚を決断する例も増えている。近年「流行」の「婚活」もそうした要素を多分に持っている。

そうしたきっかけを愛へと発展させるには、それなりの共同作業が必要だ。そこには、愛についての「学びと育み」の営みがあり、それが一定程度蓄積して結婚への決断がなされる。ここ20～40年と急速に多くなった「同棲」はそうした期間といえよう。

親子関係などの血縁関係でもそうだ。自然に任せておけば、愛情は出てくるものだ、というわけにはいかないことが多い。子育ては母親の役割で、仕事に没頭する父親は、たまに子どもと付き合うというだけでは、父子の愛情関係はなかなか育たない。一定時間以上かけた意図的な接触と共同作業をとおして、父子の愛情関係は「学ばれ育まれて」いく。食事や排せつなどの世話、スキンシップ、見つめ合い、遊びなどを蓄積していくことが不可欠だ。

新生児との密な関係をどれだけ持つかは、父親だけでなく、母親の場合にも重要だ。病院などでの出産直後に、だっこ、授乳を含め母子間の接触を重視するようになったのは当然のことだ。

11) たくさんの共同作業と学びを蓄積し、自分なりに知的にも感情的にも行動的・身体的にも愛情を深化させていく必要がある。しかも、個人としてだけでなく、他者関係の中で相互愛を深化させる必要がある。

愛の「学びと育み」には、一般的蓄積と個別的蓄積とがある。親子関係やカップル関係などの個別の体験の蓄積の総和として一般的蓄積が生まれ、愛情をめぐる知的感情的身体的力量と意欲が築かれていく。そのためには、多様な人々との多様なつながり体験が重要になる。多様な海外の人々、多様な世代、多様な特性をもつ人々とのつながりが、愛情関係を豊かにしていく。たとえば、思春期までの乳幼児とのつながり体験を持ったかどうかは、自分自身が親になった時に重要な意味をもつ。

12) 愛情関係は、結び合うことだけでなく、別離・分離という面もあることを忘れてはならない。別離・分離をどのようにすすめるかも、愛情の「学びと育み」にかかわる力量と大きくかかわる。

さらに、結び合いを避ける、拒否するといったことにも、それまでの愛情についての「学び育む」体験が大きくかわる。このあたりは、別の機会に書くことにしよう。

難題に直面する時

2021年06月30日～07月21日

1. 「真正面から」「保留する」などいろいろあるが

打開にかなりの知恵とエネルギーを要する難題に直面した際、あるいは、対応が難しい相手と関係を築こうとする際、どうしたらよいか、いろいろと惑い迷う。

10年ほど前に、50代の女性に、配偶者との関係で相談されたことがある。私が「しばらくは避けてみたら」と応えたら、「浅野さんが、そんな応えをするとは、想定外だ。真正面からの打開策を示すことを期待していたのに」といわれてしまった。

若い方に、「～～という難題にぶつかっているから、対応を示してください」と相談されたときに、「あわてて結着をつけようとしなくて、しばらくは距離をとって、休憩をする。そして対応策についていろいろと考えてみて、少しはマシだと思うものを並べてみて、考えていってはどうか」と応える。拍子抜けのような顔をされる。

正面からまっすぐに課題や相手にぶつかっていってはどうか、という応えを示すことがないわけではない。私自身が若い頃には、そんな応えが多かったように思う。でも、現在の私の応えには、「しばし休憩して、時間と距離をとったらどうか」「難題過ぎるから、避けて、引（退）いてはどうか」「回り道とを感じるかもしれないが、別のアプローチを試みたら」などと、相手の予想にはない対応をすることが多そうだ。

若い人に多い対応は、真正面から取り組もうとするが、うまくいかないなら断念する、といった二者択一の対応だろう。オール・オア・ナッシングだ。

現実には、多様なアプローチがある。並べてみよう。

真正面から挑む

斜めから取り組む

直接に、ではなく、間接的に対応する。深いところでの対応を考える。

目立たないように、静かにやっていく

行動に移せる条件がそろった時にやるということで、しばし保留にする

難題に直面しそうなことを察知したら、まずは避ける。

対応の仕方には、このようにいろいろなバリエーションがあることを見失ってはならない。さらに、与えられた選択肢の中から選ぶことはない。いくつかの選択肢を組み合わせていることがあってよい。そして、できる限り自分なりの選択肢を見出し作り出すことが大切だと思う。

こうしたいろいろな対応のなかから、状況を考えて選んでいく。選べないで、選ばないで、成り行きに任せる対応もあろう。なかには、「長い物には巻かれろ」式に、「上」が言うとおりにする、というのもある。他者に預けて自分は退く、というのもある。

2. 正面突破を選びがちな若い人

世の中の流れが、機械のように決まった通りに、かつスピーディに忙しく進んでいる中では、難題打開のための選択肢がないように見えることが多くなっている。選択肢があるとしたら、「流れに乗る」のをやめて、外れることだけだと感じることもさえる。

新型コロナワクチン接種にともなう副作用の可能性が報道される中では、接種の流れに乗るか、乗らないかという選択肢しかない、というのもその一例だろう。

150年以上前には、生まれ育った家族や集落の中での仕事・役割・生活・人間関係は、慣習的にかなり決まっており、それに沿って進む以外の選択肢は考えようがなかった人が多い。

それに代わって、近年では、学校・職場・国家が据えた一本のルールに乗るか乗らないか、あるいは数本しかないレールのどれかに合わせて歩むことへと変化した。と同時に職場選び、配偶者選びといった人生の重要場面で、個人としての選択が迫られるようになった。それも、広大な土地のなかに敷かれた何本かあるレールのどれを歩むかという選択になっていそうで、当事者にとっては選択すること自体が圧迫感を与えるものになっていそうだ。

若い時は、難題に直面した際に、正面突破を図ろうとする人を見かけることが多い。たとえ知恵と経験が不十分でも、エネルギーがあるからだろう。難題と自分の力量との間に大きな開きがあることに気付かず、無鉄砲にぶつかっていくからかもしれない。

あるいは、据えられたルールに沿って、おとなしく歩いていくこともあろう。周りの大人たちの忠告に従うのが、安全だと考えて、かれらのいうなりに歩むこともあろう。

いずれにしても、「やるかやらないか」という二者択一であることが多く、「やればOK、やらなければ敗北」などと考える人もいよう。

3. チャレンジ体験が少ないまま、大人になっていく

そうした難題に直面して、「自己崩壊」めいた状態、自暴自棄状態になる若者もいる。あるいは退いて自分を閉ざしてしまう状態も見かける。将来に夢・希望を抱いて、その実現に向けて取り組むという若者に多いはずとしたりあるようだが少なくなっているように思われてならない。

自暴自棄になりそうな際、「身を守る」つまり自己崩壊を防ぐことが大切になる。「かっこつけて、玉砕する」ことではまずい。まずは、自分自身を守り、安全を確認し、そのうえで、色々な所から知恵を得て、そして休みつつエネルギーをためて、再度挑むか、別の道を選んで進めばいいのだ。「転進」つまり真正面から挑む以外の道を選ぶことは、恥ずかしいことでもなんでもない。

課題に取り組むための試行錯誤を認めず受け入れない大人が周りにいるとしたら、それは当人ではなくて、周りの大人の度量が小さく、力量が欠けていることを示すだけだ。

10代半ばから20代半ばまでに多い難題に直面する以前の幼少期に、多様なチャレンジ体験を積み重ねていることも重要だ。そうしたチャレンジ体験を積み重ねて、ハードルがより高いチャレンジにも自己崩壊しないで対応できるようになっていく。大人の過保護のために、チャレンジ経験が少ないまま年を重ねていくことはとても可哀そうなことだろう。「ルールに沿って歩め」と、大人が強制したり勧めたりするのは、そうした事態を生みやすくする。

前回の最後に述べた大人の過保護のもとに与えられたルールに沿って歩むばかりの、チャレンジ体験の少なさの問題性は、対人関係についても言えよう。

受験専門高校出身で、テスト漬けの「過保護」＝「過管理」生活を送ってきた若者が、大学生になり、「過保護」とは対照的な「放任」状態に置かれ、友達どころか知人さえいない状態のなか、自分でなにかも調べてチャレンジするしかない状態になった時に、「失速」状態になることが多い。その問題性は、ここ50年近く指摘され続けてきたことである。

私のブログ記事のなかで、2017年10月29日の「人間関係経験が少ないだけなのに、「人見知り」性格だと決め込んで、人前で積極的にならない人 私流・人間関係スタイル12」は、随分多くの方に読んでいただいた。それは、「人見知り」という性格があるというより、人と「見知る」機会があまりにも少なかつただけのことではなかろうか。自分が「人見知り」性格だと思い込んでいる人も、私のワークショップ型授業のなかで、沢山の色々な人々と付き合いを積み重ねると、知らぬ間に「人見知り」ではなくなっている自分に気づいていくからだ。

4. 試行錯誤を大量にする体験が不可欠

チャレンジ体験の少なさ、そして「人見知り」は、多様なモノ・コト・ヒトと出会う体験の少なさが主因だ。そして、「ルールに沿って」歩む、ないしは「こうすべきだ」という標準への囚われ過剰のなかで、「失敗を許せない」という気持ちになり、取り組み自体から退いてしまう結果でもある。受け身の姿勢が体質化した若者には、「下手な鉄砲数打てば当たる」とばかりに試行錯誤をしていくことは受け入れられないのだ。

一般的に言って、子どもはいろいろなことに興味が向き、やってみようとする。持続的にやることは多くない。安定的持続的にやることが習慣づけられた大人は、いろいろなことに次々とチャレンジする子どもを見て、「この子は飽き性なので困ってしまう」といいがちだ。

だが、子どもはいろいろなことに目移りし、やってみる中で学び成長していく。持続的にやっているとしたら、「大人くさく」なっていると思った方がいい。それは20歳代まで続く。そうした点からも、転職の多さは許容範囲と考えた方がいいのかもしれない。

子ども若者は、いろいろなことをやってみる中で、世の中について知り、自分について知り、自分の特性・アイデンティティを見いだしていく。その過程で、「性格」が変わったといわれるようなことがしばしば登場する。

ひるがえって、大人もそうであるかもしれない。目移りしたりやってみたりすることのテンポが、子どもと比べてゆっくりしているだけではないだろうか。とくに、50歳代末から60歳代にかけては、そうしたチャレンジがしばしば生じる。新たな人生ステージを作り上げる過程にある人が多いからだ。

ここ100年のように、変動につぐ変動の時代にあっては、大人にとっては未体験の世界を、子どもたちは生きていくことになる。そうなるにつれて子どもたちを大人の体験の世界に閉じ込めるのは、時代逆行だろう。子どもの立場に立つよりも、大人のエゴイズムの枠内に、子どもを閉じ込めているのだ。

5. 可愛い子には旅をさせよ

子どもたちには、自分なりに生き方を創造していくための準備として行う多様なチャレンジに取り組むことが必要だ。大人の役目は、子どもの安全安心を確保し、経済的に保障していくことへと移っていく。それが可能な10～15歳の年頃にどれほどできるだろうか、そこが一つのポイントである。それ以降は、大人のサポートは陰に隠れて、子ども自身がチャレンジすることが必要なのだ。大人の出番は、安全安心確保という「救急」的場面に限られていく。「可愛い子には旅をさせよ」ということわざは、この時期から意味をもつ。

学校においても、この時期はチャレンジする特定分野の多様な専門家が対応することに移っていき、それをコーディネートする役目として教師の仕事も位置づけられていく。教師自身も担当教科をもって専門家的性格を高めていく。現状は、教師の多様性と若者の進路の多様性とのマッチが不十分であるが。

だが、残念ながら、その時期に、学校の偏差値・テストに過剰依存する状況に至る所に出現している。実は、「依存される側」の学校教師も、そうした力量が育っていないのが通例である。そして、そうした力量を発揮することではなく、ルールを歩むことを管理する役目に学校や教師が押し下げられている現状が広く見られる。現在の教師が10代を過ぎたのは、偏差値・テスト過剰依存時代だったため、教師自身がそれらへの依存体質が深部にまで沁みとおっており、若者のチャレンジをコーディネートする役目を果たし切れないことが多すぎるのである。

そうした意味では、偏差値・テスト依存がみられない、多くの保育園や学童クラブ、あるいは特別支援学校の方が健全だし、多様な世界につながる豊かさを持っていることが多いかもしれない。

多様なチャレンジをする「旅」に出すのが心配でたまらない親は多い。だが、「旅」に出す事は子どもを独りぼっちにするわけではない。大人になっていく過程で出会う難題にぶつかっていくために、親の保護だけで対応するのではなく、子ども自身が築きだすつながり、ネットワークをいかに豊かにするかが問われていく。それは、「親離れ」でもある。これから直面する難題にも、子ども自身が新しく形成したつながり、ネットワークを活用して対処していく。「困った時に相談するのは誰ですか。」という質問調査がかなり前から行われているが、低い数値を示す「親」「教師」と対照的に「友だち」が高い比率を示してきたことが、そのことを示している。

シングルの生き方 2021年02月03日～02月23日

1. 多様なシングル生活をしている人が多い

今回は、『生き方』がテーマだが、未来に向けていかに生き方を創造していくかに焦点を当てたい。つまり、過去や現在より以上に、未来の生き方を創造構想するものとして考えていきたい。

最初のテーマは、「シングル」の生き方だ。つまり単身、「お一人様」として、いかに生きるかということだ。

現在、一人で暮らす人が多いだけでなく、増加しているのだろう。ただ、「一人暮らし」というと、一軒家で、あるいはアパート・マンションの一室に一人暮らししているというイメージが強い。しかし、「一人暮らし」の事例は、非婚の若者・中年、配偶者と離死別した人、単身赴任者、配偶者のいない高齢者などを含むものである。

そして、「ひとり」というと、孤独・孤立をイメージし、否定的存在として受け止め、できれば避けたいと思う人が多い。

こうしたイメージがあるなかでも、かなりの人がシングルで暮らしているという事実がある。上記例のほかに、児童養護施設や老人ホームなど、子ども・高齢者施設の住人。シェアハウス・グループホームの住人。寄宿舎住人。今は少ないが、住み込みで働いている人もいる。DVを避けるため、シェルターで暮らす人。ホームレスの人。刑務所で暮らす人。

こうしてみると、かなりの比率の人がシングルで生活しているようだ。複数の人々で構成する家族単位で生活するのが「普通」で「標準」だと思い込んでいる人が多いが、そうとはいきれない実情がある。

そして、シングルで暮らす人々が、孤立しているかということ、そうとは限らない。多様なつながりのなかで暮らしている人が多い。家族と近居する人。近隣の人と頻繁にいろいろなことをしあって暮らす人。小規模会社の共同経営や文化スポーツサークルなどいろいろな自主的組織にかかわって、緊密なつながりをもちつつシングル生活を送っている人も多い。

世帯としては登録していないが、複数の人が同居している例も多い。グループホームなどにも、その例は多いだろう。さらに血縁ではないが、養子養親里親里子などとして家族の形で住んでいる人もいる。LGBTを法的に受け入れていない地域では、事実上という形で同居している人も多い。さらに「同棲」の形で暮らしている人は相当数に上るだろう。さらに、「家庭内離婚」「別居」という形で事実上のシングルの方たちもおられる。このような方々を家族という言葉を使って家族であるないと説明するかどうかは別にして、多様なシングルの生き方の一つをなしているといえよう。

以上述べてきたことを見ると、誰でも「一人」にならないとは限らない。いずれ「一人」になるだろうと感じている人も多い。だから、「一人」で暮らす準備・心構えを必要とする人がますます増加するだろう。そして、多様なつながりをつくりつつ、「一人」暮らしを準備することが役立つと感じる人も多いだろう。

2. シングルの人達が営む生活共同体・生活単位

前回見てきたことを踏まえると、一人で生活するにしても複数で共同生活するにしても、旧来の血縁、もしくは愛情・

合意を基盤とするカップルという家族の単位に対して、それとは異なるありかたで生活する人たちがかなりいることに気づかされる。

こうなってくると、人々の生活を家族という単位でくくって考える有効性は著しく低下する。多様なつながり形態の一つとして家族があると捉える方が現実的であることが増えている。シングルが例外的存在であるわけではないのだ。統計や研究の世界では、こうした生活単位を家族や世帯という言葉でくくって語っているが、その妥当性が問われてきている。

家族には血縁観念が強く結びついている。そして現在では、愛・合意で結ばれたカップルによる結婚という制度をもとにして、家族があるという考え方が一般的になっている。しかし、家族の形の多様化の進行のなかで、それらを超えて、血縁のあるなしにかかわらず、生活共同体・生活単位という観念で考えるのを現実的にしていこう。その生活共同体のなかには、シングルつまり単数で構成する場合と複数で構成する場合があると考えることになる。

そして、それらは、「婚姻以降一生続く」というように長期にわたるとは限らない。構成の仕方、構成員が何度も変化していくのがごく普通になる。

ここでシングルの人達が営む生活共同体・生活単位のありようをイメージしてみよう。

- ・住の共有。共同使用のリビングルームを中心に、その周りを個室が取り囲む建物がある。
- ・食。個食ではなく、住人の多くが集まって食事する。輪番で食事当番を営む。
- ・子育ての場合は、親子などの複数が前提なので、シングルとはいいいにくいだが、その複数のメンバーのなかで「大人が一人」という場合で考えてみよう。当番制にして、誰かが子どもたちを集めて世話し、当番以外の親は仕事や活動に専念するというグループを作る例。そうしたことを専門化したものとして保育園や学童クラブがある。親たちが共同して設立運営する保育園・学童クラブも多い。そうしたものは、シングルとして生きる親には心強い。
- ・同一の職業を持つ人たちが、共同生活をしながら、職住接近で仕事を営む例がある。土木建築現場で、その例を見かける。工芸に携わる例もある。遠洋漁業向け船舶でもあるようだ。
- ・同一住居ではなく近居で、趣味関心を共有する人々が、共通活動を頻繁に行って、人間関係を深くする例もあろう。

なかには、共通の場などを共有するわけではなく、つながりを持ちつつも、付かず離れずの関係を維持する形もある。

3. 家制度からの卒業がなかなかすすまない

「シングル」という言葉は、婚姻とのかかわりで使われることが多い。その婚姻は、戦前は家（家族）制度と結び付けられていた。そして、カップル対象を選ぶ範囲は、現在と比べれば、かなり狭かった。従兄弟従姉妹同士のカップルにみられるように、血縁関係をもつカップルも広く見られた。

そして、カップルをめぐる周りの関係がかなり限定的な範囲に収まっていた。そこで、カップル形成自体が、周囲の関係をバックにして、時に本人の意思にかかわらず、また本人同士の相談なしになされることがしばしば見られた。また、重要なことに、離婚も二人の相談・合意を経ないでなされることが多かった。

しかし、戦後の憲法法律下では、婚姻は両性の合意で成立、あるいは解消することが基本になった。にもかかわらず、実質的にかなり長期にわたって、戦前までのありようが継続してきた。いいかえると、家制度からの卒業がなかなかすす

すんでいない、ということである。

これらの体制のもとでは、婚姻は、権利として考えられるよりも、義務として考えられることが多かった。そのため、シングルでいることは、「義務違反」のようにさえ受け止められることがあった。婚姻のみならず、子どもを生み育てることもまた、権利からの発想よりも義務からの発想で受け止められがちであった。そのため、子どもを持たないカップルは「ひげ目」さえ感じることも多かった。

婚姻をめぐる民主主義のとらえかたもまた、婚姻しないことを除外して、婚姻が無条件の前提とされ、夫婦の対等平等を軸に、民主的夫婦が構想された。シングルのありようは想定外にされたのである。ところが、このような関係ではない多様なありようが、事実として徐々に広がっていく。つまり、カップルなしも含めて、多様なカップル関係が広がる。そこでは、戦前によく見られた血縁関係者によるカップル形成はすでに例外になっている。

にもかかわらず、多様なものを肯定的に受容することはそれほど広がらなかった。多様なありようを受け入れることにつながる動きが広がるのは、ようやく1980年代以降である。多様なありようを受け入れるかどうかをめぐって、議論が社会的に広がり、時に沸騰する。

4. シングルにしてもカップルにしても多様な形の創造へ

80年代以降の多様な関係をめぐる議論のなかでは、たとえば夫婦別姓やLGBTのありようを法的に認めるかどうか、その焦点になった。もう一つの焦点は、シングルの生き方を、生き方の一つとして認めるかどうかであった。そのなかで、カップルで共同生活するにしても、制度上の結婚形態をとらない例も広がり、シングルかカップルかという二者択一ではなく、多様な形が生まれてくる。

さらに、子どもを作らない生き方をめぐっても、多様なありようが生まれてくる。そのなかで血縁関係をもたない親子関係をつくるありようも見られ、その社会的承認をめぐる議論も広まっていく。たとえば、養子養親関係をつくるにしても、シングルでの養子養親関係、カップルでの養子養親関係などと多様である。また、里親里子関係の場合もある。私の知り合いのアメリカ人は、シングルのままで日本で引き取った子どもの養親として、子育てを終えた。このように多様な親子関係例が増えている。

こうしたことをめぐって、北欧西欧では、早くから多彩な展開があり、それを承認する動きも広がり、それらの体験から生まれる知恵は、すでに20年以上の蓄積になっている。

対照的に日本では、現在それらを承認するかどうかでの激論が続いている。戦前までのような家父長制システムつまり家制度を引きずる発想が、法的にはなくなっても、その名残が長く残り、多くの人の意識において、家制度にもとづく形のままになっている。そのなかで、多様なありようについての経験の蓄積が浅いままである。

こうしたことをややこしくしている一つの要因は、財産の所有・継承（つまり相続）の問題にある。制度上では財産所有は個人単位であり、相続も個人単位であるにもかかわらず、家（建物としての家だけでなく、制度としての家）が、事実上の単位になることが多い。その際、男子とくに長男が個人として家の代表者になることが多い。家制度が根強く残っているのである。財産には墓などもかかわってくるが、沖縄では位牌（トートーメー）継承に一つの重要な関心が向けられてきた。

養子縁組は、戦前来の家制度をひきずり、「家」の存続、財産継承に関心を集中させて展開することが多い。そこでは、子どもを親の所有物ととらえる発想が残り、親子対等で、自由な契約として養子関係を作る発想は、ようやく芽生え始めた段階のようだ。

5. シングルの生き方の模索創造 つながりの創造と結び合う

日本では、親子・夫婦を軸にした複数メンバーで構成する家族（世帯と呼ぶことも多い）は不可欠であるとする観念が持続してきた。国民健康保険が世帯単位で運営されているのは、その例だろう。また、介護も家族介護に依存する部分が多く、大きな問題を引き起こしている。

こうした流れのなかでは、家父長制には反対だが、家・家族は不可欠とする人が結構いる。それは、「父・母と子ども」という構図を標準とみなし、それをこだわることで、それ以外を例外として見る体質を広く生み出している。その構図の中では、シングルは例外とみなされ、解消の営みを追求すべきだと考えられてしまう。離婚率が高く単親家族も多い沖縄でも、こうした傾向は強い。

そうしたなかにあって、シングルを例外ではなく、多様なありかたのなかに正當に位置づけることが求められる。

シングルの生き方をめぐってもう一つの克服すべき見方として、シングルは社会的関係から切り離された、あるいは社会的関係を断ち切った孤立存在であるというものがある。シングルはそうしたものではなく、多様なつながりのなかで、シングルで生活しているというありようなのだ。

しかし、シングルの生き方についての知恵の歴史的蓄積が浅い中で、シングル生活を余儀なくされた場合に、不安感を強く持つことが広く見られる。それについては、若者世代の場合と、50代以上で離別死別によってシングル生活を余儀なくされた場合では、事情が大きく異なる。

50代以上のそうした事例は、シングル経験の少なさのために、シングルを消極的否定的なもので避けるべきものにとらえがちである。そしてその世代は、シングル当事者だけでなく、若者がシングルでいることへの不安にもとづいて介入したくなりやすい。それは、シングルの生き方を否定的なものにとらえる中で長く生きてきたためであろう。と同時に、自分自身がシングルになることへの恐怖心が強いためでもある。

シングルへの見方をめぐっては、同一人にあっても、年齢変化にともなう変化が起こりやすい。それは、意識のうえでも、生活のうえでも起こりやすい変化だ。若いころには、「一生こういう生き方をする」という誓いをたて、それを追求するという考え方をしがちだ。だが、経験を重ねるなかで、若い時期の考え方を変更することは起こりやすいだけでなく、むしろ変更することが自然の流れとして生まれやすくもある。そして、社会変化が、それを促進することが多い。人生・生き方というものは、若い時に固めて、一生貫くというものではない。むしろ、年齢を経るなかで変化していくものだろう。

シングルとかカップルの作り方といったものは、そういう変化が起こりやすいことといえよう。

6. シングルの生き方で考えたい多様な面

シングルの生き方をめぐって書いてきたが、書き始めると、ほんの一部分しか扱っていないことに気づかされる。私自身の見聞・経験があまりにも不足しているからだ。そこで、こんなことも考える必要があろう、という項目を並べておいて、他日を期すことにしよう。

- ・感情面 身体面 健康管理を含む
- ・生活共同面
- ・高齢者・障がい者の世話介護 子どもの教育・しつけ
- ・経済面
- ・生産における関係・共同面
- ・娯楽を含めた文化面

- ・つながりの作り方 境界・距離の作り方 時間面
- ・メンバーの相互承認 相互拒否 境界を出入りする例
- ・制度的支援の必要 制度の介入の許容・拒否
- ・年齢差によるとらえ方の違い
- ・類型別検討

沖縄若者と職業選択

2020年11月19日～12月22日

1. 農業などの自営と「勤め人」

沖縄若者と職業選択をめぐる歴史的な大変化が見られるが、戦前期および戦後しばらくは、家業である農業を継ぐことは、圧倒的に多数派であった。しかし、そうでないありようが、20世紀に入る頃から増え始め、1960年ごろを境に農業が少数派になり、その後も激減していき、いまや例外的存在になりつつある。つまり、「勤め人」の形をとる多様な職業につくことが、ごく普通なことになってきたのである。と同時に、職業に就く前に、学校通学することが、ごく普通のことになってきた。学校を経由してから職業に就くことが通常となるのである。

一定期間、職業に従事してから学校に通学するという事例は、例外中の例外だ。20世紀初頭には、そうした例はあった。また、戦後、就学を断念しなくてはならなかった人に、夜間中学などを用意することが行われるとかが、その最近例である。

こうして、学校卒業後、直ちに、あるいはしばらくして就職することが通例となった。また、就職後しばらくして転職する事例も多い。そして、いくつかの職場を体験して、20歳代後半から30歳代前半にかけて定まった職場には、かなり長期に定着する例が多い。

ということは、卒業後しばらくは無業者になる例や転職過程で無業者（≒失業者）になる例が多いということでもある。その過程は、無意味なわけではない。その過程でみられる試行錯誤が、豊かさをもたらすと捉えてはどうだろうか。試行錯誤の中で多様な生き方を発見創造することが多いのだ。

これらの点では、卒業後直ちに就職し、転職過程での失業期間が短い例が多い他府県の地域とは、かなりの違いが生まれよう。敷かれたレール自体が止ることが少ないために、レールからはずれるとパニックに陥る例が多い地域と、沖縄の場合はやや異なると言えるかもしれない。

それでも、最近の新聞報道が示すように、定職に定着しないまま、「引きこもり」状態になる40代50代が存在している。「就職問題」というと、10代20代に焦点があてられるが、中年期老年期の問題が急激に拡大していきそうだ。その問題の解明と、対処についての創造の必要が高まっていくだろう。

2. 本人の希望の形成と保護者の言葉

ここで、若者の職業を中心とした進路選択要因について考えてみよう。まずは要因を本人の希望など主観的なものから、産業動向など本人の希望と直接にはかかわらない客観的なものへの順で並べてみよう。

1) 本人の希望

本人の希望を育むものはいくつかある。まず、短いとしてもそれまでの人生経験がある。たとえば、病・障がい・老・死の見聞体験・介護体験があって、あるいは本人の病気・治療の体験があって、医療福祉関係の職業を希望することは多い。

また、最近では、観光レジャースポット体験が、強い刺激を与えて、観光関連業種を希望することもあるだろう。

家業・家事労働（含む手伝い）体験が、その仕事への好き嫌いを生み、職業選択に影響を与える。「こんなきつい仕事はやりたくない」「きつい仕事をしている親を見ると、その仕事に就き新しいやり方を開発したい」といったことが出てくる。

年少のころは、マスメディアの影響が強く、スポーツ選手・歌手などになりたいという「夢」を持つ者もいる。また、子どもの頃に出会うことが多い保育士・教員・調理師・お菓子作りなどを希望する例も多い。学校で行なわれる職場体験・先輩の講話などが刺激を与えることもある。

本人の特性・好みも、希望づくりの大きな要因になる。「身体を動かすことが好き」「頭を使うことが得意」「人間関係の輪のなかにいることが好き」「手先が器用で、モノづくりに強い興味をもつ」といったことである。

2) 保護者をはじめとする大人の要請・アドバイス

これには、直接のメッセージと暗黙のメッセージとがある。直接のメッセージとして、よく聞かれる「教員・公務員になりなさい」というのは、生活の安定性への期待のメッセージだろう。多いのは、「自分で選んだ道をきわめていきなさい」という類だろう。それを聞いて喜ぶ若者もいれば、辛いと感じる若者もいる。なかには、「県外に行かないで、沖縄内で親の近くに居なさい」、逆に「可愛い子には旅をさせよ」ということで、「県外に出ていきなさい」という親もいる。これらの言葉には、子どもの希望を抑制するタイプのもものと、促進し希望をふくらませるタイプのものがある。

何もいわなくても、「後ろ姿が語っている」というタイプの暗黙のメッセージも多い。子ども自身が家族の事情を「忖度（そんたく）」することも多い。とくに経済事情は大きな要因になる。「本当は〇〇になりたくて▽▽を学べるところに行きたいが、家の事情を考えると無理なので、定時制高校で頑張る」といったものである。

これらのなかで、家族による違いを大きく生み出すのは、学校にかかわることにどれくらいの比重をかけるかどうかである。言い方を替えると、学校的なものに「囲われる度」「依存度」「囚われ度」「密着度」の強弱である。

保護者が、子どもの学業成績に強い関心を抱き、子どもの家庭学習に強くかかわり、「囲われる度」「依存度」「囚われ度」「密着度」が強い場合、学校が提示する進路選択に保護者も本人も従おうとする傾向が強い。そこでは、学業成績の出来具合が優先され、その結果として、職業選択が生まれてくるといった例も出てくる。職業選択が先にあって、その選択を可能にする学業成績に達するために学習するというのとは、逆の思考である。

3. 友人知人先輩、学校

3) 友人知人先輩の動向・意見

沖縄では、職場選択にかかわって、多様なつながりがきっかけになる例は多い。とくに新卒就職ではなく、中途就職には、ハローワークなど並んで、時にはそれ以上に、つながりが重要な位置を占める。

そのつながりには、親などの親族つながり、職場つながりなどとならんで、先輩後輩関係、地元の縁、同級生つながり、趣味遊びつながりなど、若者世界内部の多様なものがかかわる。その多様さが沖縄の特質をなすといえるほどである。

そうした友人知人先輩後輩同級生などが作りだす仲間関係は、保護者の影響力よりも強い事例に溢れている。代表的なものには、部活仲間やクラスメートがあり、また趣味や遊びを通して作ったつながりがある。その際、部活やクラスがそのまま仲間関係を作るというよりも、それらの場で形成されたとくに親しいつながりが仲間関係へと展開し、模合を活用したりして、つながりを継続していく。

だから、職業にかかわる学校の教育的営みよりも、学校が提供した場を通して、若者自らが作り出すつながりが重要な意味をもっているともいえよう。それらには、コミュニティつながり（地元つながりと呼ぶ人もいる）とアソシエーションつながりの混合といえるようなものといえるかもしれない。

4) 学校

学校による職業にかかわる教育をみてもみると、30年近く前までは、学校による職業紹介・斡旋が強力に存在した。学校による推薦で就職する例は、中学高校でかなりの数に上った。いわゆる集団就職は、1960年ごろよりかなりの期間、有力なものだった。

しかし、1990年代から激減し、学校を通しての就職は、医療福祉系などを例外としてゼロに近づいていく。中学や高校普通科では、進学における学校選択での進路指導はあるが、就職指導は例外的存在に近づいている。学校がかかわる進路指導は、進学先選択では大きいですが、職業選択ではそれほどではないのだ。大学での就職でいうと、どの大学を出るかが中心で、大学での学業成績は、あまり問われないのが、長年の実情だ。他府県の「大手」私立大学では、一部上場企業にどれだけ入ったかに取り組み焦点を絞り、大学案内パンフレットに就職先一覧を掲載する例は、ごく当たり前になっているが、一部上場企業が数社しかない沖縄では、それほどではない。

だが、学校にとっては、とくに進学高校では、進学実績が高校の序列・運命を左右するという感覚が強く存在する。本人の希望ではなく、高校の進学実績をあげるために、受験校を高校側が決める例は、他府県では長く存在してきた。沖縄でも、進学専門校ではありそうだ。

ということで、進学については、本人の必要以上に学校側が熱心な例を見かけることは多い。それでも新規卒業生の進学就職を対象にする例は多いが、進路未定のまま卒業したり、転職したりした卒業生へのケアをする例は多くない。

4. 実業系学校

5) 実業系学校

前回は、小中学校、高校大学をみたが、その多くは高校でいうと「普通」科が主としてイメージされていた。だが、実業系学校、つまり実業高校・専門学校・職業訓練校では、事情が大きく異なる。そして、小中校→高校普通科→大学→就職という流れとはかなり対照的な特質がみられながらも、多くの人の視野外に置かれてきた。といっても、実際には、実業系学校を通して就職する率はかなり高い。若者の就職の際に、これらの学校は大変重要な役割をはたしてきたのである。

たとえば、医療福祉系の職業では、医療福祉系専門学校卒業者が高率を占めている。また、1960年代70年代において、工業高校卒業生は、製造業において重要な役割を果たす例が多かった。また、資格が就職にとって重要な職業では、実業高校や専門学校卒業生がかなりの比率を占める。また、職業に直結した職業訓練校の存在は大きい。農業大学校もその例だろう。

中小企業が多い沖縄で、実学的力量が要求される職場にあっても、OJT(職場での職業訓練)が中心を占めてきた。しかし、職業に必要とされる力量を実業系学校で獲得してきたものを採用する傾向は高まっていきそうだ。英数国理社といった科目の成績に目が行き、その偏差値に関心を向けてきた「普通科」を卒業しても無業者になってしまう率が高いことが問題になってきている。そのなかで、大学進学者数に近い数の人が、実業系専門学校を通る道を選んでいる。な

かには、大学の存在価値を問うような動きさえあろう。

こうしたなかで、英数国理社といった科目の知識習得に焦点化したタイプの主流の学校の機能不全状態が拡大している。とくに若者の職業とのかかわりで、そういえよう。数十年にわたって続いてきた偏差値システム、学力テストシステムの機能不全といってもよかろうが、それに代わる案があっても、それを実施する態勢は薄い。そうしたなかで実業系学校を活用する若者側からの強い対案的提起が広がりつつあるともいえよう。上昇し続けた大学進学率が停滞し、コロナ禍で大学から距離を置き始めた若者の増加は、それを示しているのかもしれない。

6) 第三者のアドバイス

ここまで述べてきたほかに、ハローワークを含め、職業紹介やアドバイスをする第三者機関がある。といっても学校在学生については限定的だ。そのなかで学校卒業後転職する若者にとっての役割が大きいことに注目したい。

また、開業率閉業率の高さが特徴的である沖縄であるが、そのなかでなされている起業サポートが重要な役割を果たすと言えようが、意外に拡大していないのは残念なことといえよう。

5. 産業動向（求人動向） 業種特性

7) メディア情報

就職にかかわるメディア情報には、多様なものが存在する。フリーペーパーとして配布される就職情報誌もその一つだろう。さらに、仕事案内の類の書籍、またインターネット情報、さらにはSNSを通じた情報が広がっている。新聞の求人情報も、減少傾向にあるとはいっても、一定の役割を果たし続けている。

8) 産業動向（求人動向）

産業動向（求人動向）が若者の職業選択を強く規定することはいうまでもない。沖縄の地域特性として、第三次産業の比率の高さが言われている。とくに学卒に伴う就職にかかわって、例外的存在にされてきたときえいえる飲食業・観光業・健康福祉産業などが重要な軸として位置づけられてきている。しかし、そのことに対応した若者へのサポートは意外に弱い。仕事起こしを軸にした地域起こし、地域ブランドの育成などは、観光業を軸にした第三次産業と結びつくことが多く、重要なアプローチだ。

産業構造が、情報産業・観光業・健康福祉産業を軸に大きく転換しつつあると同時に、第一次・第二次・第三次の三つを合わせた六次産業と言われる今、それらに対応する若者の職業動向を創造していく必要があるだろう。それは、1990年代からスタートしているが、2020年代になると、主流的なものになりつつあるときえいえよう。そして、それらはグローバルな動きとつながるグローバルなものになりつつある点にも注目しておきたい。「世界のウチナーンチュ大会」を契機として、また東アジア近隣地域とのつながりの強まりの中で、こうした点の意識的追求が必要になってきている。

9) 業種特性

業種による特性が、若者の職業選択に強く影響する事は言うまでもない。給与だけでなく諸待遇（福利厚生、勤務時間、勤務地、休日取得など）、職種（肉体的力量・スキル・知的力量・人間関係力・創造力）、そして業種のもつ魅力や将来性などがかわる。安定性を中心にして公務員を選ぶという傾向は、少しずつだが、弱まっているようだ。

6. 歴史的変化1

ここで、これまで述べてきたことをもとに歴史的変化を概観しておこう。

まず1940年代生まれの人々が学校に通った1960年代初めまでは、農業・職人など家業の仕事を継ぐのが多数であり、幼少時から家業家事労働をしており、「シマの若者」といえる人が多かった。

1950年代から1960年代生まれの人が通学する1960年代から1970年代にかけて、家業を継ぐことが激減し、「勤め人」に就職することが広がり一般化していく。その際に、学校が不可欠の通過点となり、学校を介した進路選択が拡大していく。そして、学業成績次第で進路選択が左右することが増加し、点数秩序偏差値秩序が広がり、進路選択にも競争的色彩が強まる。

就職先は、第一次産業から第二次第三次産業へと移っていくが、製造業の拡大が弱い第二次産業にあっては建築土木関連が増えていく。他府県では、点数秩序の行き先にある終身雇用制の大企業は、沖縄では限られており、有利な就職先の不足が、県外就職を後押ししていく。その中で、公務員教員という安定した仕事への道の競争が激化していく。

そして、そうした道を望む家族においては、学校での成績上昇を後押しする活動を中心とする「家庭教育」が広がる。こうした秩序は、1970年代以降生まれの若者が通学する80～90年代になると、拡大一般化し、高校の序列化が進行し、テスト勉強の問題性が表面化し、不登校・いじめ問題などが拡大していく。

そうした傾向は、2000年代以降も続くが、健康福祉産業・情報産業・観光業の拡大のなかで、県外に出ないで、県内就職を求める若者が増え、公務員・教員一辺倒ではなくなっていく。また、第三次産業の拡大と対照的に第二次産業の職は広がらず、建設業などでは縮小傾向さえ見られる。

こうしたなかで、2000年代以降生まれの若者が通学する2010年代以降になると、多様な進路を求め、進路先としての専門学校が増え、高校にも、通信制などをはじめ従来とは異なるありようが広がる。

また、家族の形の多様化は、それまでも広がっていた若者本人の意向中心の動向を後押ししていき、本人の個人判断重視傾向が強まっていく。とはいえ、本人の判断を重視するといわれても、本人が迷い困ってしまう事例も増え、多様な試行錯誤が始まり、なかには「引きこもり」傾向さえ広がっていく。と同時に、意欲的に進路を創造し、仕事おこしをしていく動向も広がっていく。

7. 歴史的変化2

前回に続き歴史変化だが、2010年代および今後の趨勢の前提をなす諸状況について書いていこう。

高額収入をめざして県外就職する動きは弱まり、「自分らしい」生き方を沖縄とかかわらせて模索する動きが広がる。それは大きく見れば「沖縄おこし人生おこし」の進路創造といえるかもしれない。そして、Uターンを含めて県外から移住する若者たちが増加し、中途就職・転職が従来通り、ないしはそれ以上に増えていく。

そのなかで、高校大学でも、専門学校のように就職と結びついた実学を求める傾向が広汎に見られる。対照的に高校普通科の問題性が表面化してくる。そして、上昇し続けてきた大学進学率も、40%前後で止まっているようであり、コ

コロナ禍で休学退学する事例も話題になっている。

長年低額のままできた沖縄県民所得は、ようやく上昇傾向がみられるようになったが、コロナ禍もあり、今後は不透明である。と同時に大量生産大量消費に支えられた右上がりの日本全体の経済動向が停滞ないしは縮小に転じてから、すでに長期間になっている。それに代わり、人的サービスを中心にする産業動向が広がっている。と同時に、グローバル化が叫ばれ、沖縄のもつグローバルなつながりの豊かさを生かす提案や展開が広がり、沖縄の持つ強みを活用する試みが広がっている。

こうした中で若者進路動向は、徐々になにがしかの変化を継続していこう。それは、中年期高齢期の人々の職業動向人生動向とも結び合う問題としても表面化していこう。

これまでの行政施策、産業動向が、これまで述べてきた流れに、より敏感になり、創造的な展開を模索していくことが、当事者である若者の模索創造と並行していく必要がある。そして、現在の職場への就職という形以外に、自分たちで仕事を、職場をつくりだす起業の動きが広がりそうだ。だが、それを後押しする取り組みはそれほど広がってはいないので、その取り組みをいかに強めるかも重要なカギになっていこう。

また、長時間労働・働き過ぎの改善がいよいよ重要な課題となろう。さらに、ようやく強まり始めた女性の就労を促進する動きをさらに強めていくことが重要になろう。

このように、沖縄若者の職業選択は、「沖縄起こし人生起こし」としての色彩をより濃くしていこう。

付2 HPに「人生・生き方2016～2019」の掲載 2020年04月12日

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」は、2007年にスタートしてからもう13年経過する。「生き方・人生」カテゴリーに分類される記事は、全体のなかで、「庭・畑」「自然」や「沖縄」「南城」「近隣」などと並んで、量的に多いものだろう。

その記事のなかで、2016～2019年に掲載したものを、掲載年月日順に編集した。前号「生き方・人生 2013～2015年」（2019年9月編集発行）に次ぐものだ。「生き方・人生」関連のものは、前号表紙に書いたが、今回で9冊目となる。

楽しく眺めていただければ幸いである。<https://asaoki.jimdofree.com/> 「浅野誠・浅野恵美子の世界」

収録記事の主なタイトルを紹介しておこう。

高齢期の生きがい

嫉妬（しつと） ライバル意識 勝負・序列にこだわる意識

都会と田舎

人生後半突入期の激動への対応

読者と創る人生後半期の人生創造物語

老年期に思うこと

連載新々人生

第二次人間関係 連載

人生構図

人間関係 連載第一次

個人ドラマとしての人生構図と老

私流・人間関係スタイル

中座する・途中でやめることも大切なことだ

人生の仕上げ作業

愉快的な70歳の日々

点数序列からの卒業を

夫婦ケンカをどうする

篠田桃紅「一〇三歳になってわかったこと」幻冬舎2015年を読んで、私と比べて考える

藤田孝典「下流老人 一億総老後崩壊の衝撃」を読む

住 a 家を買う・建てる

2021年07月27日~2021年08月17日

1. 20世紀後半の大量生産大量消費型商品としての住宅

「現代の生き方」ということで、『シングルの生き方』、『「べきだ」・「あれもこれも」・「しなやかに』、『嫉妬』、『難題に直面する時』と連載を続けてきた。

ここで趣向を変えて、衣食住など日常生活にかかわることに焦点をあてよう。まず、住についてだ。

衣食に先んじて、住を取り上げるのは、我が家の暮らしでもっとも特徴的なこととして住があるからだ。そうした例は多くないように思う。衣食に特徴をみせる例の多さと比べると、対照的なほどだろう。建物のことが中心になるが、建物だけに限定されない。暮らし方全般にかかわってくる。

我が家の暮らしの中での住については、50年間のパートナー恵美子の方が、私よりずっと熱心だから、彼女が書いた方がいいだろうが、私なりのもの、私なりの考えがあるので、そのあたりを書いていこう。

その住について、沖縄での現在の形を始めたのは、2004年9月なので、もう17年になる。それ以前のことは別の連載「私の人生」で、すでに書き綴っているのだから、それを参照していただきたい。今回の連載でも、多少は触れるだろうが。

最初は「住」のなかでも「家を買う・建てる」ことに焦点を当てて綴っていく。

20世紀後半「先進国」でいうと高度経済成長の中、大量生産大量消費型商品の普及が、住居にも影響をもたらした。日本でもそうした住居が大量に供給された。住宅は公的なものが少なく、売買の形で「私物」として扱われるものがほとんどであった。典型的には、まず木造建売住宅がある。またコンクリートが多いが、木造もある大規模集合住宅としてのアパート・マンションである。間取りでいうと、2(L)DK、3(L)DKが典型である。それらの多くは規格品といえるもので、個性的なものは少なかった。

それらは1960~70年代を中心に、農村から都市に移住した人々向けに大量供給された住宅であった。典型的には大都市郊外型団地、ニュータウンがある。

それらは、木造の場合、35年が耐用年数であり、コンクリートの場合でも、それより少し長いだけだ。建てられた住宅に耐用年数が100年を上回るものがそれなりにあった時代と比べると、対照的だ。最近のテレビ番組で、しばしば、そういう長い耐用年数の住宅が「古民家」「百年名家」として登場してくるが、20世紀後半に新築された住宅は対照的だ。実際、1960年代に建てられた住宅は、今では耐用年数がきて、建て替えられることをよく見かける。

そんな日本の住宅事情を見て、欧米の人から「ウサギ小屋」とからかわれたりもした。

写真の住宅事情を見て、欧米の人から「ウサギ小屋」とからかわれたりもした。

写真は、海岸から見る中山集落・タマグスク（丘の一番高い所）・我が家（写真中央 森の木々に囲まれている）



2. 大量生産大量消費感覚の住宅から脱皮

前回述べた大量生産大量消費型の住宅建築についてだが、沖縄でも似た状況はあるが、事情が少し異なる。沖縄の住宅建築では、1960年代に木造中心から鉄筋コンクリート中心へと移り変わった。台風が多く、風対策のためにコンクリート中心になったのである。

そのころの新築だった住宅の多くが、2021年現在建て替えされたか、建て替え過程にあり、そのまま残っているのは多くない。また、1960年代70年代の建築ラッシュのため、塩分抜きが不十分な海砂を使って、欠陥住宅として早期に補修ないしは建て替えされることをよく見かけた。実は、私たちが1976年に購入した西原の小波津団地もその事例で、購入後10年ほどで、県議会でも問題になり、大規模な補修工事がなされた。

このように大量生産大量消費感覚の住宅生産購入がなされたのが、20世紀後半の主流であった。

大量生産大量消費型商品としての住宅供給のありようを疑問をもち、それとは異なるありようを追求する動きが広がり始めるのは20世紀末であるが、21世紀に入ってさらに広がっていく。それは大都市や大都市郊外だけでなく、地方都市ないしは農村部でも見られ始める。それには地元民に加えて、大都市からのUターンIターンの人々がかかわり、多様な模索がなされる。「田舎暮らし」という形で、既存家屋の再活用もあれば、新築もみられる。それらは、大量生産大量消費型商品としての住宅とはかなり異なる。

実は私たちも、その例だろう。UターンなのかIターンなのか、2度目の沖縄生活なので、Nターンだと言ったりもしている。

100年以上にもなる古民家の場合、新築当時は、かなりの富裕層が建てた建坪の広い例が多そうだが、現在はそうでもない。たとえ小さくても個性的な家を作る人が徐々に増えている。

沖縄では、そうした動きと並行して、人口増が著しい都市近郊では、今もなお、大量生産大量消費感覚の住宅が供給されている状況もある。

ところで、20世紀後半に住宅を取得した人には、戦争で家を失った経験、あるいは戦後、ハイパーインフレにあい、貨幣価値の喪失を体験して、土地の資産価値に注目した人が多い。インフレ対策として不動産を取得するという「常識」さえ広がった。その感覚がバブルを加速させる。1990年ごろの不動産バブルの時がそうである。沖縄でも、基地建設で、宅地不足の中、機会さえあれば、土地を買い取ろうとする人が結構いた。

3. 土地造成

資産価値としての土地への注目は、1990年ごろのバブル期に頂点に達した。その土地の高値時代も終わりつつある。人口減少時代のなか、土地バブルがはじけ、土地価格の低下が始まり、さらに進むと予想されている。そして、土地を持つことに価値を見いださなくなる傾向が広がる。せっかく購入した分譲地に住宅を建てようとするときに問題がでてきて、放置状態にある土地をよく見かける。そういう土地は売ろうとしても、買い手が見つからず、価格が低下しやすい。

住宅が建てられないで、放置された土地は管理が大変だ。相続で悩むこともある。そこで、土地を不動産業者に安値で売り、業者が細かく分割して、「安価」な建売住宅を販売する動きも見られる。

住宅建築にかかわる問題の一つは建築コストである。かつて坪当たり単価が30～40万といわれていたが、いまや100万円を越すことがごくありふれるようになった。建築コストの高騰は、資材と人件費の双方で見られる。

その対処として大量生産方式ないしは工場生産方式で安価にできるような作り方をよく見かける。土地造成にしても、安易な施工でやる例を見かける。見栄え重視で安全性を軽視する。典型的には盛り土だが、2021年の熱海の災害例は、その怖さを示している。

急傾斜地であるために、売れ残った土地だった我が家の場合のことを書こう。傾斜地の多いこのあたりの住宅建設の場合、こうした土地は、盛り土を含むいろいろな施工で均してから住宅建設に取り掛かることが多い。周辺での建設例を見ていても、そう感じる。平らにするだけの造成のために、土地価格が坪当たり2～3万円増える。パイルを打ち込んで崩れるのを防ぐための工事などをすれば、さらに膨大な費用がかかる。

知り合いの土木建築にかかわる人が、一時は我が家敷地の候補に含めていた土地を見て、「盛り土だから危ないよ」と教えてくれたことがある。工事当事者自身がそういうのだが、土地購入者は平らになった風景しか見ていないから、「いいなあ」という印象をもってしまう。

対照的に、我が敷地は急傾斜で雑木が生い茂り、「森」状態だった。加えて、農地転用の手続きなどが必要だった。そんなだったから、何人もの人が購入を断念した。最近も近所の親しい人から、実は購入候補地として検討していたと告白されてしまった。

そんな「建築困難地」だったが、加えて私は「土地造成をしないで、可能な限り自然のまま、建築する」ようにお願いした。通常はしない要請だろう。

4. 「狭いながらもマイホーム」≡「ウサギ小屋」から脱け出ようとするが

戦後日本の住宅の多くは、狭いスペースにたくさんの機能を持たせる点に特徴があるようだ。そして、部屋の一つ一つに、台所、居間、浴室、トイレ、寝室、子ども部屋、応接間、玄関・・・といった機能に合わせた名前をつける。そして、部屋ごとに閉じられた空間にする傾向が強くなる。開閉がたやすいとか、開けっ放しとかは少ない。

戦前の場合、沖縄でいうと、一番座、二番座、裏座といった具合に、配置場所の名前になっており、多機能であり、その機能も流動的であることが多かった。部屋は開けっ放しにすることも多く、出入り自由が普通だった。

さらに注目したいのは、生産にかかわる機能が住宅に組み込まれていたことである。岐阜県の私の生家あたりで養蚕をしていた家では、蚕室と人間の寝室とを兼ねることもあった。生産と生活が混在する家が結構多かったように思う。土間があることも、農家ではごく当たり前であり、台所は土間にあった。婦人服仕立て業を営んでいた私の生家は、客の出入りがある「店」と家人が出入りする所は同じであり、縫製をする場所の間に、寝室も含めた生活空間があったという感じであった。幼児期の私には、居間での団らんは、まさに夢であった。

1960年代以降、日本の住宅は生産機能をなくしていき、生活機能に純化していく。さらに、職場と住宅が分離するだけでなく、両者の距離が広がっていく。とくに大都市圏ではその傾向が強まり、長時間通勤が広がる。それに対して、職住接近ということが望まれるようになっていく。さらにインターネットの普及のなかで、職場に通勤しないで働

くことが広がり始める。それが新型コロナ禍の中、リモートワークとして広く見られるようになり、生活機能と生産機能とを含んだ住宅が求められ始める。それは、住宅建築の新しいありようを生み始める可能性を秘めている。

戦後の住宅は機能的ではあるが、部屋ごとに機能を別にしつつ面積と費用を抑えるために、部屋面積も総面積も狭いものとなった。狭い部屋の象徴は四畳半だろう。三畳間もよく見かけた。そして狭い部屋に家具をおくために狭さを増幅する。そんな日本の家屋を欧米人のなかで「ウサギ小屋」と呼ぶ人があらわれた。アパート・マンションは、そうした住居が、一つの建物にたくさん並列され、ウサギ小屋の典型となった。

そうしたありようが広く「反省」されはじめるのは1980年代だ。経済的に世界一といわれるようになった日本だが、「豊かさとは何か」と問い直す動きが広がり始めた。規格品住宅に疑問をもち、「ゆとり」と「個性」をもった建築が、庶民の間にも現れ始め、建築士に依頼して自宅建設をする人が増え始める。といっても、ゆっくりとした変化だった。住宅変化のなかで、建築士の数が増加するが、思うほど注文が入らず、建築士の数は過剰気味のようなのだ。

そんな状況のなかでも、人口増状態がおさまらず、20代30代の住宅需要が高い沖縄では、安価な住宅要求に対応するために、規格品型のアパート・マンション、建売住宅の供給がすすむ。そのかなりが、東京あたりの業者である点も注目される。

5. 建築士に依頼する建築

建築工事の前提となる設計監理を担う建築士にかかわることについて書こう。建売住宅購入であれば気づきにくい。建売住宅など既製品規格品に頼らず、建築家に頼んで設計から始めるのは高くつくという、私自身が長くもっていた「常識」は、くつがえさなくてはならない。建築士に依頼すると、設計費がかかるというが、業者に頼んでも設計費は必要だ。総経費に含まれているから、気づかないだけのことだ。要は、どちらにしても建築士次第、そして建築士と施主との関係次第だ。

我が家のことだが、建物完成間際になって、一階の床にカビが生え黒ずんでいることがわかった。地面の湿気によるものだった。建築士は、直ちに施行業者に張替えを指示し、地面と床面との間に空間をつくり、そこに炭を大量に敷いて、換気をよくした。おかげで、その後、何の問題もなく今日に至っている。こうしたことは、設計監理を建築士さんをお願いしていた利点だと思う。無論、追加工事費なしである。

※ 余談だが、以前まで設計士という業務があると思っていたが、正式には建築士だということを、17年前の建築の際に知った。

広い家を建てると、価格が上がるという「常識」もみかけるが、坪当たり単価は下がり、それほど高くならないことも、我が家建築の際に知ったことだ。重要なのは、建築士にどれだけ活躍していただけるかということだと思う。我が家の場合、土地探し選定からご指導願ひ、施行業者選び、施行監理までやっていただいた。さらに、今日にいたるまでのメンテナンスなどもすべてご指導いただいている。

2020年には、外壁塗装をはじめとするたくさんの工事をしていただいた。業者選定・業者監督をはじめ、細部にわたるまでお願いした。

おまけ話だが、専門の建築士にお願いすると、その方の「顔」を通じてクーラー代やシステムキッチン代まで、とてつもなく安くなるのでびっくりした。半額にもならないのだ。こうしたいろいろなことを、自分で業者探しや価格交渉

までしていたら、とんでもなく大変だ。

付3. 家・家族の継承ができない例が増えてきている 2020年11月11日

最近気づいたこと一つ。先日の母の葬儀に際し、集まる親戚が世代替わりしていることに、改めて気づかされた。10数年前の父や姉の葬儀や法事の時と比べて、様変わりなのだ。

父方の親戚、母方の親戚、義兄の親戚の各家から一人以上が参加する。以前は、父や母の兄弟姉妹、私から見れば伯叔父伯叔母の世代の参加が多かったが、今回はゼロだ。その子どもになる人たち、私から見れば従兄弟姉妹の参加が中心だが、その子ども世代の参加もかなりある。すっかり代替わりしたのだ。

加えて気づいたのは、従兄弟姉妹ないしは、その子ども世代には、家族の後継者を確保できていない例が増えていることだ。

私の実家あたりは、戦前家父長システムが強固であったが、それが維持困難どころか、家族の継承さえ難しい例もでてきそう。子どもがいても、遠距離にいるとか、シングルだという例も多い。

そのため、こうした法事も縮小しているようだ。

実家周辺での法事のやり方は、本家を中心とする家父長制に基づくものが多いが、その維持可能性がどんどん縮小しているのだ。田舎にいけば、それはごく普通になり、その積み重ねが、家父長システムどころか家族消滅、さらには集落消滅とつながってくるようだ。都市では、そうしたシステムそのものが消滅している所も多い。比較的に子どもが多い沖縄の私の近辺でも、そうした例を広がり始めている。

こうしたことは、法事だけでなく、墓をみればわかる。実家の親戚にも、墓葬ではなく、海洋葬をする人がでてきた。

戦後、タテマエとして存在していた戦前型家父長制が、戦後75年余り過ぎた今、実質的消滅が始まったが、それをひきついだ核家族も、縮小傾向を強め始めている。そして、個人単位ですすめる傾向が広がっている。また、家を代表して男が出るというシステムも縮小してきている。

そんなことをめぐって、私自身も多くの葛藤に出会ってきたが、自然消滅の進行に驚いている。

住b 私たちの住宅 2021年08月24日～2021年09月23日

1. 試行錯誤のなかで、私たち流が生まれる

私たちは、50年の共同生活で10回も引越したが、若いころはアパート暮らしだった。初めて自宅を購入したのは、1976年の西原小波津団地だった。それは「二戸連」といって、一つの二階建て建物40坪を20坪ずつの二つに割ったものだ。私たちが買った時は、売れ残り状態だったので、頭金なしの一千万円を少し超える程度の価格で、主として借金で購入した。公的な住宅供給だったが、後に欠陥住宅が判明したことは、先に書いた。それでも、3DK規格の「狭いながらもマイホーム」であった。

その後、仕事については、教育や行政的業務を大学でやり、研究を自宅でするようになった私たちには狭すぎるので、研究室機能を増築した。そして、子ども達も学生たちも研究仲間も集まれる部屋も作った。

愛知に転勤した後、1991年に再び建売住宅を購入する。二人の研究室機能を含んで、40坪足らずの建物だった。バブルで価格は高くなったが、小波津団地を売った資金と借金で間に合わせた。

トロントでの一年間の生活はアパートを借りたが、月10万円をこえる部屋で、当時の生活費の60%以上を家賃にあてた。ここでも、研究室機能を重視するとともに、人が集まる場所としての機能も果たした。

私たちの家は、このように、通常的生活機能に加えて、人が集まれることと、研究室機能を併せ持つものにすることが「習慣」ついてきたのだ。

2004年に建てた現在の我が家も、そうした機能を引き継いだ。と同時に、建売ではなくて、初めて建築士に依頼して、自分たちの希望をもとに作る建物にした。最初に、私の希望と恵美子の希望を二人で調整しないまま部屋希望を並列して、建築士さんに渡した。総計すると、予算オーバー間違いなしだから、実現するのは希望部屋の6～7割になると予想していた。

驚いたことに、建築士さんはその希望をすべて実現する図面を作ってくれた。費用上は、単純な間取りにすることで、建築費を低く抑えたのだった。簡単にいうと、柱6本と柱をつなぐ壁をコンクリートで作る。マッチ箱を4つ積み上げた作り方だ。たとえば、一階は、60㎡近くの一つだけの部屋で、35個の本棚を並べ、セミナールームと簡単なキッチンが、一つの空間を形作っている。

おおまかにいうと、通常の家 90㎡ + セミナールームなど50㎡ + 書庫30㎡ + 研究室20㎡×2
という感じだ。

当初の設計プランは、土地傾斜に合わせて階段状に作るものだったが、それだと費用がかかりすぎるので、シンプルな四階建てになったのだ。こうした単純な形だと、建築費が抑えられるだけでなく、将来の改築もたやすい。

写真は、我が家と東隣の森。丘の上はタマグスク



2. 住宅との私たちの付き合い方

前回述べたように、私たち流に住宅と付き合い、作ってきた。移動の多い私たちは、一つの家に留まるのではなく、引っ越しをして総計10ほどの家に住んできた。その際、借家ではなく持ち家にすることが大半だった。日本では、家の売買は、一生に一回というのが通常だが、私たちは、数回の売買を経験してきた。欧米では、かなり普通に見られることだ。売買するからといって、経費がそれほど増えるわけではない。以前の住宅を売ったお金で新しい住宅の取得代金にあてればよいからだ。借家の方が高くつくことも多いと思う。

こうして持ち家生活を繰り返す中で、住宅についての眼も肥えてくると思う。といっても、現在の家は、大変気に入っているの、「終の棲家」になりそうである。

もう一つ余談をすると、1970年代の沖縄には大学教員として本土からかなりの人がやってきた。そのほとんどの人が、勤務先が用意した住宅に住んだ。とくに、公務員住宅に住む人が多かった。そのなかで私たちは例外的に、「普通」のウチナーンチュが生活している地域に住んだ。1974年から住んだ南風原の新川では、集落真ん中で倉庫を改造した貸家に住み、近所の人と色々つながっていく。字代表として卓球大会に出て、島尻郡大会、県民大会にもでた。正月は老人クラブメンバーと囲碁をしてばかりいた。

住んだ地域で、ヤマトンチュは私一人ということが、ごく普通のことだった。公務員宿舎に住むのとは対照的だった。それは、住宅問題だけでなく、交友ならびに生活をめぐる文化の違いをも生み出していた。私たちは、「この地」で生活し、人々とつながり、楽しむというスタイルであった。

現在の我が家の特徴の一つは、ユニバーサルデザインにある。たとえば、段差がない。部屋の入口の戸は、ドアの部屋は別にして、吊り下げ式の引き戸で、床にレールなどはない。フローリングが部屋の内外につながっている。これは、建築士さんの提案で、私たちが歓迎したものだ。

エレベーターが設置できるように設計施行がされたが、予算の都合で、実際の導入は先送りした。

また、恵美子の提案で、広くて傾斜がきつくない階段、高い天井となった。階段は二人が行き違える幅だ。2.5mほどの天井高が多いなか、我が家の1階は3.5m、2～4階は3mだ。部屋を狭くは区切っていないことと相まって、ゆったり感が漂うものにしたのだ。

建築士との具体的な相談を進めるために、恵美子が竣工の1年近く前、沖縄に移って生活を始める。知り合いの奥武島マンションの一室に住む。愛知での残務処理が必要な私は、沖縄と愛知との往復生活となる。

だから、建築の細かい話は、すべて建築士と恵美子任せとなった。

3. 自然と結び合う住宅 動植物 風 光

人生前半期、つまり40歳代半ばまでは、南風原の借家を除けば、都市型あるいは団地型生活だったので、それ以降「自然大好き人間」の私たちは、できる限り自然のなかに住むようにした。

40代から50代にかけて住んだ愛知の家も自然の中だった。名古屋の郊外だが、森田畑がいっぱい場所だった。スタート直後は唯一建っていた隣の家もまだ生活を始めておらず、半径300m以内では我が家だけが暮らしていた。

狸か狐かよくわからなかったが、目撃したこともあった。まむしもいた。道路は未舗装で、草ぼうぼうだった。

その後、30年経つ今では、そのあたりは区画整理がすすみ巨大スーパーが立地するところに大変化しており、自然豊かな良い時期に住めてよかったと思う。

現在の住居も集落のなかにありながら、自然豊かなところだ。自然（森・動植物・海）とのつきあいに溢れている。先住者である植物・鳥・虫たちもここに棲み続けている。最初のころは、窓ガラスの存在に気付かず、ぶつかる動物も多かったが、そのうち慣れてきたようで、事故は激減。イソヒヨドリやメジロなどが、周辺の木々に毎年巣を作って子育てをしている。先住者のイソヒヨドリ（スーサー）夫婦には、ユンタ・ブンタと名付けて、毎日の来訪を歓迎した。今来訪するのは、彼らの子や孫たちだろう。面倒なことは、ハブも生活していることだ。棲み分けをすすめているが、なかなか難しい。天然記念物アーマン（オカヤドカリ）が何匹も定住している。

自生する植物も多い。シャリンバイ、チシャノキ、月桃、ゲッキツ、クワズイモ……

風。

直線距離で300mぐらい離れた海から吹いてくる風は、心地よい。それに限らず、ほぼ常時風が家の中を通り抜けていく。台風の時は大変だが、ここに住んで気象観測データでは風速55mを二度体験したが、大きな災いはなかった。森からたくさんの枝葉を飛ばしてくるので、後片付けに数日以上かかることが面倒なだけだ。森の木々が強風を和らげる役割を果たしてしてくれるようだ。

光。

直射日光はすごい。避けるしかない。植物がさえぎってくれることも多い。だから、3階ベランダは、鉢植え千年木を10鉢も植えて、夕陽をさえぎっている。家の角度の関係で、日の出は見えないが、夕陽・夕焼はよく見える。とても美しい。

光の御蔭で、屋上設置した太陽光発電がフル稼働だ。光がもたらす暑さは、屋上を通して、4階を強烈に暑くする。そこで、太陽光発電に加えて、ドラゴンフルーツ10鉢余りを屋上に置いて、暑さ対策にしている。1～2度は4階の温度を下げているだろう。それでも、4階は暑いので、夏場の寝室を2階に移動している。逆に1階は涼しくて、高くても30度を越すことは少ない。

ということで、部屋を閉め切ってクーラーを動かす時間はそれほど長くなく、電気代が1万円を越すことは、滅多にない。

4. 空気 景観 水・雨

空気。

空気はきれいだ。汚れた空気は、 $\text{pm}2.5$ だけだ。ふだんは澄んでいるので、汚れた空気来的时候は、目視で確認できる。このところは、大陸での生産活動がコロナ禍によって縮小しているためか、激減している。

空気がきれいなので、天体観測によい。とくに星空。残念ながら、西の空は、那覇などの都市の明かりの影響があるが、東の空は天の川が良く見える。ここに住んで初めて気づいた星座はさそり座だ。南斗六星などははじめて知った。夏の大三角は、よく見えすぎる。

長年ともに暮らしてきた気管支炎は、ここに住み始めて、消滅していった。まさに「転地療養」だ。

景観

海に面するこのあたりの住宅は、すべて景観がいいが、一軒ごとに見え方が異なる点で魅力的だ。南に海。北にタマグスクの丘と森。米軍戦闘機やヘリコプターなどの邪魔者がいないわけではない。西方向には、摩文仁の丘。那覇空港を離発着する民間航空機。

私の冗談。このあたりに初めて来る人に対して、「心の綺麗な人には、南の海の向こうには、フィリピンがみえるそうだ。」 7割の人は最初から冗談だと気づくが、3割ぐらいの人は、一生懸命探す。なおも探そうとする人には追い打ちをかける。「フィリピンは無理だけど、台湾は見えるようだ」 なおも探す人がいるが、次の冗談は思いつかない。こんなところに住んで、私の眼が良くなった。

水・雨

大雨の際は、境界壁脇の排水路が急流になる。といっても、雨が終わればすぐになくなる。大雨が続き、累積雨量がかなりになると、年に2～3回庭畑のあちこちから、水が湧いてくる。この近辺はどこでもそうだが、水を通さないクチャ層の上に水を通す石灰岩層があり、その境目を地下水が通り、陸上に顔を出せば、カー、ヒージャーとなる。有名なのは、垣花ヒージャーだ。

庭の一角に池をつくりビオトープにしようとしたが、一週間ぐらい水がたまることがあるが、いずれ涸れて、水道水を補給しつづけないとならないので、やめた。

早魃の時の方が面倒だ。散水をしなくてはならないからだ。でも散水は年間10回ぐらいだろうか。土中に枝葉を大量に敷きこんだので、保水力、排水力が高くなっているからだ。最初の頃は、頻繁に散水が必要だった。



土砂崩れ危険区域に入っているが、土砂崩れにあった経験はない。植物の根がかなり入り込んでいることも、対処になっていると思う。

ちなみに、我が家は海拔20～30mなので、津波が来る可能性はかなり低い。

写真は、中山の隣の玉城の丘の上からの景観

5. 森との境界 土質 基礎工事

森との境界

自然の中で暮らすということで、境界壁はできる限り造らないで「自然に溶け込む」雰囲気になっている。東側隣地からは、排水路のための土地を分けていただいたので、要請に応じて、高さ50cmほどの境界壁100m近くを作った。ハブもそこを越えてくることはなかった。無毒ヘビが一度超えてきたことはあった。

植物が境界を越えて建物まで接近してくるが、それは処理するしかない。一番困ったのは、根が『越境』してきて、下水管のなかに侵入してきたことだ。これには参った。森のなかに住む「代金」かと思う。結局、下水管を地下に埋めるのをあきらめて、地上配管に切り替えた。

このほかに、隣の森との間につくったのは、ハブ除け網だ。すでに何匹もひっかかっているが、おかげで敷地内では見かけなくなった。

動植物

植物の種は自由に入出入りしている。アカギ、オオバギをはじめとする種が飛んで（鳥に運ばれて）きて、至る所に新芽を出す。丹念に取っているが。

蝶は大型だけで、10種ほど飛んでいる。トンボ、バッタ、セミ、トカゲ、アーマン（オカヤドカリ）など多種の者が行き来している。猫のおかげで、ネズミはいなくなった。鳥も多い。鶯などは年中とってよいほど鳴いている。哺乳類のコウモリもいる。

動植物好きの人には、絶好の自然観察園になりそうだ。

土質・基礎工事

敷地の基盤はクチャ（泥岩）だ。その上に、クチャが風化したジャーガルが数cm足らず乗っかっている。そして石灰岩があちこちに散らばる。なかには、大岩もある。それが敷地境界の目印になったりする。現在駐車場になっているところにも大岩があり、それを砕いて除くことから工事は始まった。大岩は、土砂が崩れるのを防ぐ役目も果たしている。



庭畑を作るのに私がしたことの一つは、石灰岩の石を掘り出し、通路作りのための敷石にしたこと。もう一つは、クチャ層を掘って穴を作り、そこに大量の枝葉を入れて、土壌改良したこと。当初は、表土が数cm足らずしかなかったが、現在は20

～30cmになり、植物がよく育つようになっている。クチャはアルカリ性なので、酸性を好む植物の際は、鹿沼土やピートモスを入れ込んだ。

地盤の強さは、クチャ層の安定具合にかかるので、建物工事の前に二度もボーリング調査をした。その結果、パイル打ち込みは不要となったが、基礎工事は、深さ4～5mの巨大穴を掘って、そこに基礎を作り、そこから柱6本を立てて、住宅建設するという具合だった。この深い穴を見た時は驚いた。こんなに深く掘るものなのか、と思った。

そして、難工事だったことを現場監督から聞いた。ユンボを入れること自体が難しく、業者の撤退が続き、三人目のベテランが、工事をやり遂げたようだ。最後は、クレーン車で掘った穴からユンボを回収したということだ。

写真は、屋上から撮影した我が家の庭の西半分。左に3階ベランダが映る。右側の端が、西の隣の森の境界あたり

6. インフラ 近隣との付き合いスタート

生活のためのインフラ整備の話。

電気・プロパンガス・上水道に難問はなかったが、下水道で苦労した。このあたり一帯は、「田舎」なのにもかかわらず、下水道が整備されているが、下水管にどうつながかが課題となった。上水道は、道路まできているので問題ないが、下水は下に流れるので、そのルートを設定しなくてはならなかった。建築士と不動産屋が骨を折ってくれて、隣接する敷地から幅1m長さ40mほどの土地を分けてもらい、配管することができた。深く感謝である。

電話・インターネットも苦労した。普通の回線ではインターネットが繋がらない。そのころは、光回線など便利なものが開通していなかったのので、電話回線のなかの特殊のものを設定する必要があった。これも、いろいろあったが、なんとか接続することができた。

道路は、狭いながらも敷地前まできている。公共交通機関としては那覇と結ぶ路線バスがある。しかし、生活の必要上、自家用車を2台もつことになった。

医者、銀行などをどうするかも重要なことだった。当時は、無医村でATMもなかった。田舎暮らしの弱点なのだろうが、徐々に対応できるようになっていく。

近隣との付き合いスタート

敷地周辺に知り合いは全くいなかった。でも、建設過程および生活開始とともに、付き合いがどんどん増えていく。土地の売主が地元なので、地元の方のなかには建築前から私たちをご存じのかたがおられたようだ。建築承認の関係もあって、隣地の方や区役員の方も知り合いになる。隣地の巨大墓は奥武島の方々のものということもあって、知り合いになっていく。

「家が建たないように見える」急傾斜の雑木林に、一風変わった家が建つものだから、多くの方が関心を持たれ、建築中から声をかけられる。

生活開始後は、いつも散歩するものだから、すぐに親しくなる方が増えていく。地元の付き合いの機会には顔を出し、飲み会も付き合い合う。そんなことで、色々と誘いが来る。

こうして、自然と付き合いだけでなく、沢山の人々と付き合い合う生活が始まる。

住（生活の工夫）

2021年09月29日～11月16日

1. 「台風」対処

住シリーズ第三弾の「生活の工夫」を始める。第二弾で書いた私たちの住宅が出来上がって生活するなかで、住宅を生活のためにいかに工夫し活用してきたか、という話である。

まず、よく話題になる台風対策だ。この17年間に近くの気候観測地点で記録した最高風速は、2回の55mだ。雨も、一時間何十ミリというレベルは何度かある。

建築上重要な役割を果たしたのは、沖縄仕様のアルミサッシだ。窓枠は、本土のものとは比べれば数倍の太さだ。しかも、枠の下から風雨が侵入しないような特別な作り方をしている。おかげで、50mクラスの風が吹きつけても、室内は「我関せず」状態だ。

屋外についていうと、隣の森が風速を弱める役割を果たしている。とくに東風南風に対して強い。森の高さの関係だろう。西風が返し風で吹き付ける際には、森の背が低いので、我が家の樹木の枝や幹が折れやすい。10年ほど前には、幹回り30cmを越すティートリーが根元から折れた。ベランダの千年木は、毎年数本折れる。だが、いずれもすぐに復活してくれる。むしろ幹や枝の更新を助けてくれるといったほうがよいかもしれない。

枝葉が大量に折れ散ることは仕方がない。大きな台風の場合は、我が家の植物よりも、隣の森からのものが増える。加えて、潮風に当たった葉が数日後に大量に落ちる。これらの後片付けに一週間以上かかることが、毎年一回はある。

近隣の畑ではサトウキビの倒伏や野菜被害は大きい。でも、台風の役目は「山掃除、海掃除だ」といって、歓迎する人もいる。確かに、海辺のごみ類は吹き飛んでいく。森の下草や小枝を払い落とす役目を果たす。台風一過森がスケスケになり、見通しが良くなることがある。また、早魃気味の頃やってくる台風の降雨は大歓迎される。ただ排水路の水があふれ、海岸近くの畑に海水が入り込むことが嫌われる。今年、その排水路工事がなされたので、効果が出るのが期待される。

2. 風・雨

海岸から直線距離にして300m余りの我が家は、海からの風が通りぬける家だ。来客が、「いつも風が通っていて涼しいですね」と語る。昼間は、風が通るように窓を開けておくことが多い。階段を通過して、下の階、上の階へと風が流れることも多い。夜も開けておくことが結構多い。ベランダに設置したトイレに通う猫の通路として、戸を20cmほど常時開けておくが、そこから常時風が通っていく。

もっとも、ピアノや図書室がある一階は、閉め切っておくことが多い。夏場は、80～90%の湿度に達するので、ピアノのキーの調子が悪くなる。過湿状態になると、本も傷みやすい。どの階でもそうだが、過湿状態になると、カビが発生しやすい。風通りがよいと、カビも発生しにくいので、窓を開けることも多い。冬場でも、湿度が70%を超えることが多い。

そこで、湿気対策が必要になる。ピアノの傍で、除湿機を運転させていることが多い。この除湿器は、40年余り使用しているが、一度も故障していない。シンプルな器具は長持ちするのだろう。湿気が多い時は、一日に2度も、除湿で出た水を流さなくてはならないほどだ。

クーラーは、各部屋に設置してあるが、数年でトラブルを起こし、10年過ぎると取り換えになることが多い。例外は、一階のクーラーだ。広い部屋なので、業務用クーラーを設置してあるが、一度も故障したことがない。業務用は強いのだそうだ。

窓を開けておくと困るのは、突然の雨が吹き込むことだ。雨はほとんどの場合、風速5メートル以上のなか降るので、閉め忘れた戸から雨を侵入させてしまう失敗が多い。

風雨が大きなものを飛ばして、建物を傷つけることを心配していたが、これまでの所、そんな経験はない。上空を一日の数百回と飛ぶ飛行機からの落下物を見たことはない。

知念半島丘陵部の平坦などところにある親慶原やつきしろは、雲や霧が発生しやすく、住民を悩ませてきた。自動車運転で通りかかる際に、視界不良で時速10～20キロに落とす必要があるときもある。それらの雲や霧も、仲村渠や百名の海拔70mあたりで消える。我が家から500m以上離れたグスクロードが覆われることがあるが、我が家に近くなると消える。

3. 暑さ対策

本州や九州あたりでは、沖縄の暑さはすごいと思っている人が多い。しかし、夏の最高気温は、32、33度だ。それは都市である那覇の気温であり、自然豊かな南城ではそれより2度ほど低くなる。我が家の温度計も、31度以上になることは滅多にない。

海洋性気候のおかげだ。全国の最高気温（予測も実測も）で、沖縄が最低になる日は結構ある。ただ、5月や10月でも温度が高くなる日があり、高温の期間が、5ヶ月以上あるということである。沖縄は暑い期間が長いというべきだろう。

また、沖縄の暑さは、端的に言って「日差しが強さ」だろう。真上の太陽からの直射日光は、相当なものだ。だけど、日陰に入れば、常時ある風がいい気分させてくれる。海水浴も夏の散歩も、朝夕がいい。私自身は、海水浴をしなくなってもう10年以上になるが、泳ぎに行くときは、夕方5時以降だった。

もう一つ、夜になっても冷えないことに特徴がある。7～9月は27度以下になることは少ない。だから、寝冷えということはない。窓を開けて寝ても、大丈夫なのだ。ゴザのようなものを敷いて寝ると気分が良い。

夜温度が冷えない原因の一つは、建物のコンクリートが、夜中になっても冷えないことにある。そこで、昼間の直射日光をできる限り防いで、熱をためないことがポイントになる。四階建ての我が家では、かりに4階が30度Cであれば、3階は29度C、2階は28度C、一階は27度Cと下がっていく。通常は4階で寝ているが、夏になると、下の階へと移っていく。

だから4階の上、つまり屋上での暑さ対策がポイントになる。対策は2つ。一つは、ドラゴンフルーツの鉢を置く。大型の鉢10個なので、結構暑さ対策に役立つ。もう一つは、太陽光発電用パネルだ。この二つで、屋上面積の7割ぐ

らいを覆っている。多分、温度を2～3度下げていると思う。

屋上の残された部分は、空や星を見たり、瞑想するのに使っている。猫も時々、夜ここで涼むことがある。10年前、放送大学が教材つくりのために私へのインタビューをしたが、景観を背景に屋上で撮影したことがある。なにせ、360度の見晴らしで、太平洋、海岸、イノー、奥武島、知念半島の丘陵、摩文仁の丘、那覇空港を離発着する航空機などをゆっくりと味わえる場所だ。

4. 日差し対策

直射日光が夕陽になって室内にまで差し込むことがある。冬至前後4か月ほどだ。冬至前後は、太陽の位置の関係でそうなる。カーテンのような布地めいたものを使ってさえぎることもしたが、屋外では台風にやられてしまう。

そこで持続的作戦として、植物の活用を図る。3階ベランダに千年木の鉢を並べた。試行錯誤を重ねて17年経った現在20本近くの千年木が、夕陽をほぼ完ぺきにふさいでいる。台風の時に、3～4本折れるが、幹の更新ということで対応している。以前は、鉢ごと倒れて困ったが、背が高くなると、しなるだけになる。風が強ければ折れるだけだ。

もう一つは、ブーゲンビリアだ。地上からロープを伝って3階まで伸び、10m近い高さになった。数年前から「疲れた」のか、幹が何本も折れ、現在は、高さ4mほどになっている。それでも、美しい花を大量に、しかも年に3～4度咲かせる。花期も長い。それで、近所の人からは目印として使われたこともある。



他に、つた植物を活用し、1、2階の南面を覆うようにしている。シッサス、テイカカズラ、スイカズラ、ニンニクカズラである。

また、ベランダがコンクリートによる照り返しで暑くなることもある。そこで、一階ベランダはウッドデッキにし、3階は千年木の他に家庭菜園花園にしている。

ウッドデッキは、雨に強いセラカンバツを使ったが、しばらくして腐食し始めたので、現在は樹脂製に取り換えている。

ベランダは、空・海・星月・夕陽、そして庭の植物を眺めるのに絶好だ。サガリバナは夜しか開花しないので、観賞場としてベストだ。たまには、ティータイム・朝食会場にもなる。初来客には、3階ベランダから海を見ていただくことにしている。

窓ガラスを大きくとっているので、室内のカーテンやブラインドも重要だ。

5. 玄関まわりの設定

我が家の玄関へのアプローチは、かなりユニークだ。まず道路がある。この道路は、我が家の前までで行き止まりになっている。その道路に面してアスファルト舗装の駐車場がある。駐車場から玄関までは橋がかかっている。傾斜地に家が建っているので、建物の3階にある玄関と駐車場は同じ高さで、10mほど距離がある。駐車場から外階段を下っていくと2階になり、さらに下ると1階だ。

この高低差に対応するために、橋が設置してある。それが「おしゃれ感」を生み出しているかもしれない。橋の下は中庭になっている。中庭から伸びた樹木（オオバナアリアケカズラ＝アラマンダ、フウリンブツソウゲ、ミルクブッシュ、キバナタイワンレンギョウ＝デュランタ、クロトンなど）が、3～5mの高さに伸びて、橋の手すりに寄り添っている。

以前、農業用パイプでトンネルをつくってアラマンダをはわせて、橋の上をおおったことがあるが、台風で吹き飛ばされて以降、やめた。

その玄関の外側には、表札・郵便箱などがある。表札は近所の方にデザインしてもらって設置した。駐車場に近い所にある一對のシーサーは、近くの玉城焼で作ってもらった。

玄関脇には、鉢で育てる植物がいくつかおいてある。以前、メダカを育てていた甕があったが、台風で割れてしまった。そして、引っ越しの際に隣地の方からいただいたガジマルの盆栽があった。生命力が強いガジマルは、鉢から根をはみ出させて、3m下の中庭にまで根をおろした。興があることだが、いずれ事件を起こしそうなので、処分した。実際、手すりの隙間に入り込んだ根が、金属手すりを壊しかかった。鉢の処分も簡単ではない。根っこが、土を強力に固めてしまっていたからだ。半分処理した後、ひっくり返して数か月間雨ざらしにしてやっと、処理できた。

橋の中や外階段横には、電気・電話線・水道・太陽光発電ケーブルなどが通り、中庭に接するところにはプロパンガス・石油ボイラーなど、いろいろと配置されている。

二階の部屋に接する中庭、つまり橋の下は土がまったくよくないうえに、傾斜がきついので、うまく根付かない植物が続出した。大量の枝葉を投入して堆肥化し、さらに砂や木材チップを大量に入れるなどして、10年たつころにやっと庭になるような態勢ができた。いまではちょっとした観葉植物園になりかかっているが、客人にも楽しんでもらうには、もう5年ぐらいかかるだろう。

6. 建物周りの埋め戻し沈下の苦難

事前に予想できず、対処に苦労したのが、埋め戻しの土が沈下したことによって生じた問題である。建物工事のために掘った基礎工事の深さまで含めると、7～8mは埋め戻したのではないだろうか。埋め戻しに使った土は有機物のない土砂でどうしようもない類だ。その土砂が徐々に圧縮されていき、年々沈下していく。20～40cmは沈下しただろう。

問題の最大は、建物の内と外とを結ぶ配管の断裂だ。まずは地中に埋めてある排水管の断裂だ。地上にあるものも断裂した。建物は沈下しないのに、管を支える外側の土が沈下するために高低差ができて断裂するのだ。その時々で応急対応ないしは放置した。最終的に補修できたのは、2020年暮れの大工事だ。

ガス管の歪みがひどくなった時には、応急対応をお願いした。

工事にあたって管を地中に埋めると、再び何が起こるかかわからないので、ほとんどの補修は管を地上化させ、問題が生じても見えるものにした。

埋め戻した土は栄養分がないので、植物もほとんど生育しない。コンクリートで固めるのが手っ取り早いだろう。でも、早めに修復した個所に再び段差ができて壊れていく。時間を待って、沈下が治まるのを待つしかないようだ。2階外側の床面の下は、大きな空間ができていく。そんな所にはハブが棲みつきやすいので、埋めたり、壁を作ったりした。しかし、すぐに空間が広がるし、壁は壊れる。一度、空間を埋める工事をしてもらったが、結果は芳しくない。

建物の東西のスロープは、当初私自身で、庭畑から出てきた大石・ブロック・レンガなどで、階段状にしたが、結果的にうまくいかず、客人の通行をお願いするわけにはいかなかった。時には、私自身も通行に難渋を極めることがあった。16年余りの試行錯誤を経て、東側は本格的な工事で階段を作ってもらった。西側は、エレベーター工事の際に余った生コンを流してもらって、通行できるようにしてもらった。

7. インターネット環境

移住前の関心事の一つは、インターネット回線がつながるかどうかだった。いまではもう死語に近くなっているが、SOHOという言葉がある。大都市から離れても通信回線で、自宅の小さなオフィスでも仕事をするができるというものだった。コロナ禍でリモート業務がごく普通になったが、当時は例外の話だった。だが、1年間の私のトロント生活はそれに近かったので、インターネット接続は死活問題になっていた。

2000年代前半に、すでに仕事その様相を見せていた私には重要な話だったのだ。いろいろ調べて、電話回線でADSL、ISDNを使えば何とかできるということで、調べてみた。なんとかなりそうだったということだったが、ここに住み始めて、現場で工事関係者とのやりとりがあって、なんとか使えるようになった。しかし、ブロード回線はまだだった。近所の人と声をかけあって、役所申請もした。

いろいろと手間取ったが、2010年代後半に入って、本格的な光回線になり、安定した仕事ができるようになった。なお、WI-FIは、私たちの無知により、導入は2020年になる。

インターネットを使えるのが一か所だけでは困るので、建物設計の際、すべての階をつなげる回路を事前設置していただいた。このおかげで、電話・インターネット2端子・WI-FIを使える環境ができた。

これらは、建物工事関係者にもお世話していただいたが、こうしたことに詳しい知人や親戚にたくさんお世話していただいた。

それにしても、技術進歩と普及は急速なので、17年のここでの生活のなかで、インターネット回線は4回ほど変化した。その際に、アドレスも変わることがあり、以前の友人知人のアドレスを行方不明にしてしまったことは残念だ。

この地域では、丘にさえぎられて、テレビ受信が困難になることが多いが、その対策として、丘の上に塔をたてて、共同受信している。しかし、幸いなことに我が家の位置がギリギリ都合がよく、テレビ塔から直接受信できている。

8. 装飾品配置

長年、家族と一緒に住んでいると、飾り物が増えてくる。私が30年近く集めている「ふくろう」のコレクションもそうだ。加えて、ここに住み始めて、恵美子がブイアート・点描などの作品をつくりはじめたが、大変な数になっている。私の母親が書いてきた書道作品もある。さらに近隣の美術工芸作家の作品をいくつか取得した。

※ブイアートというのは、海岸に流れ着いた丸いブイ（浮き）に絵を描いたものだ。

多くなり過ぎるのを防ぐために、土産として飾り物を買ってくるのをやめてから、もう長くなる。だから、恵美子が作成したものを除くと、10年以上前に取得したものがほとんどだ。

飾る場が確保できないために見られない場所に所蔵しているお宅が多そうだ。我が家は階段横や踊り場などに場所を確保した。階段や部屋の壁も飾れる。階段を広めにし、階段横に棚を作っている。だから、階段は展示場だ。これらは、恵美子と建築士とが相談してつくったもので、なかなかいいと思う。

近くの「クラフ陶スタジオケイズ」さんは酒壺を制作しているが、素人の私にはまったくわからない傷があるものを壊すという。そこで、私が10個ほどいただいて、玄関の橋の隅に並べた。結構な飾り物になる。欲しいという方には差し上げた。10年ほど飾った後、模様替えて、現在は庭のあちこちに置いている。灯籠やタヌキなどを置くのと同じ感覚だ。私が飲み干した酒壺もそうしている。かつて大酒飲みだった証拠品のようなものだ。

家の外の装飾の中心は、庭の植物だ。動物もいる。さらに、海・丘・雲・空・太陽月星、そして光・風・雨。これが自然とともに暮らす私たちの暮らし方・住生活だ

生き方が変わる A

2022年2月23日～4月15日

1. 身近な変化 ケアの仕事 スローライフ (ロハス)

地域や社会が変わりつつある中で、一人ひとりの生き方や人生も変わりつつある。その姿をスケッチしながら、考えていこう。

まず身近にいる人々の姿を見る事から始めよう。

17年前に、私たちがここに住み始めた頃、保育園幼稚園小学校に通っていた子どもたちは成人になり、職業に就き始めている。私たちが住む中山集落で農業と建築業に就く人が最大であったのは、40～50年以上前のことだ。それが様変わりしている。

若者たちのなかで今もっとも多いのは医療福祉関係の仕事だ。看護師、理学療法士などの資格をとって病院などに勤務するのだ。ほかに、福祉関係、観光関係、教育関係もいる。共通するのは、人をケアすることである。そのなかにあつて農業の道を歩む若者がいるのは、広い畑地を前にする中山らしい。

若者たちの多くは、地元で生活する。県外にいる人でも、何人かはいずれUターンすることを考えているようだ。

もう一つ。かつて300人以上の人口があった中山の人口が徐々に減少し、200人を割り込むほどであったが、なぜこのところ、人口増の気配が見られるようになった。地元でUターンする若者が目立ち始めたこともあるし、建売住宅を購入し、あるいは住宅新築で移住してくる人もいる。Uターンする人は、当然中山につながりがある人だが、新しく住宅を取得した人は、中山につながりを持たない人がほとんどだ。「すぐ近くが海で、海が見えるところがいい」ということで、散策を楽しむ人。近くに畑を借りて何かの栽培を始める人。カフェを始める人。

中山だけでなく、隣字に移住してきた人を含めて、スローライフ (ロハス) を求める人が多いのも最近の特徴だろう。

琉球放送テレビの「気ままにロハススタイル」はもう20年近く続き、長寿番組になりつつある。私たちが十数年前に登場したが、最近近隣のかた、そして長い付き合いの知人が登場した。ゆったりと手作りしたものを自ら食べるだけでなく、多くの人に提供するなど、手作り生活をしている。

ところで、15年位前、南城市スタートのころ、琉球新報移動編集局という、新聞の二面分をでかでかと使った南城市の今後にかかわる特集記事があり、そのためのシンポジウムでシンポジストの私は「手作り南城」をキャッチフレーズにして発言した。その後も南城おこしにかかわる会合ではその趣旨の発言を繰り返してきた。

ロハス番組も「手作り」の心に満ちている。農業、福祉、食品、観光、医療、子育てなど多様な分野の人々が、この番組に登場して自らの取組みを紹介している。それは、大量生産大量消費に彩られた1960年ごろ～2000年ごろまでのありようとは対照的だ。

本連載では、これらの変化についていろいろと書いていきたい。

2. 「成長」と「定常化」 社会の変化

連載初回の前回最後に書いた「大量生産大量消費に彩られた1960年ごろ～2000年ごろまでのありよう」は、

言い方を替えると、経済成長追求が第一とされた時代のことだ。だが、2000年を過ぎるころからは、経済成長が名目では持続していたとしても、実質的には成長が止まっている。人々の実体験としても、所得が伸びていないどころか減ったと語る人が多い。

沖縄では、観光業の隆盛などの中で、平均県民所得が200万円以下から200万円以上へと変わったが、新型コロナ禍で統計上どんな数値がでてくるかはまだはっきりしない。この間多少上がったとしても、歴史的に蓄積してきた全国的な地域格差が少し縮まった程度であろう。また、県内格差は広がっているようだ。

全国的にも格差の広がり、統計数値としても示されているようだ。1980年前後に広く言われた「一億総中流」はぐんぐん縮小し、「中流解体」が進行している。

そんななかで、一泊5～10万円という高級ホテルの増加が目立ち、そんなホテルに泊まる富裕層が増大している。そんな人々が落とすお金を頼りにするような観光業になってしまうのは、一か月10万円足らずで暮らす人がかなりいる近辺の人々にとって皮肉なことだと思う。

さて、ここ20～30年間、経済成長は止まって、維持ないしは低下傾向さえ見せることをどう考えるか。再び成長に向かってがんばろうとするのか。

資源が枯渇していき、人々の消費の増大も止まってきており、さらに経済成長を支えた人口も減少へと転化しつつあるのだから、経済の低下ないし「定常化」は自然の流れであり、むしろそのことを前提として受け止める暮らし方を考える方がよいと考えるのか。「定常」という言葉は、経済学では200年ほど前から使われた言葉のようだが、右上がりでもなく右下がりでもない安定した状態を示すもので、近年再びしばしば使われるようになった。

長い間続いた経済成長は、「成長が当たり前」という感覚をもたらした。「成長しないで、定常が当たり前」という感覚は抑え込まれてしまった。人類史を見ると、「定常」と「成長」がくりかえされているようだが、「定常」の期間が「成長」の期間よりはるかに長い。久しぶりに「定常」の時代が戻ってきているということだろう。

この「定常」の時期に、「中流」が解体して、少数の富裕層と多数の「下流」に分解する流れが作り出されつつある。そんななか、まずは政治行政に格差縮小貧困解消へと進めるような動きを求める事。そして、人々自身の動きとしては、「成長」の「おこぼれ」（トリクルダウンという言葉が使われた）を待つ生活ではなく、「生活」のありようを、大量生産大量消費ではない形で創造的に工夫し、生活の質を高める営みが求められる。

3. 量と便利さ 道と人間関係

「成長が当たり前」という感覚は、1960～70年代の高度成長期よりはるか以前の、産業革命をめぐり工業社会に入った19世紀後半から蓄積されてきた。日本でいうと、この150年間の「成長」のイメージは、物量の増大と便利さの増大というものであった。象徴的なものとして自動車があり、道路舗装がある。人が住む所はどこまでも自動車で「自由に」行けるというイメージだ。そして、道路沿いにコンビニがあるというイメージだ。

我が家周辺でいうと、現在でもコンビニの新規開店が続いている。同じ系列の店が近くにあるにもかかわらず、次々と開店する。ところが、自動車通行量が少ない所にはほとんどない。コンビニという言葉は、英語の「便利」さから由来しているが、自動車を持つ人には便利だ。しかしスーパーやコンビニでの買い物は、自動車を持たない人には、近隣の小さな商店がなくなったために不便極まりない。後期高齢者に入った私の現実的な悩みは、いつまで自動車を使えるかだ。我が家あたりは総務省が示した「買い物難民」地域に入っている。足腰が悪い高齢者が、買い物カートを引っ張

って、歩道を30分以上かけて買い物に出かけていた姿が、私自身の姿になるのも時間の問題になってきた。

道路が舗装され自動車が走りまわるところでは、かつての「道」の機能が大きく変わった。かつての「道」は、人と人とが直接出会い交流しあい、人々のつながりを増し深める役割をもっていた。子どもたちもそうであり、遊び場でもあった。「道」がその機能を失い、「舗装道路」に変わることによって、そこを通しての人々の直接の交流の機会がなくなってきた。自動車ですぐに出かけ、自動車を降りた後で交流する形に変わった。ITの隆盛は、それをさらに加速させ、コロナ禍が輪をかけた。

その結果、人々は「家」にこもることが増えてきた。こうして、便利さが人々のつながりを薄め弱めてきた。同様に、かつての商店売店が、客と店の人、客同士をつなぐ重要な役割をもっていたのと対照的に、スーパー、コンビニ、宅配型購入は、商品と金銭の交換関係のみで人間関係を薄め弱めてきた。近年では、レジ係という人さえ不要にする形が増え始めた。

量とは対照的なものとして質がある。便利さと対照的なものとして「やりがい」「楽しみ」があると考えるのはどうだろうか。物量があふれていても、それを「やりがい」「楽しさ」をもって活用できるかどうかは問題なのだ。よく言われる言葉として、「生活の質」があり、「生きがい」がある。

4. 住宅 高等教育費

少し話を戻すが、豊かになったはずの物量面で問題なのは、住宅の狭さと教育費、特に高等教育費であり、個人にとって難題になっている。それらは、格差があらわれやすいものであるとともに、質ややりがいと深くかかわる。

住宅について言うと、高度経済成長まっただなかの1960年代と1970年代のころ、よく言われた言葉として「マイホーム」がある。しかし、それは欧米人からみると「ウサギ小屋」といわれるような狭い住宅であった。戦後日本の住宅政策は、住み心地がよく安価な公営住宅の供給を抑え込んで、持ち家獲得に重点が置かれた。そのなかで、土地代が高騰し、住宅を個人で所有すると、長期に借金を抱え込むことになった。

「マイホーム」は、多くの家具・家電製品、そして機能を詰めこみ、狭さを加重していく。「持ち家」にこだわると、職住分離を加速し、郊外からの遠距離通勤を大量に生み出す。その解消のために、都心の「持ち家」としてのマンション購入が進むが、狭さは解消されない。そして、「持ち家」待機者は、賃貸マンション・アパート暮らしをする。

これらは都市型風景であるが、対照的に農村では、過疎化が進行し空き家が増えてきた。人口減少の中、こうした傾向がさらに続きそうだ。

こうした変化の中で、住における質の追求の困難さは変わらない。一つの策として、充実した住をあらかじめ、自動車に願望を代替させることが一時期広がった。自動車のピカピカさと対照的にみずぼらしい家という組み合わせが作られ、休日ともなれば家族で自動車での遠出ということになる。そうしたなかで、農村地域へと移住し「田舎暮らし」をはじめめることが21世紀に入る前後から増加していく。

近年、一世帯当たり人数が減少してくる中、狭さが想定外に解消される例が出てきている。それが、住宅文化の充実、住生活の質向上につながればよいのだが。空白感空虚感に陥らなければよい、と希望するが。

いずれにせよ、住宅を、そこで生活する人たちの文化を表現し、生活の質を楽しむ場として豊かにする営みがどれほど広がっているのだろうか。

高等教育についていうと、自宅を離れて大都市の大学に通うとなれば、授業料生活費などを含めて仕送りが4年間で1000万円を越すことがごく普通になってきた。沖縄の大学進学率が低い主因は、保護者の年収では大学進学費用捻出が困難な例が多いことにある。若者が自分自身の収入で大学に通う例は全国的に希少になっているなかで、沖縄では珍しくない。愛知の自動車工場で季節工として長期に働いて得た資金で、大学で学ぶことは沖縄では珍しくないのだ。

北欧などのように、授業料は無料で、逆に一定額が支給される例まであることは、日本では信じられないことになっている。

格差貧困問題に関心がとりわけ高い沖縄で専門学校を選ぶ若者が多いのは、これらの事情と結びついているようだ。

5. ハードからソフトへ

国や自治体の施策が、道路・下水道などのインフラ、そして諸施設などのハード面に重点を置くありようから、人々の諸活動を支えるソフト面へと重点移動が進んでいる。ハード面にしても、大量生産大量消費型と結びついた画一的な規格品ではなく、個性的で文化の香りを感じるファッションブルなものが、ようやく広がりつつある。その一方で、時代錯誤に近い巨大工事が今なお続けられ、多くの問題を出している。

ソフト面への比重移動についていうと、たとえば沖縄での一括交付金をソフト面で活用している例が目立つ。そして、IT化が一層進行していることが特徴的だ。だが、それは人間どうしの直接交流を省いて、器具やデータを通してのつながりへと変えてきている。身近な人間関係でさえ、人間どうしの生（なま）の関係ではなく、器具を通してのものになっている。スマホが象徴的存在である。そのために、直接につながっていなくても、大量のつながりをもっているという錯覚が増えていそうだ。

生（なま）の関係の減少の中で孤立型生き方に陥る人が増えている。多様な人々が大量に集住している都市は、人間関係を豊かに作り出すよりも、モノと情報を「豊に」しているが、人間の生き方を豊かにすることにプラスになっているかどうか疑わしい事態が広がっている。

こうしたなかで、連載第一回で述べたが、福祉医療関係など直接的な人間関係にかかわる職業を目指す若者が増えている。それは、産業構造として、規格品（モノ）の大量生産を行う第二次産業よりも、直接の人間関係にかかわる第三次産業の比率が増大していることとかわりがある。

この連載は、最初から脱線気味なのだが、次回から地域・社会の変化から見た人生変化について、改めて述べていくことにしよう。

6. 人口増減と人間関係

地域・社会の変化から見た生き方の変化について述べていくが、まず基礎的なこととして、人口変化をみておこう。

話題になることが多い少子化についてだが、沖縄県での子ども数の減少は、他府県と比べれば緩やかだ。それでも、兄弟姉妹数の減少は著しく、かつてはよく見られた兄弟姉妹集団といえるほどの4、5人以上の例は珍しくなっている。

それは、いとこ数の減少にもつながる。それは、家から「あふれて」地域で群れ遊ぶ子ども集団の減少ないしは消滅にもつながっている。

その結果、子どもたちが他の子どもたちと出会う場として、保育園幼稚園小学校の同級生集団が大きな役割を果たす。そうしたところで、特別に工夫して設定された異年齢集団が重要な意味をなすこともある。そして、学童クラブが、子ども集団形成にとって果たす役割が大きくなっている。ときには、地域スポーツクラブやお稽古事で作られる子どもたちの出会いが一定の役割を果たすことがある。また、部活の意味も大きい。

それらが、よく見られる大人の直接的な介入によって成り立っていることを減らして、子どもたち自身が人間関係を作り運営していくものしていくことが肝要である。

10歳代になると、そうした出会いのなかで子どもたちが自主的につくる友達関係、サークル的關係が決定的に重要な位置を占めるようになる。

少子化は、子どもの相互関係を減らし、子ども集団の形成を弱める動きを加速させやすい。子どもの成長にとって、子ども相互の關係、子ども集団は大きな役割を果たすことを考えると、重大な問題となる。それらに代わって大人が過剰に介入する傾向が増しているが、そのことが、過保護過干渉などの問題を引き起こす点に留意が求められる。

成人段階になると、これらの關係に加えて、ないしはそれらを白紙にして、新たに所属する職場などで作られる關係が、かれらが形成する人間關係の中で重要な位置を占め始める。かつて強く存在していた地域における人間關係は、都市地区では、いまや希少な存在となってきた。職場を離れる時期になって、地域關係で付き合うことが出始めるが、それに馴染むのに苦労する人は多い。女性会（婦人会）、老人会も、存在の影が薄くなっている地域がかなり見られる。

それでも、他府県と比べれば、沖縄にはそうした關係がまだ残存している方だといえるかもしれない。

大人になって重要なことのひとつは、カップル關係を作り、多くの場合、家族をつくりだすことである。それについては改めて書くことになろう。

1960年代以降、雇用されて働く人が多数になるが、定年などによって職場を離れた後の人間關係をどう作るかが重要なこととなるが、それについては並行して連載している「老」シリーズを参照されたい。

7. 移動と人間關係

人々が、出生から死ぬまで同じ土地に住むのが当たり前という時代は、もう100～200年以上昔のことだ。そんな時代から変わって、一生の間に、あちこちに住むのが当たり前の時代へと移ってきた。そのことが居住市町村からの転出、逆の転入という形で示される時代になったのだが、市町村の目線でいうと、転入転出数という形で表れる。この転出転入数の差が、社会増社会減を生む。もう一つ出生数と死亡数との差が自然減自然増を生む。

全国的に見ると、自然減の趨勢にあるが、首都圏などでは社会増によって自然減の影響をみえなくしてしまう。対照的にそれ以外の所では、自然減と社会減がおりかさなりがちだ。沖縄の農村地域でいうと、長い間、社会減が進んできた。それでも、1960年代に入る頃まで、自然増の時代だったため、人口減の問題は表面化しにくかった。そして、自然増は人口過剰を生み、移民出稼ぎという形で表れる社会減を促進する理由の一つだった。それでも、自然増が社会減を上回る市町村が多かった。しかし、1970年代に入る頃から、自然増の増加幅が小さくなり、市町村によっては、近年自然減も見られるようになってきた。その中で社会減と自然減とを合わせた人口減が進みはじめ、過疎が進行する市町村が増えている。

移動は、人々の生き方を大きく変える。それまでの生き方を白紙に戻すことさえある。そこに希望期待を生み出すとともに、不安悲劇を生み出すこともある。

1960～70年代における移動は、産業構造・職業形態の変化に伴うもので、時代の趨勢とも見られてきた。人々はそれに合わせて、自分の生き方を変えていった。典型的には、農村で自営業としての農業に従事することから、都市ないしは都市近郊で、第二第三次産業で被雇用者（つまり勤め人）となることへの移動である。

それは、それまでの近隣の誰とでもつくった濃密な人間関係から脱け出て、職場を中心にした人間関係に移動する事であった。無論、選んで任意の人間関係をつくることもできたが、量的には少ないものであった。親族関係も激減するとともに、年に1～2回「帰省」して、前住所の農村での人間関係を維持することも多かった。結果として、農村では付き合う人を選択することは少なかったが、都市でも職場以外では、選択して付き合う人は限られた少数になることが普通になる。とくに異年齢との付き合いは激減した。

職場が「家族」のようにみなされ、職場での人間関係がウチの関係とされた。それは、農村的な人間関係を職場に持ち込むとも言われた。職場外の居住地では、多様な人々との付き合いが新たにできるはずであったが、そうなることは少なかった。居住地も、似た特性をもつ人々が固まって住むことが増えた。ニュータウンなどでは、年収・勤務業種・年齢が類似の人との付き合いに絞られていった。そのため、スタート直後は、30歳代世帯だったニュータウンが、30年後には、高齢者に仲間入りする人ばかりになる例が増える。彼らの子どもたちが、同じところに住む確率はそんなに高くなければ、異世代が地域を構成することも少なくなる。

8. 人々の移動と生き方の転換

農村地域から都市地域への移動は、農村地域でのつながりを弱めていく。農村での「家」は、「先祖代々」継承されてきたと思込んでいる人が多いが、その「家」が継承されないままにいる例が増えてきた。空き家対策が必要になるなど、住宅・墓・共有地などをどうするかという問題の大量発生がそれを示している。

移動の時期が、20歳前後の進学就職を契機とする例が多いのも、特質をなす。青年期の移動が多数で、中年期の移動は一時的なもの、ないしは単身赴任のような部分的なものとなる。それ以外では、というと、数少ないけれど、60歳前後の定年退職を契機とする人がみられる。

豊かな生活を求めて進学就職などを契機に、若者が農村から都市へと大量に移動したわけだが、成人期での移動には、不本意ないしは不利益をとまなう移動が多い。たとえば、季節労働者・出稼ぎとして一定期間の移動で、数か月してまた旧住所に戻る例。会社から転勤を言い渡され、単身赴任する例。家族まるごとの移動ではない部分的な移動である。リストラにあって、新たな職場に就くことにとまなう移動もある。

ところで、1990年代以降、企業社会の変容が進むなか、自己判断によるUターン、Iターンが増加していることが注目される。それらには成人期における移動が多いことが特徴をなし、かつ企業社会的な生き方と距離を取る生き方が多い。「田舎暮らし」と言われるものが典型的だ。2000年代の沖縄移住ブームもその一つだろう。さらにコロナ禍が引き起こしたリモートでの仕事をきっかけとする人も多い。

そのなかには、都市生活に嫌気がさしてきた人が多い。なかには、20代後半の若者もいる。IT関連作業のブラック職場とさえいわれるところで心身ともに疲れ果て、「ふるさと」に戻る例がかなり目立つ。また、30～40代で、スロ

ーライフ的生き方を模索する人も多い。50代で早期退職して、そうした生活を求める人も多い。なかには個人経営の形で起業する人、リモート職をする人もいる。

そうした人の移動を歓迎し、住宅や土地を提供したり、奨励金を支給したりなどして、その動きを促進する農村地域の自治体も多くなっている。

こうした変化のなかで、沖縄では沖縄から他府県への転出超から、他府県から沖縄への転入超へ移ってきており、自然減をかなり上回る社会増をみられるようになった。そうした人々を引き付ける沖縄の魅力には、海や暖かい気候など自然の魅力があることは言うまでもないが、「人の温かさ」といわれるような人間関係の魅力も、人々を引き付ける要因になっているようだ。それは、スローライフ（ロハス）な生き方の広がり結びついている。

9. 長寿化傾向

20世紀から引き続く21世紀における長寿化の進行は、人々の生き方を大きく変えてくる。それは、まず老年期間の拡大をもたらした。かりに65歳からを老年期だとすれば、20世紀半ばのころは、平均してみると数年間もあればいいほうだったが、2020年には20年近くになり、100年時代とさえいわれる21世紀後半には、35年まで拡大するかもしれない。こうなると、65歳～100歳までを一括して老年期とするのをやめて、二つに区分する見方が出てくるのは当然だ。だが、75歳で区切り前期後期にわけるのは、余りに行政的過ぎる。もっと異なる二分を模索したいものだ。

老年期間の拡大は、老年期への移行時期を繰り延べて、老年期の拡大を抑え込む動きをもたらしていく。それは定年退職年齢や年金支給開始年齢の繰り延べという形で表れてくる。定年年齢でいうと、1970年ごろまで55歳であったものが、60歳、65歳と延長され、現在では70歳を検討するところも出始めている。

そして、老年期をどう過ごすかが、老年期にある人だけでなく、それ以前の中年期の人にとっても、強い関心と呼ぶものとなっている。その際、実際の寿命より10年ほど短い健康寿命に関心を向ける人が多い。寝たきりや認知症への不安が大きいからだろう。

もう一つ老年期生活を支える金銭の支出と収入に関心を寄せる人は多い。高齢期生活を支えるに足る年金を得る人が多くない現実があり、生活保護などのセイフティネットが、命綱になる人が現実が多い。そこで、「下流老人」への不安が高まっている。老年期に金銭収入を求めて就労するものの比率が、先進諸国のなかでトップレベルに多い日本という現実がある。金銭不安も少なく、社会的活動、孫の世話、趣味などに生きがいを求める人も多いが、そのことが上手くできない人もいる。そんな人には、人間関係形成がうまくない人が多く、孤立不安さえ持つ人も多い。

こうした不安をもち、ぎこちなく老年期を生きる人には男性が多い。職業や課題達成に没頭し、人間関係づくりや自己実現に未熟なまま老年期に入る人が多いからだろう。対照的に人間関係づくりやそれと結びついた仕事や趣味展開が上手い女性が、生き方づくりの表舞台に以前にも増して登場してきている。こうした違いが平均寿命の男女差とかかわりがあるのだろうか。確かなことはわからない。

近年の老年期の一つの特徴として自然との結びつきへの願望の増大がみられるが、それはスローライフ（ロハス）動向の高まりに反映している。職業や課題追求に追われた生き方ではなく、自然や人間との関係づくりを軸にすえて、いろいろな形で人生を楽しみつつすすめる老年期にしていこうとするものだ。

10. 「成長」、「弱まる」「老いる」とは異なる見方の登場

20世紀後半は、経済成長が長く続いた。そのため、先に述べたが、「経済成長は当たり前のことだ」という受け止め方が広がった。対照的に、経済が下降ないしは停滞（定常化という用語の方が妥当だが、知られていない）することは異常だととらえられた。結果として、経済成長依存症のような社会構造、そして人々の意識になる。人々の身近なことという、「日々の生活はますます便利にならなくてはならない」という意識が、スーパー、コンビニ、自家用車などという物質的豊かさへの願望と並行した。また、「給料は上がるものだ」という感覚が、毎年定期昇給プラスアルファがあるものだという意識を生み出した。

そのために、ここ20年余りの経済成長がわずかな比率にとどまり、年によっては下降さえする事態、給与が停滞ないしは下降する事態を受け止め切れない人が、とても多い。

経済面で語られる「成長が当たり前」という感覚は、ひいては人間は出生から成長し続けるのが当たり前という感覚につながる。なぜだか「経済」と「人間」という異なる二つの場面で、「成長」という同じ言葉が使われるのが、20世紀後半から21世紀前半に現在において、氾濫している。だが、21世紀に入って、経済面では「成長」を「当たり前」と捉えることに黄信号、さらには赤信号がとまり、別のありようが模索されている。それだけに「成長」にしがみつく人も多い。

同様なことは、人生面でも生じ始める気配だ。その一つとして、人生後半期に入ると、前半期のような「成長」とは縁遠くなる。そして、後半期に生じてくる「弱まる」「老いる」のはまずいことで「打ち克つべき」だという感覚さえ広く見られる。アンチエイジングという言葉の氾濫がその象徴だ。

こうしたなかで、「弱まる」「老いる」とは異なる見方が登場する。まず「弱まる」「老いる」を拒否し、「生涯現役」で頑張ろうとするものがある。これは、人生最後まで、右肩上がりの発想を貫こうとするものだ。そして、「夢を実現するために貫き通す」「初志貫徹」などと言って、人生を一貫した一つのものとして頑張ろうとするものだ。

それらとは異なって、「弱まる」「老いる」ことを受け入れつつも、生きがいに満ちた幸福な「老」を求めるものがある。そして、「成長し続ける」という「右肩上がり」のとらえ方とは異なるものを求めるものがある。それは、生命体として連続しているとしても、人生の諸場面には、つながっていき断絶さえあるいくつかのステージがある、ないしはいくつかの異なる人生で構成されると捉えるものだ。

これらは、「成長を追求しなくてよい」「成長を追求し続けることには、何か不自然なものがある」といった発想とつながり、「成長」とは異なるありようを求めるものだ。坂道を登るような「右肩上がり」ではなく、「人生を広げていく」「人生を深めていく」、時には、人生の軌道を変える、人生の舞台を変えるとといったものを含む考えだ。私の「老熟」「老を誇る」の考えもそれらの一つだ。

これらは、個人の努力として追求するものというよりも、多様な関係の中で追求するものだろう。「成長」が、個人間競争として考えられがちなこととは対照的なものだ。

生き方が変わる B 2022年4月21日～6月8日

1. 人間関係の拡大複雑化

今回から人間関係に焦点を当てて述べていこう。

20世紀後半には、人間関係のありよう作りようが大変化したが、大変化は21世紀の現在も続いている。その特徴を一言でいうと、人間関係が流動化する時代だ。

そして、20世紀前半以前と比べて、一人の人間がつくる関係が、量的に見て膨大な数に上り、かつ多様な人々と関係をつくるようになった。近隣の人々や親族の人々、またクラスメイトなど、数十人、せいぜい100人ほどに限られがちであった状況に大きな変化が生まれたのである。出会う人はほぼすべて知り合いであり、人間関係をすでに作っている人に限られていた時代は、19世紀後半に終わった。20世紀に入って、居住地の移動・職業の移動が広がり、さらに学校や軍隊という大規模人数の集団での出会いなどがあり、出会いとつながりの量的増加がみられたのである。こうして、数百人以上の人々とのつながりを大半の人がもつようになる。

20世紀後半になると、職業移動や居住地移動を大半の人々が経験するようになり、新しく体験する職場でのつながり、高校大学への進学により生育地を越えた広いつながりを経験することをだれもが持つようになる。さらに商品売買を介してのつながり、テレビや本などマスメディアを介して不特定多数の人々と出会うことが爆発的に増加した。

21世紀に入ると、以上に加えて、転職などにより多様な人々との新たな出会いが増えるにとどまらず、インターネットを介してのヴァーチャルな出会いが作り出されていく。SNSで「友だち」となり、直接の出会い体験がない人と「つきあう」というありようが生まれるどころか、それに支えられて生きる人さえ作り出していく。

こうした中で、人が「付き合う」数は、数千人になる例さえ珍しくなくなる。SNSで数百人以上の「友だち」を持つというように、「友だち」の意味合いが従来のレベルと全く異なる例もでてくる。

それらの中で、出会いで生じるトラブル・悩みが劇的に増加していく。トラブル・悩みを契機に、出会い・つながりを閉ざして、孤立状態に陥る人も増加していく。

2. 多様な場・組織が生まれてくる

人間関係を考える際に、場と組織の二つの面からのアプローチがある。といっても19世紀以前は、場と組織を区別して考える必要はそれほどなかった。沖縄の地方農村でのシマ（ムラ、集落、生活生産をともにする地域）と家族とは、いずれも場であり組織である。それ以外の場・組織を体験することは例外的なものだった。※場・組織については、次回以降詳しく述べる。

そのため、シマ以外の人とは、名前を知り面識があることは少なかった。逆に、シマ内の方は、通常すべて名前を知り面識があった。家族を越えて血縁のある人がシマ内には多いため、家族とシマとの区別も、スパッと分けられるものではなかった。

シマ内で親しい人は、家族親族以外には、幼馴染とか仲良しといった関係の人がいた。それらも含めて、同年齢関係は、人口的に考えても少なく、せいぜい数名止まりで、年齢の近いものでできる同世代集団があるくらいだった。それらにしても、数歳以上の違いをもつものを合わせた異年齢集団であることが通例だった。「同級生」といった同年齢集団

が形づくられるのは、小学校通学が一般化した20世紀に入って以降のことである。だから、シマにしても家族にしても異年齢集団であって、同年齢集団としての性格は薄い。

20世紀に入って以降、沖縄農村にあっても、シマと家族以外に多様な場・組織が登場する。まず学校である。学校という場に学級などの組織をつくり、そこで子どもたちは同年齢集団の新しい関係を作り出していく。それと並行して青年団などの組織が形成されていく。それらは、シマを越える組織であり、新たな場を作り出していく。さらに、男性にとっては軍隊が、新しい組織、場を与えていく。それと並行して、男女を分けた成人組織などが、それ以前からあった組織を再編しつつ、構築されていく。婦人会・男子成人組織・老人会などである。

加えて大きな変動を作り出したのは、生産と生活の場・組織が混然一体化していた農業ではなく、生活の場・組織とは離れたところに存在する職場という場・組織で、雇われて働くことが劇的に広がっていったことである。早くは20世紀初頭から見られるが、大きな広がりになるのは、戦後のことである。とくに1960年代以降、劇的に進行し、学校卒業者の大半が被雇用者となり、職場が人間関係を築く主要な場の一つになっていく。対照的にシマで作られる関係が縮小していく。

3. 場と組織

20世紀に入って以降の前回書いた変化は、人々がかかわる場・組織に多様なものを作り出し、その種類を増していく。おおまかにいうと、シマ（近隣）、家族・親族、学校、保育園・高齢者施設などの福祉施設、職場、そして商店・道路・交通機関・休養娯楽施設・公共施設など不特定多数の人が並存するところなどがある。

人々は、それらのいくつもの場・組織において、かつそれらを使い分けながら人間関係を作っていく。19世紀以前は、家族・シマのなかで関係をつくる人は、家族・シマの誰もが共通する同一の人であると言えるほどだった。せいぜい関係の濃淡の違いぐらいだった。あるいはシマ内で作られる各種の組などの小組織のどこの属するかの違いぐらいだった。だから、家族内という、子どもの人間関係を親はほぼ知り尽くし、子どもも親の人間関係をほぼ知っていた。

沖縄農村において、これらの例外の一つとしてあげるとすれば、毛遊びがつくる関係だった。シマを越えて、「他シマ」の人間も参加して行われる毛遊びは、若者世代にとって人間関係を作る貴重な場であった。20世紀に入っても行われた（一部では戦後もあったといわれる）が、抑圧禁止されたこともあり、また、出稼ぎ・移民などで若者人数が減ったこともあり、また人間関係を作るところが他に出来てきたこともあって、昭和に入る頃から衰微していく。

19世紀末には職業移動の自由、居住地移動の自由が認められ、20世紀に入る頃になると、移動量が増えていく。なかには、移民出稼ぎで海外県外へ移動する人も出てくる。そして、商品売買が活発に行われる都市地域が広がり都市人口も増えていく。商品売買をする市場や娯楽のための広場・劇場などでは、不特定多数の人が集まり、多様な人間関係を生み出す基盤となっていく。そうした変化のなかで、場・組織を広く含んで多様な関係（時には無関係も）で構成される「社会」が成立形成していく。社会は流動的であることが特性であり、多様な関係をつくりつつ人々は生きていくことになる。

こうした変化のなかで、場と組織との分化が進行していく。分化していくと、多様なもののなかに次の三つに分類できるような違いが生まれてくる。

場と組織の双方の役割をもつもの・・・従来のシマや家族、新たに学校や福祉施設が加わる。

場としての役割が強いもの・・・道路・交通機関・広場・商店、さらにマスメディア、そしてSNSを含んだインターネット空間もそういえよう。

組織としての役割が強いもの・・・職場・行政機関。サークルなど

組織では、入会退会などがあるが、持続性を持ち、かなり固定した関係が作られる。場では、流動的な人間関係があり、そこに有志が相談して組織をつくることがある。

4. 組織と個人の関係

組織を構成する個人と組織との関係は、次の三つに分けられる。

組織の成員であるかどうか、(a) 本人の意思にかかわらず外的要因で決められるもの・・・シマ、家族、義務制学校など、(b) 個人がどの組織に参加するか、参加を求められた組織への参加を個人が自己判断で決められるもの・・・会社への就職など、(c) 個人間で相談して共同して組織をつくるもの・・・起業、趣味組織・サークル・NPO・一般社団法人などの結成

この三つの分類をもとに、組織・場の変化について見ていこう。

まず (a) の性格が濃厚である共同体が縮小していく。

そして、(b) の性格をもつ会社などの諸組織が、社会の中で主要な位置を占める。会社のなかに (a) の性格を持ち込む例も多い。かつていわれた日本の経営などがその例である。他に軍隊や大規模工場が (b) の典型であった。戦前では、婦人会・青年団・在郷軍人会などの組織も、その性格を多分に有していた。

そして、(b) である職場や学校の間を基盤にして、(c) である任意組織が増大していく。

たとえば中等教育高等教育では、初対面の人々の出会いのなかで、懇意な関係が成立し、時に多様な任意組織をつくることもある。

戦後、学校設立間もないころ、有志が集まってサークルやクラブをつくったが、年数がたつにつれて、既存の部のいずれかに加入する例が増えていく。なかには、いずれかの部に加入することが義務化され強制されることがある。この変化は、本来は (c) の性格をもつクラブが、(b)、さらには (a) の性格をもつものになっていく、ということである。

そして、市場・店舗・公園・体育館・通路など多数の人々が併在する場において、人々の関係が流動的であり、個人間の結びつきが弱い人々の間においても、少しずつであるにしても任意組織が生まれていく。

こうした変化を沖縄における結婚についてみてみよう。(a) のシマや明治民法下における家父長型家族の縮小のなかで、(a) に特徴的な親決め婚（沖縄では見合い婚例は少ない）、あるいはシマ内でのモアシビなどでの出会いによる、集落内結婚が減少し、1970年代にはほぼ消滅する。それに代わって、(b) の職場や学校での出会いをきっかけにした集落外の任意の人との結婚が増えていく。自治体境界を越える例、それどころか、ヤマトンチュとウチナンチュとの結婚が増大していく。

さらには、同居する家族成員、家族形態が変化し、3世代家族や大家族は例外化していく。

さらに家族の形の多様化が進行し、LGBT関係も広く認められていく。また、シングル家族（単身）が増大していく。

5. 組織・場の違いがつくる人間関係の変化

職業は、雇用関係の形をとる例が通常になっていくが、就職のありようも変化していく。戦後広がったのは、(b)型の学校紹介にもとづくものを含む新卒一括採用という形である。しかし、ハローワークや就職情報誌やインターネット・サイトにもとづく例も増えていく。それらは(c)型の性格を含むものだろう。市場型の中で、個人の自己判断による選択ともいえよう。とくに、転職の場合は、その例が多いし、個人が自ら作り出した(c)型の個人間のつながりも大きい。

このように多様な人とのつきあいが増えていく。(a)(b)を基盤としつつも、(c)の関係が中心になっていく。そのなかで、面識のある人(知人・知り合い)が生まれ、さらに友だち関係が成立拡大していく。とはいえ、個人間競争が激しくなり、知人・友人関係づくりに成功せず、人間関係づくりから距離を取り、結果的に孤立に至る例も増えていく。

(a)(b)では、本人の意思とはかかわりなく、ないしは本人希望・判断の要素が薄いまま人間関係ができていくが、(c)にあっては、当人が動きだすことが不可欠である。そのため、人間関係を築くための、当人の意思や力量が不可欠となる。その点が、(a)(b)とは決定的に異なる。それでも、いきなり(c)の世界にとびこむわけではないので、(a)(b)の場でできた人間関係をきっかけとして生かすことができるかどうかが重要になる。

以上に基づいて考えると、人間関係づくりの力量を獲得するためのアプローチの違いも浮かび上がってくる。

(a)では、その場で生活すること自体が、人間関係作りに直結する。そのため、特段の手立てが必要になるわけではない。場面に応じて、年長者のふるまいを年少者が「見よう見まね」で体得していくことが多いだろう。また、年長者が年少者に「教訓を垂れる」ことがあったろうし、「ことわざ」などで強調することがあったろう。それらにあてはまらない例外的事態への対応は、個人レベルでは難しく、所属する場・組織の年長者に判断をゆだねることが多い。

6. 人間関係のつくりかた

前回の最後に(a)について書いたが、(b)では、初対面同士の出会い付き合いが大量にある。それらは多様で個々の状況に合わせて付き合うことに難しさを感じることが多い。そこで、学校や会社などの大規模集団では、上意下達で設定されたルールに合わせて個人が行動し、人間関係をつくる。つまり、体制とか標準とかに合わせるのだ。たとえば学校では現在に至るまで、時代錯誤というほどの校則が継承されてきた。子どもの権利条約が発効して30年近くになるといのに、条約にもとづいて、子どもたち自身が校則を作るというのは、いまだ例外である。

学校にしても会社にしても登校出勤時から、分刻みといえるほど細かい段取りに沿って行動することが求められる。また、そうした組織の中での位置も個人ごとに決められている。ベルトコンベアに沿って作業が分秒単位で定められている組み立て工場がその典型だ。学校における授業でもそうした色彩を濃厚に帯びることがある。

そうした組織では、個人の特性を出して振る舞うことは難しい。そのためシステムに合わせて振る舞う方が「楽」になる。その場で、自分なりのものを出そうとしても無理だと「観念」して「ビジネスライク」につきあうことが「楽」で通常型になるのだ。学校における学習にしても、設問に疑問をもって考えることは、ベルトコンベアを止めることになり、避けがちになる。

ファーストフード店の店員が、「マニュアル通り」に行動するのもその例だ。客対応を、客に応じて対応を工夫するのでは、かえってまずいことになる。しかし、こうしたありようが広がると「指示待ち人間」を大量に生み出すことになる。

こうしたありようを避けようとする、システムを変えるしかない。だが、それは人間関係づくりに慣れない人にとっては過大な課題になりがちだ。そこでそのシステムから抜け出るしか選択がないことになりがちだ。こうして、システムについていけず、システムから外れて、孤立につながってしまいかねなくなる。

(c) は、かなり以前から存在はしてはいたが、多くの人が日常的に体験するようになってからは、日が浅い。そこでは、(b) のように体制依存、つまり「指示待ち人間」でいるわけにはいかない。自分自身が当事者として、自分で考え判断し行動することが求められる。

(c) では、人間関係は「流れの中でおのずとできてくる」ものというよりは、自分自身の希望と力量に応じて、また周りとの関係の中で「作り上げる」性格が濃くなっていく。だから、個々人の人間関係をめぐる失敗成功の責任は本人に帰せられやすい。

こうして、(c) では個々人の意欲・力量が重大な意味をもってくる。

現代社会は、(a) (b)(c)の三つのありようが併在することが圧倒的に多い。

7. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方1

連載bの最後になるが、この連載にとって大変示唆的な事例として、金城道年・真弓夫妻からの聞き取りを紹介しよう。3回シリーズとなる。夫妻と私たちは、同じ中山集落の隣人どうしである。彼らから遅れて3年後に私たちが生活をはじめたので、当初からお付き合いがあったが、改めて聞き取りをしてお二人の素晴らしい「生き方」に感銘を受けた。

金城道年・真弓夫妻からの聞き取り 2022年4月21日 金城庭園にて

a) 2001年に中山に新居を建て移住。その前に5年間土地探しをする。現在場所を見て、即決した。そのころは、ローゼル畑だった。自然豊かなこと、集落から離れていないこと、子どもの通学の便などを考えて、決断した。道年さんが幼少期を送ったコザの諸見の雰囲気似ていたこともよかった。しかも、海が目の前にあることが好印象だった。就職で現在県外に出ている子どもたちも、「いつか、ここに帰ってきたい」と語っている。

b) 移居前から、コザのアベニュー通りに会社（広告・看板店 店名トータルプロ）を構えていたが、そこに中山からほぼ10年間、通っていた。コザは「生まれ島」であり、シャッター街になりかかっていたアベニュー通りの「町起こし」をやっていた。

店では、大城清太（現在、著名な点描作家）さんをはじめとする若いアーティストの個展を定期的開催し、かれらをサポートしていた。若い人がたくさん出入りして面白かった。

そのころ、縁があって、FC琉球（現Jリーグ二部所属）の支援をしていた。チームで現在使われているマークは、この会社でつくったものだ。

読谷にある珊瑚畑（珊瑚の移植活動を展開）の金城浩二（映画「ティーダカンカン」で有名）さんとも交流があり、私より若い、彼の生きざまに強い刺激を受けた。それまでは、商業ベースの事業経営という見方一本でいたが、多彩な活動を展開する姿勢に転換してきた。地球相手に珊瑚を一本一本植える活動の素晴らしさに感動したのがきっかけだ。

同様に、自然の力を大切に、絵に対する豊かなコンセプトをもつ大城清太さんにも強い刺激を受ける。金城浩二さんも大城清太さんも、わたしより若い、二人に刺激を受け、「教わった」という感じだ。

そのころ、ここ中山に引っ越してきた。41歳の時だった。

8. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方2

c) 養蜂を始めたきっかけをくれたのは、大城清太ファンで福岡にいる人だった。

※ 真弓さんのコメント トータルプロの代表になってからは、いつも資金繰りに奔走していたので、広告の仕事は早くやめてほしかった。養蜂の話がでたころは、『また始まったか』という印象だった。

養蜂に行きついたのは、「自然の流れ」でもあった。まずは二箱設置したが、食べたら美味しかった。

※ 真弓さんのコメント 「道年が楽しそうだったから、『いいじゃない』とゴーサインを出した」

他にも、建築関係、デザイン関係からのお誘いがあったけど、お断りした。デザインの仕事を50代60代まで続けるには、よほど才能がないとできない」と思っていたこともある。

※ 道年さんは、沖縄工業高校デザイン科卒業

d) コザ時代 総合型スポーツクラブの取組みとの出会いがあった。紹介されたものだ。

息子の小学校サッカークラブの指導もしていたが、子どもの卒業と同時に、コーチをしている保護者も同時に卒業になる例が多いため、それを何とかしようと思っていた。ということで、自分の子どもが卒業してもやめることができない。地域で、色々な人が循環するような仕組みが必要だと感じていた。ということで、玉城総合スポーツクラブを設立した。

真弓さんと二人で、運営事務をし、通信を発行するなど、色々なことに取り組んできた。現在、小学生のサッカークラブ（玉城と百名の二つ）、ボクササイズを地域公民館にて、テニポンを小学校体育館で（市内外のいろいろな地域から、多世代の人が集まる）。

最初の頃は、参加者を集めるのに、チラシ配りなど、いろいろなことを試みた。このところ、落ち着いた運営ができるようになった。参加者の御蔭だと思っている。

地域総合スポーツクラブは、任意団体だが全国組織になっていて、現在九州地区の代表理事をしている。財政的に大変厳しい状況にある。各地のクラブの運営には、スポーツ指導に強い人と経営感覚のある人という二つのタイプがある。両者を噛み合わせる必要がある。

その点では、養蜂と地域総合スポーツクラブという二つをしていると、相乗効果があると感じている。この二つを通して、多様な方々とつながりができて、発展してきている

中心は、「子どもたちのために」ということがある。

9. 聞き取り 金城道年・真弓夫妻の生き方3

e) 真弓さんの話

総合型スポーツクラブ立ち上げには、2年間の準備期間があった。道年のペースに私がハマっていった。

私自身は、スポーツをしていなかったけど、テニポンにハマってきた。

※ 道年さんは、若いころ、サッカーとボクシングをしていた。

最初のうちは、「仕事だからやらないといけない」という感じもあったが、徐々に自分自身も楽しめるようになり、はまってしまった。

地域の違いや年齢の違いがあることで、豊かな人間関係・つながりが生まれてきた。最初のころは、新聞チラシや市の広報紙などを活用したが、いまでは口コミで参加者が集まるようになってきた。多くのスポーツ団体は若い人が中心のところも多いが、ここは「楽しい」といって、多世代の人が多種目にわたって参加してきている。

仕事の中心は養蜂だけど、いろいろと手を伸ばしている。スポーツクラブの事務処理だけでなく、カラーセラピーなどもしている。カラーセラピーをしている山内さんにつながっているが、看板作りがきっかけでつながった。

今後は「はちみつマイスター」として「はちみつのある暮らし」を多くの人に伝えていきたい。

養蜂見学・養蜂体験などのお客さんも多い。お客さんでもあり、友達でもあるという人が多い。那覇あたりからドライブしながらやってくる人もいる。人とのつながりが楽しいから、やってこれた。

養蜂にしてもスポーツクラブにしても、最初に道年が、「種をまいた」が、後から細かいことが好きな真弓が「整理整頓」して、順調にいくようになった。

再び道年さんの話

f) 今後のこと

まだまだ一本立ちできていないので、養蜂に関連することもいっしょに、いろんな企画をして自立したい。

g) 区長7期

一回目の区長は、2年間。この3月まで務めた区長は5年間。通算7年間。 ※南城市区長会の会長も務めた。

中山で育った子どもたちが、中山に自信をもって、中山で暮らすように地域起こしをしたいと思っている。実際、中山に住み始めた若い人たちが増えてきた。

そんな地域づくりを願って、区長の仕事も務めてきた。

生き方が変わる C

2022年6月14日～8月1日

1. アラシックスとアラサーの新しい生き方への挑戦

今回からシリーズCに移る。個人個人の具体的な生き方に近づけて述べていこう。

はじめに、アラシックスの最近の動きにかかわって述べよう。50代後半から60代前半のアラシックスは、かつてなら還暦ということで、人生の終盤戦のイメージがあり、「第二の人生」を、充実した「余生」としてどう送るか、というイメージだった。

しかし、今では、平均寿命が長くなって、「これから20～40年をどう生きるか」というイメージで長期戦の改めでのスタート地点に立つ雰囲気が漂う。それまでの60年の人生の延長線上で「余生」をどうするかではなく、これから新たなことへの挑戦をいかに始めるか、というイメージを持つ人が多かるう。

私が生活している所では、定年退職する人が示す例も多いが、新たなスタートの場として選んで沖縄県内外から移住してくる人（Uターンを含む）が、新たな例を作っている。

人生を「前半期」「後半期」の二つに分けて、40代半ばからの新たな挑戦の準備を提案する私の長年の立論から見ればやや遅いが、それでも、そうした人の多くは50代半ばには準備を始め、アラシックスに近づくと、実際の挑戦を始める人が多いから、「遅きに失する」ことにはならないだろう。こう書く私も、実際の所、「遅きに失して」50代半ばから新たな挑戦を実行し始め、20年になった。

こうしたアラシックスの人が、新たな挑戦を始めるありようには、アラサーの方々の雰囲気に似ている印象を受ける。アラサーの人々で、社会人として10年近くの実績を持ちつつ、一定の見通しと決断を持って、新たな挑戦を始める例をしばしば見かける。アラサーにも移住者が多いが、かれらには「新規まき直し」の雰囲気が漂う。最近のアラシックスの人達にも、そうした雰囲気を感じるのだ。また、いずれも10～20年ほど先をイメージして準備するだろうが、期限期間にそれほどあくせくしないのも共通しているようだ。

アラサーの「新規まき直し」をする人には、20代の「若さ」を維持して頑張りぬくのではなく、新たな生き方を「肩の力を抜いて」探究し、金銭収入が多少低くなっても、充実を味わいつつ楽しむ生き方への転換が作り出そうとする例が多い。同じことがアラシックスの新しい生き方を追求する人にも言えそうなのだ。なかには「現役」時代の収入を維持しようとする人もいるが、多くはたとえ収入額が1～2割になるとしても、充実したものであればいいと考える例が多い。

アラサーにしてもアラシックスにしても、近年の沖縄移住者の特徴には、ガンバリズムから生じた「傷」を癒すスローライフを求める例が多い。そこには、自然と人々とのかかわりで出会う「暖かさ」を求めて、「自由」に生きるというスタイルがある。仕事に、金に、子育てに、家族に、世の中に「縛られて生きる」「急かれるように生きる」ありようから離れる生き方である。

2. スローライフへ

近年のテレビ番組には、前回のべた「スローライフ」型の「新規まき直し」の生き方を紹介する例が、しばしば見られる。そうした番組は、00年代初めにもあったが、そうした生き方もあるのかと多くの視聴者を驚かせるものをもつ

例外的番組であった。その状況と変わって今ではごく普通の番組となっている。自分と同じようなことを試みている人があちこちにいるという印象を与えているのだ。それだけ、スローライフが広がりを持ってきているといえよう。

私たちが2006～7年に登場した「月10万円で暮らせる町・村」番組（東京12チャンネル系列）も、「気ままにロハス」（琉球放送テレビ）も驚かせる例だったが、いまでは「自然体」型の番組が増えている。

それらは、社会変化が、個人の生き方変化として広がっていることを示しているのだろう。それは、右上がり成長ではなく定常型のありようを模索する社会での人間関係の変化となってきた。成長期と定常期とでは、人間関係も人間成長・成熟のありようも異なる。言葉をかえると、成長ではなく熟することへと、量的「発展」ではなく質的深化へと移行させようとする人が多い。金額など量的数値で量ることが縮小し、質に焦点をあてて考える事が増加しているのだ。

若者の自動車離れの進行は、その一端であろう。また、かつてなら至上価値ともいうべき目標とされた平均寿命の延長の追求にこだわらないありようが増えている。なかには、「長生きしたくない」とつぶやく高齢者が多い、という報道さえ耳にする。年齢ではなく、どんな生活・人生を送るか、質的に充実する生活・人生を求めることへと移ってきている。

ちなみに、最近SDGsがあちこちでいわれる。なかには、「持続可能」を「持続的経済成長可能」に読み替えて使う例を見かけるし、かなり多い。それは右上がり経済成長時代の蔭を残しているといえよう。数値目標を立てて追求するというありようは、それなりに有効ではあるが、それでは図り切れない充実したものの質的実現を求めようとするのだ。

そして、人間関係についていうと、競争関係よりも共同関係のほうへと軸足を移す人が増えている。

3. 「成長」に囚われる

スローライフ的な生き方、量よりも質を求める生き方への動きについて、前々回、前回とのべてきたが、その動きは、かなり緩やかである。行きつ戻りつ、という印象さえある。

それは旧来の成長原理にもとづく流れが強力であり、人々の生き方に深く染み付いているからだろう。その強力なものとして、成長に適合した人生「原理」が存在している。そうした流れから外れることは、「未知」の世界、ないしは「未開」の世界に放り出されることで、「考えられない」「想定外」のことにされている。

そうした流れの形成維持には、上下関係が強い支配秩序が結びついている。上下秩序が生み出すものとして、優劣や正否によって、序列づけることがある。また、歴史的に言うと、西欧→日本→沖縄という秩序も、上下秩序が生み出したものだろう。そのため、西欧・日本・沖縄の相互間にみられる違いとかズレとかが、序列としてとらえられがちになる。

上にあるものが、下にあるものを制覇し「折伏」し、それに従わないものを迫害し差別することなどが日常化してしまう。官庁も含めて諸制度が、序列・適不適を明示することで、そういう傾向を加速してしまう。典型的には、学力テスト点数による序列化がそうだし、最近では、ワクチン接種済みかどうか、接種比率などが、そうした役割を果たす。医療なども、そうした傾向を帯びることがあるのだ。そうしたものは、別の選択肢の無い閉じられた世界を作って、人々を封じ込めることで機能しやすくなる。

上下秩序には、このように制度が生み出すものとは別に、権威によるものがある。王、将軍、カリスマなどに強い権威を感じる人々が、ほぼ無条件に従うことで築かれるものだ。成長期にある子ども若者はそうした権威についていくこ

とで、自己の成長をはかろうとすることがある。政治の世界でも、人気のある人が権威的秩序を作ることがある。ファシズムは、その極致であろう。それらは流行現象として生じることがある。野球選手やタレントにあこがれるのもそうであるが、『追っかけ』が積み重なって、上下秩序につながることもある。

近年では、個人の好みや意思に関わりなく、システムによってつくられた上下秩序が人々を「とりこ」にしがちである。個人としての主体性・任意性を排除して、機械的操作としてすすめるものだ。それは、デジタル情報やAIがなじみやすいものだ。

4. マニュアルに沿った行動 「べきだ」「しなければならない」

前回書いた上下秩序の中では、標準に従うことが中軸にすえられる。対照的に個々人による判断が弱められる。そして、個々人の創造性も弱められる。個々人が自分の判断で創造的に動いては、標準がぐらついてしまうのだ。標準に従いやすくするために、マニュアルが作られ、マニュアルに沿った行動が求められる。ファーストフード店の接客マニュアルが典型的だろう。そこでは、客の多様性に応じた対応ではなく、どんな客にも「通用する」標準としてのマニュアルである。そのため、店員だけでなく客の方も、存在するわけがないが、暗黙の中に存在しているマニュアルに沿った行動が強いられる。

そうしたところでは、「べきだ」「しなければならない」という言葉遣いが溢れてくる。飲み物注文のような何か行動する際に、簡潔適切明瞭かつ迅速に注文を出すべきだ、出さなければならないという風に、「べきだ」「しなければならない」を予め用意して、客としての対応を全うしなくてはならない。そうしないと、後から並んでいる他の客から冷たいまなざしを受けることになりかねない。

こうした事例が上下秩序が強い「標準」順守の社会には溢れている。そうした所でストレスをためずに生活していくためには、標準を遵守して、「べきだ」「しなければならない」に沿った行動をすることが大切になる。そのためには、行動する際に、いちいち自分で考え判断して行動するよりは、上からの指示に従い、慣習に従うことが「楽(らく)」である。「出る釘は打たれる」ので、「指示待ち人間」になりきるのだ。

こうして、上下秩序が強い社会や人間関係にあっては、停滞的傾向が強まり、個々人は個性を失っていく。

だが、習慣に基づく行動にしても、「指示待ち人間」式行動にしても、出来具合が重要で、出来具合で序列が作られていく。そこで、出来具合をよくするための頑張りが求められる。学校で配布される通知表などで、成績が芳しくない項目には「頑張りが必要」という評価が付けられるのは、その象徴的なことだろう。

こうして、至る所で、頑張りが要求されるガンバリズムが蔓延する。

5. ガンバリズムへの様々な対応

前回まで述べてきた「ガンバリズム社会やガンバリズム型人間関係にどう対応するのか」によって、人々の生き方は大きく異なってくる。一方の端には、ガンバリズムそのものの人、他方の端には、ガンバリズムから完全に離れて「仙人」のように霞を食べて生きる人がいるとすれば、ほとんどの人は、この両端を結んだ線上のいずれかの位置にいる。

まず、ガンバリズムに陥りやすい人、陥りやすい思考様式を持つ人について述べよう。職業を例にするなら、警察官を含めた行政職員・教員・医療関係者などがイメージされやすい。いずれも上下秩序が強く、標準が定められ、マニュアルがしっかりと用意されている。教員は、しばらく前までは上下関係が弱く自由で創造性を発揮しやすいと言われていたが、近年では縛りがきつく、時にブラック職場といわれるほどで、精神的理由での休退職が多くて問題含みになっている。医療関係にもそうした要素が見られる人も多い。

こうした職業の中で、典型的なのは軍人だろう。上下秩序そのもので、標準とマニュアルに張り巡らされている。さらにベルトコンベア型の規格品大量生産現場や先に述べたファーストフード店のようなマニュアルに基づく接客が求められる職場もそうである。なかには、ロボットのように行動することが求められるところもある。そうした所では、ロボット型AIが入り込みやすいかもしれない。

もう一方の端には、すでに大成し、「仙人」の域に達した芸術家や職人がいる。といっても、そのほとんどが、かつてはガンバリズムの中にいた人が多いだろう。

私が長年勤めてきた大学に務める人の多くは中間の位置にいる人が多い。だが、専門分野による違いは大きい。大学という職場のなかでの位置（職員であれば正規・非正規、役職名、教員であれば教授・助教など）の違いがある。また年齢の違いも大きい。加えて、経営での、ワンマン型と合議型とでは大きく異なる。

職業による差異について述べてきたが、家族における違いも大きい。夫婦関係、親子関係、ジェンダー関係の違いで千差万別である。親子でいうと、いろいろな局面があるが、子育て・教育にかかわっていうと、かつては子どもの教育に大きな役割を果たした地域共同体が弱まり、それに代わるかのように学校の役割が巨大化し、それらの変化に沿うように親の子どもへのかかわりも大きく変化してきた。序列化された学業成績や集团的行動規準などといった学校的価値に従う親が増え、学校の下請けとしての「家庭教育」をすすめる親が増えてきた。そして、学校が市場化社会のなかで変容していくと、親のかかわりも変化し、子どもの教育に「お金」をどれだけ注ぎ込むかを重視する親が増えてきた。

たとえば、子どもが、企業社会のなかでの成功を取めることを目標にする親は、子どもに対して、上下秩序のなかで、より上位にむかって頑張るように投資・指示命令を強めていく。それを受けて、子どもはガンバリズムの世界により強く放り出される。子どもは「指示待ち人間」型のガンバリズムを強制されていく。

6. ガンバリズムを促す関係 権威主義

前回述べてきた企業社会や学校秩序に沿った形で、子どもが「より高い位置を占める」よう熱心に促す親は、「教育ママ」ないしは数少ないが「教育パパ」と呼ばれてきた。大都市では、すでに1960年代から定着しはじめ、標準化されていくが、沖縄では1980年代に広がり始め、徐々に定着していく。

そうしたありように子どもを従わせようとするとき、親子間の衝突をはじめとする諸問題が発生しやすい。また、陥りがちな無理を通そうとすると、夫婦間をはじめとする家族成員間の問題が発生しやすい。

同じようなことは、スポーツチームや部活においても、しばしば見られることである。とくに実力差などで上下秩序をつくろうとする勝利至上主義があるところではそうなりやすい。

また、子どもたちの同級生・友だち関係においてさえ、上下秩序をつくる事例が見られ、いじめを発生させたりする。

こうした関係を生み出しやすいタイプとして、実力がある人、権力がある人、相手を援助・保護していると思込んでいる人、自分が正しいと思込んでいる人の場合がある。

そうでなくても、権威頼みで、権威あるものに依存しやすい人はそうなりやすい。権威に依存することは、楽（ラク）だが、創造性・主体性が弱くなる。自分自身を出さないで、場面に応じて判断を創造できない人も、「安楽な」選択をしやすい。「権威ある人の言うことに従っただけ」と言い逃れをしがちだ。うまくいかなかった時、「〇〇は正しくてしっかりした考えであるので、頼りにしていたが、どうやらおかしらしい。〇〇についていくことをやめて、▽▽についていくことにしよう」といって、権威の乗り換えを行う事が、よく見られる。「権威探し」だ。よく見られる人気タレントを追っかけ、乗り換えるのと似ているといえるかもしれない。

7. 生き方を変える過渡期

前回まで述べてきたありようから脱け出る（卒業する）のは、どういう時であろうか。失敗など上手くいかないことが一つにきっかけになろう。だが、別の権威を探して、それに依存するとしたら、同じことの繰り返しになり、結局は脱け出せないことになる。

脱け出る時は、自分自身を見つめ直し、自分自身を変え、さらに人間関係を変えることが求められる。そうしたことのきっかけとして、異質なものと出会って、自分の考えが、何かに囚われすぎていて狭くなっていることを発見することがある。外国生活を含め、移住や災害などで生活が大きく変わった時に生じやすい。

夫婦や親子のように、日常生活を共にしている場合でも、身近で「わかり合えている」と思込んでいる相互が、何かをきっかけに、実は異質な他者であることを気づくことがある。そのきっかけを通して、相互の異質さを受け入れ、「違いを越えて」ではなく、「違いを持ち寄って」協同活動を展開するかどうかが要点になる。それは、一方が他者を実質的に支配するタテ型関係を脱け出ることを意味する。そして、違いを前提にした協同活動を通して、相互の共通性を作り出すこともある。

そのように異質な他者を受け入れないまま、他者を自分の支配下に置き続けようとするれば、相互関係は破綻につながり、離婚などの別離となりやすい。相手が抵抗して破綻に向かうだけでなく、自分の身体が抵抗して破綻をむかえることもある。病気によっては、ガンバリズムの行きつく先として、自己の身体支配の破綻の結果である場合がある。自殺などにも、そうした例があるし、精神疾患などは、その多くが、そうしたものであろう。また、内臓疾患にも、「不摂生」という形をとるにせよ、ガンバリズムの到達地のような色彩を帯びるものがある。

と同時に、病気をきっかけに『我に返り』、それまでのガンバリズム的な生き方から卒業し始める人も多い。

新たな生き方追求への過渡期に、休職・転職・長期旅・移住などを行う人も多い。それは、自分なりに生きようとする場合、あるいは「自分なりに生きるためにどうすればよいのか、考える時間」と位置付けて、休職・転職・旅・移住などをする場合もある。田舎暮らしが増えているが、癒しを願って自然とのつながりを求めている移住が多いとはいえ、その過程で人とのつながりが新たに生まれ、癒し以上のものを見だし、新たな生き方が生まれてくる人もいる。

定年退職の場合にも、そうした新たな生き方を探る絶好のチャンスととらえて、取り組む人もいる。

8. 生き方を変える年齢時期 アラサー

学校→終身雇用制の職場→退職、という一本線で、かつては「標準」とされた道を歩む場合、生き方を変える機会があるとすれば、その重要な一つは退職になるが、それさえも「仕事をしない」ということにとどまり、「生き方を変える」といえるほどのものになるとは限らない。ただ「仕事をしなくなった」ということに過ぎないからだ。出勤しなくなったこと以外では、消費生活・生活習慣は変わらない。出勤しなくなったことから生じる「空白」を、それまでの生き方と同様なもので埋める人も多い。別の勤め先に移るのもそうだ。

しかし、こうした一本線の道を歩む人は、雇用制度を含む経済構造の変化のなかで、今では限りなくゼロに近づいている。私が住む沖縄農村の近隣の人では、人口100人について数人いるかいないかの数である。そういう生き方をする時代ではなくなっているといえるかもしれない。農業を含む自営業であれば、ありうるかもしれないが、これまた産業構造の変化のなかで、その数が大幅に減ってきている。

こうした道を歩むわけではない大多数の人々にとって、大きな変化が訪れる時期の一つは、アラサーティの時期であり、もう一つはアラシックスの時期である。この二つの時期に、人生の「仕切り直し」をする人は多い。

就職したが、自分の生き方に合わないと考え転職する人は、20代から30代初めにかけて多い。家族で生活している人で、実家から巣立ち一人暮らしをすでに始めている人、新たに一人暮らしをしようとする人も多い。結婚して、子どもができて、家族生活の仕切り直しが求められる人、結婚したが、やり直しの道を歩む人、一人暮らしできたが、カップル生活に入ろうとする人、仕事にしても家族にしても仕切り直しが必要と感じ、移住して新たな可能性にチャレンジしようとする人。こうした事例がアラサーティには多そうだ。私が生活する沖縄農村でも、そうした人々が移住してくるのが目立つ。

アラサーの人々は、20歳前後の人と比べれば、かなりの生活体験があるので、無茶はしないとしても、「生き方を変える」ことに向かうエネルギーに溢れており、近くで見ていると、「なかなかやるなあ」「随分思い切ったことをするなあ」と感じさせることがしばしばだ。

9. 生き方を変える年齢時期 アラシックス

前回述べたアラサーティに比する変化は、アラシックスにも見られる。たとえば定年退職をきっかけにして、仕事をやめる人変える人が多い。そのことで、それまで依存していた権威・組織を失い、職場・肩書の権威を失う人も多い。そこで、新たなものを作り出す必要がでてくる。できれば何かに依存するのではなく自ら作り出すものに関わっていきたい。あるいは、子どもの巣立ちにともなう「空の巣症候群」といわれる状態になる人もいる。

そのなかで緊張が取れてきて、ホッとしつつ「これからの人生を楽しもう」として、生き生きしているアラシックスを見かけることが多い。女性に多いのはなぜだろうか。男性のなかには気が抜けて、転換に対応できない人を見かける。女性には専業主婦だったにせよ、勤め人だったにせよ、次の人生ステージに生き生きと向かう人が多い。その際、配偶者の男性が「足手まとい」になってしまうことさえある。

還暦を迎えて、「これまでよくぞ生きてきた。ご苦労様」という後ろ向きより、これからは「一層自由にいろいろなことができる」と、前向きに語る女性は多い。無論、男性にもそういう人はいるけれども。再雇用制度で同一の仕事づく男性も多いが、「同じ仕事をしているのに、給与が大幅ダウンで、やっつけられない」といって、やめて、自分なりの

道を探しはじめる人も多い。

アラシックスの試行錯誤は実に多様である。しかも長期に、たとえば数年かけて、いくつかの職業や活動をやるという試行錯誤になる人が多い。そのうちに前期高齢者の仲間入りとなる65歳を過ぎる人、体調不良に陥り、もっと早くから「生き方を変える」営みを始めればよかったと語る人もいる。

だから、私は、こうしたアラシックスの生き方変化への営みをもっと早めて、できれば40代後半に始めてほしいと思う。

生き方が変わる D 2022年8月7日～9月30日

1. 経済成長期時代の「標準」人生構図

「生き方を変える」を考えるうえで、「人生は一つだ」という発想から卒業し、人生は再編・再創造のくりかえしだというとらえ方が必要だ。それは、人生コースの「標準」から卒業することでもある。

ここ数十年にわたって支配してきた人生コースの標準は、1950年代終わりから1960年代に作られたものだ。中学校卒業→高校(大学)進学→新卒就職(終身雇用職場)→職場内出世→定年退職・老後生活、これが男性の「標準」とされたが、女性の場合は、男性の「職場内出世」の個所が、就職→結婚(一部は出産)退職→専業主婦「家庭生活」・育児(→職場復帰、あるいはパート職場)に置き換わる例も多い。無論、男性同様の「標準」の道を歩む女性も数は少ないが存在している。この「標準」には、夫は職場、妻は家事育児という性別役割分業の核家族が結びついていた。

この「標準」は、成長社会における年齢構図に対応していた。その一つは、平均寿命が60～70歳で、定年退職が55～60歳というものだった。また、思春期には、親からの自立過程としての第二次反抗期があった。そして、それに続く青年期は、「モロトリアム」のなかでの様々な試行錯誤を含んで、20歳前後には職業人になるという構図だ。

当時の青少年の読み物に「偉人伝」があり、抜きんできた成功を取めた「偉人」をモデルにして生きなさい、というメッセージを青少年に送り続けた。また、それ以前から存在していた立身出世主義が、この時期の「標準」にも組み込まれ、経済同様に、「右上がり」人生構図が、多くの青少年の心をとらえた。

これらの年齢構図は、経済成長に対応したものだ。ただし、沖縄では米軍統治下の基地経済が強力であり、また製造業を中心とする大企業が少なく、経済成長のありようが他府県とは大きく異なるので、年齢構図も大きく異なる。それでも、こうした構図のなかで終身雇用制職場として公務員・教員・少数企業が位置づき始めるのは、1960年代後半からであり、本格的には1980年代後半以降である。それにしても、このコースを歩むのは、限られた人たちであった。先に紹介した金城夫妻は、それとは縁遠い世界を自分たちで切り開きつつ歩んでこられた。

この標準構図は、経済成長時代が、1990年代で終了するとともに、大きく変化し始める。といっても、いまだに経済成長信仰で生きる人は、人生の年齢構図もこれまでの「標準」に沿おうとする。

標準構図の崩れは、たとえば平均寿命が80～90歳となりつつあることにあらわれているが、働きバチ男性で、そこまでの寿命に達する前に早逝する例もその例になる。また、終身雇用制の職場に就く人が絞られ、非正規雇用が増えていることも、標準構図の崩れを示す例だろう。また、第二次反抗期は、経済成長期特有の表現のようであり、現在ではなかなかお目にかかれない。それに代わって、「仲良し親子」と言う形で、親子密着がすすみ、「親離れしない」子ども、「子離れしない」親が増えているようだ。

2. 経済成長終了後の多様な人生展開

前回述べたように、1990年代には経済成長が実質的に止まり、定常型ないしは縮小型の経済になって、人生構図も大きく変化してきている。転職が数回以上になる人、70歳まで働き所得を確保する、ないしは確保したい人、脱サ

ラして起業に挑む人、共稼ぎ子どもなしのカップル (DINKS)、単身世帯を続ける人、家事育児を担う男性、多様な家族の形を持つ人など、これらは1960年代にはたいていの人のイメージになかった事例である。

それらは1990年代に始まるものが多いが、現在も進行中で、さらに多様化が進んでいる。ではいずれ従来の標準構図に代わる新しい標準構図が登場するかというと、そうではなさそうだ。むしろこれまでの「標準構図」の「標準」がなくなり、多様な構図が併在するといつてよいだろう。しかも、その多様な構図の中では既製品ではなく、個々人が作り出していくものが増えている。

そこで、今述べた個々人が作り出していく多様な構図にかかわる特徴について述べていくことにしよう。それを、生き方がかかわる課題、および人生における人間関係の変化に注目して述べていこう。

最初にいえることは、課題・関係のしぼりが弱まることである。「こうあらねばならない」といったくびきから解放されることである。それは、課題が固定的ではなく流動的で変化に富むことである。言い方を変えると、たとえ固定的に見える課題にしても、その内実は変化に富んでいるのである。

人間関係についても、これまた固定的ではなく流動的である。かりに変化なく固定的にみえても、その内側では、流動的な要素を含みながら関係を維持する動きに富んでいて、結果的に固定的に見えるということである。そして、人間相互間の距離も流動的であり、何らかの意図的な営みがなければ、距離は拡大し、薄らいでいく。と同時に、多様な出会いが、量的に増大する。それは、絶対的な関係というものが薄れ、相対的な関係が満ちてくるといつてもよいだろう。

友人・恋人といった親しい関係を例にあげると、○○と▽▽との関係がなにより大切に長続きさせようといったことに限らない。さらに□□との関係、◇◇との関係も同時並行で、あるいは時と場合に応じて使い分けるといった形である。

社会資本 (人間関係資本) という考え方を使って言うと、結合が強く固定的なボンドとしてのつながりよりも、いくつもの関係を橋渡しするように柔軟性が高いと同時に切れやすい、あるいは乗り換えやすいものであるが、そうしたブリッジとしてつながりが増えるということである。

3. 職業・仕事をめぐるかつての「標準」が変わる

前回述べた課題と関係の変化について、いくつかの分野ごとに述べていこう。まず職業・仕事における変化である。経済成長期に作られた「標準」のありようでは、生活全体をとりしきる最高の位置に職業が置かれた。「仕事第一」なのである。そして、「仕事第一」の夫本人だけでなく家族の生活までも取り仕切るものであった。家事をする妻は、仕事に出る夫を支えるという発想が象徴的である。

ここでは、仕事外のことは、仕事を支える補助的なものに位置づけられる。そこで、「仕事第一」の夫にとって、「家庭」は栄養をとり休養し、仕事に向かう英気を養う場とされた。

さらに夫が職場ですることが仕事であり、妻がする家事育児は仕事ではないとさえ考えられた。金銭収入にならないものだったからである。家事育児は「シャドールワーク」であるにしても、れっきとした仕事であると位置づけられたのは、1980年代以降である。

こうした構図では、「夫」を雇用する会社が、夫だけでなくかれの家族の中心に坐る。場合によって地域全体に君臨する。企業城下町がその典型である。企業が従業員である「夫」を通して家族メンバーをコントロールし、さらに地域までもコントロールしようとする。その企業が、家族を模した日本的経営を行い、家族福祉を企業が担おうとする。社宅

や扶養手当は、そうしたものの一つである。

こうしたことは、大企業だけでなく、中小企業、さらには農業組織を含む自営業組織でも展開されてきた。

さらに日々の生活にとどまらず、人生の全時期をとりしきるものとして、職業としての仕事が位置づけられた。たとえば、統計上、全人口が労働人口と非労働人口とに区分され、子ども・高齢者・専業主婦・障がい者は非労働人口と分類された。有用なのは、労働人口に該当する人たちだということである。

子ども若者の学校での成功は、仕事での成功のために準備するものと位置付けられた。退職後の高齢者は、「現役」時代の職業にアイデンティティを求め、その延長線上で退職後人生を送ることになる。

以上述べた職業中心の生き方が、1990年代以降大きく変化していく。それを端的にまとめるなら、終身雇用制にある一つの職業が、一人の人間の人生と生活の全体を取り仕切るものではなくなってきた、ということである。

仕事・職業は、生活・人生の全部にかかわる最高位にあるのではなく、その一部にかかわるものになっていく。職業としての仕事、しかも終身雇用の一つの仕事に一生をかけ、日々の生活もそれに捧げるという生き方ではなくなっていくのである。

4. 職業・仕事にかかわる新しい生き方の模索が続く

1990年代以降展開してきた職業・仕事にかかわる新しい生き方について述べていこう。

1) 学校卒業後に勤務した会社に終身雇用で30～40年勤め、退職後は支給される年金で生活する人の数が、どんどん絞られていく。正規雇用で終身雇用になる人は、「幹部社員」に限定され、他は非正規雇用者となっていく。

たとえ「幹部社員」として終身雇用で採用されたとしても、その会社でさえ、退職時期まで安定的継続的に存在することが危うくなっている。

2) 有期雇用で終身雇用でない人は、いずれ転職するしかない。M字型といわれるような結婚出産育児で職業から離れる女性は減少し、また専業主婦も減少してきた。多様な職種で働く女性が増えたのである。しかも、彼らの多くは、非正規でいくつもの職場を転々とする。

3) 会社に尽くすという働き方ではなく、自分なりに考えて勤め先を決め、状況に応じて転職することを積極的にする人が増えている。

4) 職業についている配偶者をもう一人が支えるという生き方ではなく、双方とも職業につき、共同で家事育児をして、相互に支え合うという形が徐々に増えてきている

家事育児をもっぱら女性がするというのではなく、男女共同で家事育児をする。シングルで、職業家事育児に奮闘する人が増える。

5) 長時間勤務ではなく、職業も職業外の生活も双方とも大切にす、ワークライフバランスが当然だとする人が増えていく。

6) 所得の右上がり上昇にこだわらず、金銭依存症から徐々に脱け出て、自分たちに合った生活と職業を選び作る人

が増えていく。

7)「家庭を持ち、子どもを育てる」ことを可能にする所得上昇が見通せない中、单身生活、单身人生を長期に営む人が増える。

8) こうして、職業が日々の生活と人生にとっての「すべて」であるというのではなく、その「一部」に過ぎないという見方が増えていく。

9) 会社などの職業組織が権威ある絶対的組織というのではなく、人がかかわる多様な組織のなかの一つに過ぎない、という相対化が進行していく。多様な組織は、社会全体につながる多様なチャネルであり、多様な組織のメンバーの一人になっていく。

そうしたことをすることが、生き方の新しい形を求めていく。他方、そうしたことをすることが苦手な、孤立に苦しむ人が増えていく。

5. 家族をめぐる人間関係について考える

今回からは、焦点を家族という人間関係にあててみよう。

戦前の家父長的な家制度は、戦後の憲法にもとづいて解体された。その一つの典型は、親、とくに家父長が、その子どもの結婚を決める「親決め婚」である。この家父長的ありようは、戦前だけでなく、制度上の解体がなされた戦後でも実質的に長い間人々を縛ってきた。その「名残り」は、戦後70余年たった今でも見られる。また、沖縄の門中制度のように、法的な根拠のないものでも、戦後も長く残ってきた。女性が位牌を継げないことを含むトートーメー問題は、いまなお続いている。

それでも、憲法の「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」という条文にもとづいた関係が実質化してきた。そして、恋愛結婚が増加し大勢を占めるようになってきた。

その際に、留意しておきたいことは、こうした結婚は、夫婦およびその子どもという『核家族』形態の家族を営むことが大勢を占めたのだが、夫の勤め先が企業になることが大勢を占めるようになる1960年代以降、性別役割分業として、「夫は職場、妻は家庭」という形が「標準」化される。それは、職業・仕事の項で書いた企業社会での標準となった。

そして、人々は、法律上の結婚をしなければならない、という暗黙の前提がつくられた。そして、結婚適齢期というものが、これまた暗黙のうちに形成され、それらに縛られて生きる人が大勢を占めるようになった。そして、離婚は避けるべきものという不文律も強固に成立した。お互いの自由な意思に基づいた合意で作られた関係も、自由に解体再結合することは避けるべきだという風潮が広がっていたのである。

だが、1980年代以降、これらのありように風穴があいて、多様なありようが噴出してきてきた。そのなかで、家族は、異性愛カップルを基本にしてつくられるとは限らなくなってきた。異性愛ではないカップルによるものだけでなく、単身家族の爆発的増加が目される。それは20代から高齢者まで年齢を問わず増えている。さらに、親子家族の増加(子どもと一人親、老親と成人の子)も著しい。

こうして個人を基本単位として多様な組み合わせをつくるという「当たり前」のことが、まさに「当たり前」になっ

てきたのである。

先に述べたカップル形成においても、地縁原理や血縁原理にもとづくものが減少し、職場という社縁や、学校縁に基づくものが増えるだけでなく、多様な世界での出会いをきっかけとする、いわば自発的結合が増加し一般化してくるのである。

6. 合意にもとづく対等協同の人間関係の家族における展開

家族形成における合意の原理は、社会的慣習、法的規定の影響を受けるのだが、社会的慣習、法的規定とは異なる原理である。別の言い方をすると、合意の原理に対応する社会的慣習、法的規定を要請するものである。たとえば、夫婦の各々がどういう姓を名乗るかも、本人の意思と双方の相談にもとづいて決められる。

そうした合意による決定を法的に保障し、社会的慣習としても形成定着していくことになる。これまでは慣習・法律が合意を規制する方向で働くことが中心であったが、これからは合意を促進するものとして慣習・法律が存在するようになりたいものである。夫婦別姓、法律婚と事実婚との関係についても、こうした視点から考えていきたい。

また、性別役割分業の縮小崩壊が進行し、共稼ぎが普通になり、誰もが職業を持つことが普通のこととなりつつあるが、性別役割分業を前提にした社会慣習や法律が、共稼ぎを前提にしたものへと転換する動きをさらに推し進めたい。たとえば、料理担当とか PTA 会合担当とかは、これまで女性担当が多かったが、男性担当や共同担当にすることなども増やしていきたい。また、世帯主を女性が務めることが増加していくだろう。

合意原理は、婚姻だけにとどまらない。家族メンバー間の多様な関係においても追求されていく。それは、家族は結成するものであり、メンバー間の対等協同の営みによって形成していくものであるということでもある。当然のことながら、メンバー各自の意思によって、離脱解散分割も生じる。

子産み・子育てにしてもそうだ。「家族計画」の作成決定、避妊の実施、出産の決断、子育ての決断と担当・分担の決定などの過程全体に、社会的慣習や法的規定が影響を与えるものであるが、当事者たちの合意と決定が基点となって、進められる。

合意としての決断にもとづいてスタートするにしても、その実行に責任を負い切ることが求められる。子産み・子育ては、時には親の自分自身の運命についての決断と一体になることがある。その点でいうと、祖父母が孫育てするのは大違いである。孫育ては責任性が低く、サポート役としての行動になることが多いからである。

同じようなことは、要介護の家族を誰がどのように担うのか、と言う問題、あるいは財産相続・分割をどう行うのか、といった問題にも生じる。

家族形成にかかわっては、保護・世話・介護などの問題が大きな問題として存在している。同様に扶養の問題があり、さらに異なる次元の問題として、家族文化の形成の問題がある。

こうした合意にもとづく家族の営みが多数集積していき、それらを基盤とし、かつ多様なそれらを包みこむ形で新たな社会慣習・法律を作っていく時代なのである。

7. 家族メンバー間の関係の更新・再契約 長幼秩序

家族の解散分割などが増えているなかにあっても、習慣として家族が持続しているとみえることが多いが、持続しているとみえるなかにあっても、メンバー間の度重なる決断が存在する。たとえば夫婦関係を「終生共にする」とスタート時点で決断していても、任意性・自発性をもとに合意で継続するものであり、習慣性はそれほどあるものではないので、離合集散の頻度は高い。

そこで、関係の更新・再契約が必要になることはしばしばである。とくに夫婦間に出産・子育て、介護のような新たな局面が生まれた時、そうである。また、20世紀後半以降、家族で移住する例が増え、移住を契機として、家族間の合意と慣習の更新・再契約を行うことはよく見られることだ。

長期にわたって継続する夫婦というのは、家父長制の名残りが強い場合は別にして、更新・再契約をすることが上手いといっってよいだろう。結婚当初は、恋とか愛というものが前面に出ようが、時間がたつにつれて、関係の更新・再契約が上手くなり、その過程が愛と結び合うようになる。なかには、愛が希薄で、妥協・我慢が上手い例もあるだろう。

こうした過程で、家族問題を含めて人間関係にかかわる長く続いてきた社会慣習・法律の妥当性が問い直されていく。とくにジェンダー秩序、長幼秩序をいかにしていくかが、重要問題として存在しているが、ここでは長幼秩序について考えていきたい。

長幼秩序には、年長者を尊重するという秩序、その逆に、姥捨てのように年長者を「不用」とみなし、ぞんざいに扱う秩序、あるいはそれらとは異なり、各世代各々の価値を認める秩序と、いろいろである。

それらを考える際に頻繁に登場するのが「有用論」、つまり「役に立つかどうか」という基準で考えることである。それに類するものとして、どれだけ経費がかかるかを問題にする「経費論」がある。他方で、それらとは逆に「いるだけで価値がある」とみる「存在論」がある。

近世期から戦後の今日まで、タテマエとして勢いをもっていたのは、年長者尊重論であり、「敬老」という言葉が象徴的だ。それを支えたものには、儒教とくに朱子学のイデオロギーがあり、江戸幕府や明治政府は、家父長制度の形で推進してきた。明治政府が推進した旧民法は、家長制度をとり、結婚さえ家長の承認を必要とした。そこでは、女性や子ども若者は、家長に服従する体制が作られてきた。これまでは、年長者尊重論と男尊女卑が結合してきたのだ。

こうしたありようをわかりやすく示すものに、年齢順で座る会合での席がある。そして女性が座るところは、末席にまとめられてきた。また、職場での年功序列もその例であろう。

近年では、「有用論」「経費論」によって、年長者尊重論が大きく揺さぶられてきている。

8. 長幼秩序 タテ型とヨコ型関係

前回述べた三つの長幼秩序のうちの二つ目、姥捨てのような「棄老」論は、その残酷さゆえに、表面化されにくいだが、客観的事実としては、広くみられることである。現代では、定年制、そして求人における年齢制限および高齢者の低給与がそうであろう。アメリカなどでは、かなり前から、定年制や年齢による採用制限などは、年齢差別（エイジズム）として禁止されてきた。

三つ目の各世代の価値を認める秩序は、タテマエとしては通用しても、実際は「棄老」論に近いものが広く見られる。

高齢者を尊重することはタテマエとして存在しても、実質としては厳しい現実が拡大してきているのだ。「人生100年時代」といわれるも、60代、70代から100歳代までの30~40年という期間にある人々を尊重し、存在価値を高めつつ、「有用」な活躍をしてもらう現実的な制度および動向は、きわめて未熟なのだ。

ところで、長幼秩序もその一つであるが、日本におけるタテ型構造は根強く、多様な人々が対等に相互尊重しあうヨコ型関係を基本にする市民社会を日本のなかに育てていく流れは、まだまだ弱い。そして、競争関係の強化がすすむなかで、ヨコ型関係ができそうなところでも、競争による実質的にタテ型の序列が生まれ、強化されているのが現実だろう。

たとえば、会社組織における実情がそれをよく物語っている。市場中心の社会は、ヨコ型のように見えて、競争の中で、タテ型の序列秩序を形成しているといえるかもしれない。

同様に、平等を追求しているように見える学校社会においても、激しい競争のためにタテ型秩序が強いままである。参加者の対等平等の参加を原理とするワークショップが学校のなかに広まらない原因を、そこに見る事も出来よう。唯一正解主義にもとづいて、子どもたちが「唯一正解」体系にどれだけ近づいたか、つまりはテスト点数による競争秩序を前提にした、授業スタイルが依然として大部分を占めたままなのである。

私が授業で、唯一正解がなく、自分なりの考えをお互いに交し合いつつ深めていくワークショップ型をすすめると、ほとんどの学生が驚き、最初は対応できずに困惑するけど、進行につれ、その楽しさと充実に感動的な対応することが、ワークショップ型授業が学校でほとんど行われていないことをはっきりと示す。

こんな意味で、会社も学校も、根底的に様変わりすることが求められている。

9. 自己の身体を自分でケア・管理調整していく

ここまで人生構図について、職業、家族、長幼秩序と見てきたが、今回は身体について述べよう。

歴史的に見ると、外側の権威あるものにしがたって、自己の身体管理をすることが通例であった。かつては、命は神仏からの授かりもので、神仏が身体の運命を決めるとして、神仏に祈ることが強く行われてきた。しかし、ここ百年余りの間に、神仏が西洋医学にとってかわり、それに政治とマスメディアが結びついて、身体管理を行い、自分自身は、それらが提示するものに従うことが求められるというように、権威主義のありようが様変わりした。

そのなかで、自分で自分の身体をケアしていく力と姿勢は強められず、西洋医学、たとえば薬とサプリメントに依存し、行政施策に従う傾向が強まっている。それらに不満を感じる時、グチをこぼすことにとどまり、結果的に西洋医学・行政・マスメディアに従属することになってしまう。

そのなかで、自分の身体のコトは自分が一番よく知っていると言われるが、意外に自分の身体について知らない状態が広く見られる。最近になってようやく栄養や運動に関心を持ち、自分なりに対応することが増えてきている。だが、そこに健康産業、医薬産業が巨大市場を見だし、テレビコマーシャルなどは、それらの広告に溢れている。そして、それらに依存する人を増やしている。

たとえば、日常の姿勢が、自分の身体状況とどうかわっているかについて自覚的である人は少ない。またメタボについて強力な情報提供や、医療管理がおこなわれているが、該当者の多くは、反応が鈍い。また、ストレス過剰、働き過ぎの日常生活が、身体上の問題を引き起こしていることに気がつきながらも、それらを改善し、自分なりの対応を成功

裏に展開している人は、それほど多くないのである。

その結果として、病に倒れ、そこで初めて本腰を入れる人が多い。その時には手遅れになっている人もいる。無論、遅くなったと言っても、身体上の問題を受け止めつつ、病をきっかけにして、前向きに対応を始める人も多い。

特に人生後半期となると、加齢に伴う身体上の問題が表面化しやすい。人生前半期では、上向きの流れ、エネルギー拡大の営みがみられるが、後半期ともなると、下向きの流れが基調となる。その下向き流れの速度をできる限り遅くし、身体上の維持管理の営みを主な流れにしていく。「無理がきかなくなる」ではなく、「無理をしない」ことが肝心になる。

さらに老年期になると、身体の手入れ、管理調整の具合が、健康や寿命に反映するようになってくる。そのことを自覚的に続けることが欠かせなくなる。それを怠ると、早期の身体不調を招いてしまう。

人生半ばまでは、外側にある「標準」「平均値」に合わせて、身体を管理調整しようとする人がいるが、半ばを超えると、自分の身体との語り合い共同作業をしていくことの上手下手で、老年期の人生が大きく左右されていく。自分の身体に合った健康法を編み出していく時期なのである。

10. 標準と自分なりの創造とのからみ

世の中には標準が充満している。その標準に合わせることにあくせくしている人は多い。流行に合わせるというのも、「標準に合わせることに乗り遅れない」ということだろう。個性重視ということが言われ始めて数十年たつが、標準に合わせるのに必死の人が圧倒的に多い。そんな空気が充満しているなか、標準を無視して生きることは大変だ。そこで、標準といわれるものへの対応に工夫が必要だ。

私流のやり方は、「標準を目安と捉える」ということだ。「標準に従う」というのではなく、自分なりの創造を軸にして、「標準を目安として活用する」のだ。それは、標準が設定する尺度が示す数値を活用する、ということになることが多い。

再び身体のことを材料にして考えてみよう。健康診断、特定検診、人間ドックなどで、たくさんの数値がでてくる。それをみて、一喜一憂するのだが、なかには重大事の可能性があって、精密検診をするようにいわれる。その多くの場合、赤信号よりは黄信号ないしは「異常なし」になることが多い。それらの数値は、まさに「目安」であって、その数値が示す意味を当人が理解して、対処が必要だったら対応し、不必要だったら無視することになる。長年、こうしたデータに付き合ってくると、経年変化がわかるし、自分自身の体調と照合して、どう対応したらよいかの知恵が生まれてくる。そんなふうにしていくと、担当医師より、自分自身のほうが関連情報を多く収集していることだって、よくある。

だから、西洋医学や行政が示す標準数値を参照しながら、自分なりのケア・管理調整していくことになる。ときには、医療機関の世話になったほうがいい、と判断することもある。無論、医療機関の検査・アドバイスが、自分の身体についての新しい発見をもたらすことがある。その点では、かれらとのコミュニケーションは有用だ。

こうしたデータには、医療機関によるものだけでなく、いろいろとある。数年前、気管支喘息に困っていたころは、大気汚染にかかわるPM2.5のデータが有効だったが、その大小で私の呼吸器が反応するからだ。私の呼吸器が快調になったこのところ、PM2.5のデータは気にならなくなった。コロナ対処のためか、大陸での空気環境がよくなったこともあるが。

加齢に伴う知恵は、身体にかかわるもので蓄積が進む。それに併行して、身体ケア・管理調整の知恵とワザも蓄積してくる。この2～3年、呼吸体操・姿勢矯正体操など色々な体操にはまって試みてきたが、その知恵はとても大きい。そして、その効果も大きい。そのなかで、個々の症状だけでなく、身体の色々な面・部位の連関関係にも気づいてくる。

こうして、現在の私流の健康法が形づくられてきたのだ。

生き方が変わる E

2022年10月6日～30日

1. モデルを目標にする生き方

ここで、生き方のモデルを設定して、そのモデルを目標にして、あるいはモデルに合わせて生きるというタイプについて考えよう。

子ども・若者に多いが、中高年でも見かける。企画立案・営業勧誘・事業推進など特定分野において、あるいはそれらを総合したもので、10年後の自分の目標イメージになる職場の上司などを目標にすることがよくみられる。また制作技術・デザインセンスなどで受ける刺激が強烈にある先輩などを持つ20～40代の人は多い。

自己紹介する際に、自分が目指す人、目標とする人などを示すのもその典型例だ。それに限らず、組織に登場する新人の紹介、あるいは選挙の立候補者の広報でも、尊敬する人を示すなど、色々な形で登場する。

偉人伝などがよく読まれた時期や、テレビが普及し始めたころには、豊臣秀吉、坂本龍馬、ジャンヌダルク、ニュートン、エジソン、キュリー夫人、湯川秀樹、大鵬、王貞治、美空ひばりなど著名人を目標とする人は多かった。だが、そうした目標設定には、現実的判断の点で未熟さが漂う小学生時期の話になりがちだった。

ここでは10代の半ばから後半の若者に焦点を絞ってみよう。かつてなら今あげたような人物を目標とする事例は、10代の前半から半ばまでには多かった。しかし、10代も半ばになるころからは、より現実的人物をモデルにする例に移っていく。学校が招いた卒業生の講話、部活のなかで著しい実績を残した先輩の話などを聴いたり、職場体験で出会った人や、テレビやインターネットで出会った人を見たりして、多少なりとも「自分もなれそうだ」と身近に感じた人を、目標とする人物に設定する例も多い。

なかには、親を目標とする子どもの例も多い。親がある程度の成功人生を歩み、社会的地位と尊敬を得ている場合、親を尊敬し、人生の目標とする子どもは結構いるだろう。親を見習って、家業を継ぎたいなどという例もある。かつて広く見られた職人の世界には、そうした例が多かった。仕事を一緒にしながら、親のワザを「盗んで」力をつけるというのである。

先に述べた「偉人」をモデルにするというのは、右上がりの時代で、「誰でも、頑張れば、そうなれるかもしれない」と思わせるような社会環境があった時代だろう。「立身出世」という言葉がよく使われたころだ。いまでは、そうした環境は著しく縮小しており、「偉人」を求める時代ではないようだ。また、80～100年前のように、ナショナリズムが盛んな時代で、アジアの覇者になる日本を背負える人になるという目標を持つ例は、現在では90歳代以上の人から時々聞ける話になっている。

今では身近な事例をもとに、モデルのイメージを持つ時代だ。そのなかで、親が最も身近な例を提供してくれる。親戚縁者のなかで、そうしたモデルを得ることもある。たとえば、看護師とか理学療法士とかの医療福祉職についている人をモデルにする例が、結構ある。しかし、親戚縁者の数が少なくなっている中で、なかなか得にくく、視野を広げ、多様なメディアを活用して、モデル探しをすることも多い。

2. 「一番になりたい」 競争・序列のなかに目標を見いだす人

前回話題にしたモデル例を見てみると、何かの世界で行われる序列競争での勝者、「一番の人」である例が多い。戦前でいうと、軍隊の「大将」、総理大臣、博士というイメージだ。戦後、それらの世界に、徐々にスポーツや音楽芸能分野が浸透していく。小中学生にとって、それがもっとも身近でわかりやすい目標となる。全国大会や全国的なコンクールがその場になる。そこで高い成績を得て、プロになっていくイメージが、子どもたちの中に生まれていく。といっても、そういう目標が「自分には無理」ということがわかってくる小学校高学年から中学生にかけて、そういう目標を、現実的レベルにまで下げていく、ないしはそうしたことから逃走していく。

具体的なモデルが得にくい場合、10代では、「〇〇歳のハローワーク」のようなものを、参考にすることも多い。だが、具体的にイメージがつかみにくい。そこで、当面は、どんな高校・専門学校・大学にいくか、という学校選択の形でイメージを得る。その際に、具体的な職業に直結した学科などに絞る事が難しいため、焦点化して絞られていない高校普通科を選ぶ例は多い。加えて、「普通科の方がいい」という価値判断が、この70年間ほどの間に定着してきたことがある。それは、判断を先延ばしするモラトリアム（猶予）ということでもあろう。

中学高校時期など、モラトリアムをしている期間には、「当面」テスト点数・偏差値で自分の位置を見つけることが日常的にさえなっている。1970年代に確立した、「偏差値の高い高校→難関大学→一流企業→会社内出世→退職」というストレターコース（私が名付けたもの）が広がり、一般化していく。その背景には、「一億総中流」感覚があった。沖縄では1980年代に広がる。

しかし、90年代半ば以降、終身雇用を歩む「正規雇用」が減少し、その道を歩む人数が厳しく制限されていく。そして、日本が「先進国」から脱落しそうな気配が感じられ始めた2020年代になると、個人の見通しだけでなく、社会の見通しさえ楽天的なものでなくなっていく。そこで将来を考えるよりも「今を充実させて生きる」という考え方が徐々に広がっていく。そこで、目標とする人をもたないで、「平凡に生きたい」などと応える若者もいるし、彼らは増加傾向にあるかもしれない。また、女性の「社会進出」が著しい近年にあって、逆に「専業主婦」になりたいという例も少なくない。また、学校卒業後の見通しがたたないまま、ずるずると決断延期になる例も多い。

そんななかであって、若者にしてもその親にしても、具体的にイメージしやすいのは、公務員や教員である。いずれも難関ではあるが、採用試験に合格すれば、なんとかなっていく。あるいは、看護師や理学療法士のような資格を得て、医療福祉関係職についていくことである。90年代から広がりはじめた資格取得は、10代後半から20代前半の若者たちの間では、2020年代の今ではごく普通の考えになっている。

3. 子どもの生き方と親子関係

若者の職業選択について、親子の考えの違い・ズレ・対立が表面化することが多い。その理由の一つとして、親は自分が幼少期若者期を送った1980～90年代にあったことで生き方をイメージするが、子どもにはそのイメージがつかめないことがある。

そこで、父母が自分たちのイメージを子どもに押し付けようとして、ズレが拡大し、悲劇を起こすことはしばしばだ。1980～90年代のイメージは、ストレターコースを歩んで、大企業社員、公務員、教員になることである。

親たちには、子育ての基準的なものとして学業成績・学歴に求めようとする。そして、学業成績で子どもを評価し、

さらには、学校や教師の仕事具合を評価する「癖」がしみ込んでいる例が多い。だが、その考えについていけない、ついていけない子どもが増えている。そこで両者の間にズレが生じるのである。そのズレの解消には、a.親子関係の崩壊・切断・希薄型、b.あくまでも、親が子どもを抱え込み続ける型、c.対立葛藤の末、密着関係を緩め、お互いに自由に生きあうことに落ち着く、と言った形がある。無論、いつまでも親に従っていく子どももいる。

こうしたズレなどは、とくに親が稀少価値のある職業についている時に起こりやすい。医師や大学教員などが典型だろう。大学教員の場合は、家業とはいえないが、開業医の場合、家業である病院診療所を継がせようと必死になる例をよく見かける。そこでは、親の地位、そして職業基準が標準化し、その高い標準が子どもにとって抑圧的メッセージを送ることになりかねない。

こうした親子関係を抜け出していくためには、子どもが親の存在を相対化すること、距離をおくことで、自分を守ることが必要になっていく。かつては、それを1～3年という短期間ですませる第二次反抗期というのがあった。しかし、いまや「わかりのいい」「やさしい」「友だちのような」親との関係で、対立が表面化せず、自立過程が長期になり、なかには、10年以上の過程になる例もある。

この問題は、子どもだけの問題ではなく、親にとっての「子離れ」の課題であり、それを達成することが必要になる。自己の正しさにしがみつき、子どもが親の言うことに従うことを求め続けることは、「子離れ」できないことであることを理解していない親は、結構多い。

この「子離れ」の時期は、かつては40代を中心としていたが、親になる時期が遅くなってきた近年では、50代になる例が増えている。時に60代になる例もある。それは、人生後半期に入っているだけでなく、場合によっては、「老」の時期に近づいている。いずれにしても、新たな人生を作る時期である。「子離れ」をめぐる「格闘」を通して、人生の新たな時期を作り出すと言ってもよいだろう。

4. 時代変化と生き方変化

前回、世代が異なる親子間の違い・ズレ・対立について述べたが、それは端的に言って、日本では、数十年続いた右上がりの時代が20世紀末に終わり、経済の定常化ないしは縮小の時代に入ってきたことが生み出した違いもかかわるといえよう。いまや、日本は「先進国の尻尾に位置づき、先進国からはずれかかっている」とさえ言われる時代なのだ。

そのなかで、たとえば、子ども若者にしろ、人生後半期にいる親の世代にしろ、自分個人としても、右上がりの中で考えるのではなく、「ごく普通に生きること。夢とか希望とかを語るというよりも、穏やかに生きること」を求める空気が広がっている。右上がりイメージから距離を取り卒業すること、といってもよいだろう。

競争に打ち勝って幸せを勝ち取るというよりも、「落ち着ける」「安全安心」のなかで、人間関係を築き、自分なりの人生を歩むというの、その一つだろう。そこで、自分なりに楽しめる世界をつくり、そういう人生にするのだ。それらをロハス・スローライフと表現する人もいよう。「持続可能性」を保障する生き方もいえよう。それは当然「経済の持続可能性」ではなく、「地球」の、「人類」の、「人々」の持続可能性である。

現在の子ども若者の多くは、そういう世界に最初からいる場合が多いだろう。しかし、人生後半期にいる親世代にとっては、若いころにひたっていた右上がり空気のなかで、社会全体だけでなく、個人としてのそれまでの自分が崩れるなかで、ないしは崩しつつ、新たな自分を作る時代なのである。そこでは、当然のことながら、「一つの人生」を貫くという時代ではなく、「複数の人生」をつくりつつ生きることを意味する。

そうした動向の中で、人気がでてきたのは、確かな、あるいは手触り感のあるモノづくりやつながりづくりの世界である。モノづくりでいうと、工芸に関心を寄せる人々の広がりが目される。料理やお菓子づくりなどもその例だろう。

つながり作りは、福祉系心理系、そして長く人気上位の座をしめてきた教育系があるだろう。また、接客系に関心を寄せるものも多そうだ。

5. 少子高齢化のなかでの生き方の変化

現在の子ども・若者たちは、すでに進行している少子化の中で生きてきた。大量人口のなかで生きてきた現在の大人たちとは、かなり異なる条件のなかで生育してきたのである。

現在の大人たちの多くは、大量人口もかかわってつくられた大量競争のなかで頑張り生き抜いてきた。それとは対照的な事態が、現在の多くの子ども若者を包んでいる。たとえば、大学入試は、いまでは半数近くの大学が定員割れに近い事態の中で、必死に受験勉強をして入学してくるものもいるが、かなりがそうでもない事態のなかにいる。そんななか、「自分なり」の選択で、進路や就職を決める若者は増えている。こうしたなかで、「自分なり」とは具体的はどういう形をとるのか、そのことをめぐる模索は一層深まっていくだろう。

また、非正規職が増えている事と結びつきがありそうだが、結婚・家族形成の道を取りようがない若者、あるいはあえて取らない若者も増えているのだ。

こうした中で、若者の生き方はどのように変化していくのだろうか。さらには、10年後、20年後の中年層の生き方はどのようなものとなっているのだろうか。

こうした変化、つまり歴史的に経験したことがない変化は、すでに老年期において始まっている。かつての老年期への区切りであった60歳、65歳を過ぎて、20～40年と生き続けることのなかで、その期間をいかに過ごすのか、というテーマが、例外的な人だけでなく、ごく普通の人達にもあらわれてきた。今までの延長線上で、雇用延長や趣味生活で対応できるレベルを超えている。

このあたりについては、別の連載の「老」で論じていきたい。